

ペルソナ4 有里湊のif 世界での物語

雨扇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

P3終了で眠りについた有里湊。気がつくと二年後、つまりP4の時の「もしもの世界」にきてしまった。

新たな戦いに巻き込まれる湊。新たな舞台で新たな一年の物語が始まる。

「P3主人公がP4の物語に介入したら？」という簡単な話です。

番長もちやんとこっそりコミュ活動してますが、こちらでは湊を中心としたコミュ活

動をお送りします。一部P4本編とコミユの人が違います。

バイト関係とかそこら辺が違います。

ペルソナチェンジはもちろんしますが新たなペルソナが出るタイミングは最初のコミユのあとからです。

説明ばかりだとわかりづらいところがあるかもしれないのでさっそくどうぞ。ゆっくりのんびりと読んでくれたら嬉しいです。

マリーは今回は出ない方向で。ごめんマリー。もし番外編とかあったら出すから。

(追記)「番外編とかあったら」とか言っただけで製作決定いたしました。本編には入りきらないそれぞれのコミユを全てそこに入れます。コミユ獲得は本編で、それ以降は番外編という感じです。

もちろんただの番外編もあります。作ったらまた追記しますので読んでくれると嬉しいです。

(追記2) 番外編作りました。本編と合わせて更新予定なのでこちらも読んでくれると嬉しいです。

番外編では詳しい日時は書きませんが、本編ではー(〇〇コミユ)みたいに書いてるので是非合わせて読んでください。(二つとも読んでもらおう作戦)

目次

本編お気に入り1000件記念の番外編	1
本編お気に入り2000件記念の番外編	11
プロローグく異様な商店街	16
プロローグ	19
4月11日(月) ～ 4月12日(火)	26
4月13日(水) ～ 4月14日(木)	26
4月14日(木) ～ 4月15日(金)	26
雪子姫の城	40
4月15日(金)	40
しばしの日常	89
4月18日(月) ～ 4月19日(火)	80
4月17日(日) ～ 4月18日(月)	68
4月15日(金) ～ 4月17日(日)	99
4月19日(火) ～ 4月24日(日)	99
4月25日(月) ～ 4月29日(金)	99

105

4月30日(土) ~ 5月2日(月)

114

5月3日(火) ~ 5月13日(金)

120

熱気立つ大浴場

5月14日(土) ~ 5月17日(火)

131

5月18日(水) ~ 5月19日(木)

141

5月19日(木)

日常回2

5月19日(木) ~ 5月23日(月)

151

165

5月24日(火) ~ 5月31日(火)

175

6月1日(水) ~ 6月6日(月)

183

6月7日(火) ~ 6月12日(日)

192

6月13日(月) ~ 6月16日(木)

201

6月17日(金) ~ 6月18日(土)

209

6月18日(土) ~ 6月19日(日)

222

特出し劇場丸久座

228 6月19日(日) ～ 6月21日(火)

6月22日(水) ————— 240

254 6月23日(木) ～ 6月24日(金)

267 6月25日(土) シヤドウリせ戦

285 6月25日(土) シヤドウクマ戦

日常回3

294 6月26日(日) ～ 7月9日(土)

303 7月10日(日) ～ 7月11日(月)

本編お気に入り100件記念の番外編

僕は「誕生日」を祝われた事なんて数えるほどしかなかった。最近――みんなにとつては最近ではないのだが――だと活動部のみんなに祝ってもらったくらい。初めて、「祝われる事の嬉しさ」を知った瞬間とも言えた。

◇◇◇

放課後。違和感はすぐに感じた。捜査隊のみんなだとすぐに分かった。

「陽介。一緒に帰らない?」

「わ、悪い湊! きよ、今日はすぐに帰らねえといけないんだ!」

「悠は?」

「俺もなんだ。悪いな湊」

かなりソワソワしている陽介に比べ、いつも通り落ち着いていた悠。天城も里中もソワソワと言うかハラハラしていたし、完二なんて普段「お手伝いとかめんどい」とか言っていたのに――文句を言いつつも結局はやるけれど――今日に限って、

「オレ今日だけはお手伝いするって決めてるっすよ!」

と「今日君の母さんは死ぬのか?」とでも訊いてしまいうくらいの無理な言い訳で無理

矢理帰っていったのだ。陽介も分かりやすかったが、完二はもつと分かりやすかった。

「ごめんね湊先輩。今日は一緒に帰れないの。お店の手伝いしなくちゃいけない……」

りせを誘ってもやんわりと断られた。りせは演技力凄いから最初の頃はよく騙されたなあ。悠はすぐに見破る技を身に付けたらしい。

「す、すみません。今日僕は協力を頼まれてる事件に行かなくてはいけないので……し、失礼しますっ！」

直斗に訊いても断られた。

一通り訊いた結果。……何か隠してる。陽介、里中、天城、直斗。ここら辺が何か変にキョドってる。てかいつも冷静な直斗がキョドってる時点でアウトだと思う。

さて、どうするか。この後は一日暇なのだ。

◇◇◇

……何か視線を感じる。

「……ターゲット、ジュネスに向かう模様。はあ!?! さつさと済ませて早く出てこい！」

陽介よ。声丸聞こえだ。バレバレだ。

「ジュネスから出たか? よし、そのまま悠ん家で菜々子ちゃんと合流。急いで作れよ

?」

だから丸聞こえだつてば。そう言えば完二の時もかなりバレバレだつたつて直斗から聞いたことがある。もつとも、この時は直斗はまだペルソナについて全然知らない時だったので僕たちの行動が意味不明な行動だと言われても仕方ないのだが。

陽介たちは僕に何をしてほしいのだろう？ どこかに行こうとするとヒヤヒヤするし、立ち止まっていると何か「今の内に！」とか聞こえるし。……ボーツとしてほしいのかな？

ジュネスを出て本屋に向かう。適当な雑誌を手にとって読む。これならばらく暇潰し出来るだろう。

ちなみにジュネスでクマと会ったが子どもが群がっていたので話しかけるのを諦めた。

◇◇◇

「……あつ！ や、やあ湊！ 偶然だなあ！」

「そーだね。陽介」

意外と立ち読みで時間を潰すことが出来た。後ろに隠れていた陽介がとても暇そうにしていたのがかなり分かる。特捜隊のみんなよりもシャドウとの戦闘をこなしてきたからこういうのは多少ー本当に多少ー出来るのだ。

「で？ どうしたの？ 早く帰らないといけないって言ってたけど」

「えっと、もうその用事は終わったんだ！　そ。そうだ！　湊も悠ん家来いよ！」

急にどうした。てか僕の腕掴まないでよ。「やだ」って言っても絶対行かせる気だよねコレ。

「わかったから。腕から手を離してよ」

「おっと。悪い」

◇◇◇

家の前につくと陽介が「電話するから待つてて」と言われたので少し待つ。何か「もういいか？　大丈夫だな？」と念入りに確認の声が聞こえたけどあまり気にしなかった。

「よし……じゃあ、入るか」

背中を押されて僕から入る。部屋の明かりはついていなかった。現在もうそろそろ暗くなる時間なのに明かりがついていないのは少し違和感があった。

「……………」

急に電気がつく。油断していた僕は急な明かりに目が若干チカチカした。そしてクラッカーの弾ける音。そして……。

「お誕生、おめでとー!!」

みんなの声が聞こえた。目が慣れ、辺りを見渡すと捜査隊に菜々子ちゃん。マリーマ

でいた。ちなみに堂島さんは仕事らしい。まあ、何かあるとは思っていたけど……。

「そっかあ。僕誕生日今日か。すっかり忘れてた」

「忘れてたのかよ!? よかった。前に訊いておいてよかった!」

陽介のとてもホツとする声が聞こえた。確かに。今回は陽介が事前に僕に訊かなかつたらなかつた事だよな。

「湊お兄ちゃん! たくさん料理用意したんだ。一緒に食べよ!」

「うん。そうだね」

「ハンチョー!! クマがとつてあげるクマーっ」

悠によれば、女子たちが作ろうとしたから必死に止めたらしい。料理は買ってきたものだとおっしゃっていた。僕はかなりホツとした。誕生日にあんなムドオン料理は食べたくない。

テーブルには豪華な料理が並べてあった。ジュネスで買ってきたものや悠が作ったものなど。なるほど、僕がジュネスに行くときに陽介が焦っていたのは鉢合わせする可能性があったからか。納得。

◇◇◇

食べ終わって一息つくと陽介が「プレゼント渡すぞー」と言った。僕は何も聞いてないぞ。……サプライズだから当然か。

「えっとじゃあ俺から」

悠から受け取った小さな箱を開けるとイヤホンが入っていた。

「湊。よく音楽聴くだろ？ だから新しいイヤホン」

「ありがとう。そろそろ欲しいって思ってたところだ」

お礼を言うとう悠は嬉しそうに頷いた。次は陽介。

「イヤホンもいいけどヘッドホンも良いんだぜ！ という事で俺からはヘッドホンだ」

青色のヘッドホン。陽介によるとメーカーはお揃いの色違いらしい。そうだな、たまにはヘッドホンでも……。

「次はあたし！ どーぞ！」

『成龍伝説』のDVD……」

「君もこれでレッツカンファー！」

ものすごく里中らしいプレゼントだ。だからと言ってレッツカンファーはしないけど。

「じゃあ次は私だね」

天城が渡したのは一枚のクーポンだった。

「ウチの旅館の値引きクーポン。最近作って試験的に常連さんに渡してるんだ。よかつたら使って」

「お金貯まったら、ね」

時間の関係が少しあったので多少スピードアップした。

完二はお手製の編みぐるみ。相変わらずクオリティは凄い。

「有里先輩も一緒に作らないっすか？」

「僕不器用だからー」

「絶対嘘だろ」

陽介につっこまれたけど気にせず次。

りせは群青色の綺麗なストラップだった。

「直斗くんは青が似合うでしょう。湊先輩が群青。大変だったんだからっ。……でも、どっちもクールでカッコいいよね！ あ、もちろん一番は悠先輩っ」

「次」

直斗は手作りの通信機だった。とても小型でシンプルだけどとても凄そうだ。

「これでいつでも連絡とれますね」

「何を尾行しようと企んでるの？」

「ハンチョー、次はクマクマ」

クマから渡されたのはクマそっくりな編みぐるみ。

「完二が作ったの？」

「クマ公に頼まれたんすよ。『ハンチョーにプレゼントしたいクマ』って」

「カンジに真似されても嬉しくないクマ」

「んだとコラ！」

「でも嬉しいよ。ありがとクマ、完二」

次は菜々子ちゃんとマリィ。二人で一つにしたらしい。まあ、マリィはそもそもお金持っていないのでいい判断と言えそうなるかもしれない。

「はいコレ」

パンダみたいで丸っこい動物のストラップだった。かわいい……かもしれないが正直どこがかわいいのか分からない。

「わー これかわいいー！」

女子たちがそう騒いでいたのでそうなのだろう。

「マリィ。これは？」

「ストラップ」

いや。それは見れば分かるさ。僕が知りたいのは「何の」ストラップなのかだ。

僕の考えることが何となくわかったのか、菜々子ちゃんが代わりに答えてくれた。

「これね。うーぱって言うんだよ」

「ゲホッゲホッ!!」

完二とりせが急に咳き込んだ。けどそれより僕が気にしているのは……。

「うーぱ……」

「そうそう。うーぱ。かわいいからプレゼント。しかも「メタルうーぱ」

「ゴホンゴホン!!」

「おい二人の咳き込みが酷くなったぞ!」

「そ、それ以上そのストラップの話題に触れないでください!」

背中をさすつてる陽介と直斗が注意する。確かに僕もこれには危機感を感じた。何か……デンジャラスな匂いがする。

◇◇◇

ひと騒ぎあったが、無事にパーティーは終わった。菜々子ちゃんは先に寝て、僕たちは片付けして外に出た。

「今日はありがとう。楽しかった」

「そりゃよかった」

「じゃあ、また明日!」

「またねー!」

解散時間が夜中になっても、僕たちは疲れなんてなかった。それほど、楽しかったから。

こんなに楽しい誕生日はとても気持ちのいい感覚だ。この世界のイレギュラー的存在

在の僕でも、この時ばかりは、この世界に……みんなの輪の中にいるのを許されている気がしたんだ。

「来年も……みんなと一緒に誕生日を、祝いたいなあ」

気がついたらそう呟いていた。それに気づいた僕は苦笑いして家の道のりをゆつくりと歩いたのだった。

本編お気に入り200件記念の番外編

ある日。もう少し具体的に言うのであれば「完二救出前のテスト後」だ。

「……花村」

「……はい」

二年二組の教室にて、花村だけ椅子に座っている。僕は花村の横に立ち、他の三人は窓際で様子を伺っていた。

「テスト結果が出たね」

「……はい」

「事件のことが気になるのもわかる。僕だって気になるから。けど、けどね」

「……はい」

さつきから「はい」しか言わない花村。オロオロとしてる三人。とりあえずチョップしたい僕。でも手が痛くなるからやめた。

「僕は花村に勉強を教えてきた。鳴上、天城だって協力してくれた」

「……ウツス」

「あ、変わった」

「流石にはいだけじゃ面白くないと思ったのかもな」

「花村やるねえ」

能天気な外野は放っておく。

「僕が言いたいのはたったひとつ」

「……」

「何で紙ぐしやってしたり寝たり、最終的にバックレたんだっ」

「三つじゃねーかっ！」

「まとめたらひとつ」

やっぱり花村はツツコミ体質。ボケたわけじゃないけどそんな感じの僕の発言につつこんだ。

「鳴上、その紙の束の数字読み上げて」

ちらつと紙を見た花村。さあーつと顔色が悪くなつていく。

「そ、それは……俺の答案用紙!!」

「はい。読み上げてもらいます」

「鬼っ!」

学年一位の僕に文句言えんのか、と言ったらさすがに黙った。後ろの女性人からもえげつないという声が聞こえた気がしたが気にしない。甘やかしちやダメなのだ。

教科は古典、数学、現代文、物理、日本史、英語。

「古典50点、物理55点、日本史66点」

「ここまでがちゃんと受けてた。どの教科がちゃんと受けてあの教科がサボったつてのは一からチエツク済みだから」

「あ、あたしより上のがある……」

「花村くんって暗記得意？」

「いや、やったらこうなったー痛っ!?!」

手が痛くなるから止めておいたチョップをやっぱりすることにした。前言撤回。やったらこうなったつて必死に暗記したみんなに謝れ。

「……まあいい。問題は残りだ」

「……」

花村は恥ずかしいのかうつむいている。

「……」

「有里、そろそろやめたら？ 花村も反省していると思うから……多分」

鳴上、それはフオローじゃない。

……仕方ないか。なんやかんやで花村には借りがあるしね。

「もう五時半かー」

「……?」

「早く帰らないとなーでも今日の夜ごはん買っていないなー誰か奢ってくれないかなー」

見事な棒読みだ。チラツと花村を見る。ポカンとしていたけど僕が言いたいことがわかったのだろう。

「しゃーねーな。俺が奢ってやる！早く行こーぜ！」

「え？え？」

「??」

里中と天城はよくわかってないようだ。二人のことは鳴上ー彼は早々に気づいたらしいーに任せ僕と花村はジュネスに向かった。

◇◇◇

「ホント鬼だよな有里って」

「そりやどうも」

「褒めてねえ」

ジュネスのフードコートでピフテキを食べつつ花村と話していた。

「花村はちゃんとやれば出来る平凡タイプなのに」

「何だよ平凡タイプって。悪口にしか聞こえねえ」

僕は花村の近くに一枚の紙切れを置いた。答案用紙——先程花村に返した——の点数をちやっかりメモったのだ。

「いくら僕が鬼だとしてもさ」

「……サーセン」

——数学15点、現代文20点、英語0点（英語に関してはサボっていたため、後にちゃんと受けて参考点扱いで22点）

「これは文句言えないよ」

全部平均点より下だけどサボらない順平の方がまだマシだと思ってしまっただった。

プロローグ 異様な商店街 プロローグ

——僕「有里^{ありさと}湊^{みなと}」はニユクスを封印し眠りについた……はずだった。

「お客人。意識ははつきりとなされておりますかな？」

気がつくとりムジンの中にいた。ソファに座っていて、テーブルをはさんで前のソファにはよく見た老人がいた。

「……久しぶり？ イゴールだよね」

「はい。しかし、私にとっては『久しぶり』ではなく、『はじめまして』なのです」

僕はイゴールの言葉の意味がよくわからなかった。ふと、視線を右にやると見たことない女性がいた。雰囲気のエリザベスに似ているから悪い人ではなさそう。

そんな視線に気づいたのかイゴールは女性に自己紹介をするよう促す。

「お初にお目にかかります。私はマーガレット。エリザベスの姉でございます」

「やっぱり。……雰囲気似てたから」

「別世界の二年前での戦いではエリザベスがお世話になりました」

今、謎の発言に感じた。別世界？ 二年前？

僕はイゴールに説明するよう視線で訴える。

「この部屋の『ルール』で完全な回答をお教えすることは出来ませんが、それでも一つだけ言うのなら……『ここはif世界』とだけでございます」

「if……『もしもの世界』ってこと？ パラレルワールドみたいな感じ？」

「左様でございます。『契約者の鍵』は引き続き使えるようにしてあります。後は……貴方様の運命次第」

イゴールは机にタロットカードを並べる。以前初めて会った時もやっていた。

一枚引く。——「愚者」のタロット。

「新たな出発。のようですね。さて、二枚目は……」

「塔」のタロット。

「ほほう。どうやらお客様はまた何やら事件に巻き込まれるかもしれないようですな」
僕は少し興味があり、ゆっくりと一枚適当に引いてみた。

アルカナは「月」。

「……どうやら、貴方『迷い』もしくは『不安』があるのでは？」

「……別に」

マーガレットに見透かされたような目で言われてつい僕は動揺した。……そんなことは、思っていない。

「もうお時間のようだ。それでは、またお会いしましょう」
ここで僕の意識は途切れた。

まだ頭は混乱しているけど、ほんの少しはわかった。

ここは「もしもの世界」で先程のイゴールとマーガレットはこの世界の住人。だから「はじめまして」。

さらに時は経っていた。二年後ーつまり2011年。

“契約者の鍵”が使えるってことはまた新たな戦いがあることを意味する……かも
しれない。流石に疲れたなあ。

とりあえず、どうにでもなれ。だ。

4月11日(月) ～ 4月12日(火)

4月11日。月曜。

僕はとあるマンションの一室。マーガレットから用意された僕の家だ。お金は一ヶ月分だけもらった。

これ使い終わったら？ ……バイトするしかない。つまり放り出された状態だ。

「明日から八十神高校二年生、か。ちよつと複雑だな」

段ボールの中に入ったバックや制服を見つめる。ついこの前まで二年生なのにまた一年間二年生をやらないといけないなんて……正直めんどくさい。

そろそろ正午になる。僕は商店街をうろつく。最近デパートの「ジュネス」が出来たせいで収入が危ういとのこと。店をたたむ所が増えてきたらしい。

「愛屋」の近くにある掲示板を見してみる。バイトの募集は4月23日からだそうだ。「金の援助がない以上、バイトを出来るだけ多くこなすしかないよな……」

ため息を一つつく。本屋が南側にあるようなので行ってみることにした。

「らっしやーせー」

ガソリンスタンドの方から声が聞こえた。客がきたのだろう。店員の張り切る声が

耳に入ってきた。

「どこかお出掛けで？」

「いや、こいつを迎えに来ただけだ。都会から今日越してきてな」

「都会……か。懐かしいな」

僕は今日越してきたという「彼」を見る。とても落ち着いた感じの人だ。高校生……

二年生かな？　彼と店員が握手した。

「……」

「だいじょうぶ？　乗り物よい？　ぐあい、わるいみたい」

急によるめいた彼は小さな女の子に心配された。大丈夫だと言うけれど明らかに辛

そうだった。

ガソリン入れも終わったらしく三人は車に乗って去っていった。

「やあ。君も見ない顔だね。引越してきたのかい？」

……あ。かなり長居し過ぎたせいで店員に目つけられた。

「ええ。まあ」

「都会から来るとなーんもなくてビックリつしょ？　実際退屈すると思うよ」高校の

頃ついたら友達ちんち行くとかバイトくらいだから。ウチ、今バイト募集してるんだ。

「学生でも大丈夫だから」

そして店員は僕にも握手を求めてきた。

握手した後の彼の反応から見るに何かあるかもしれないと少し思っていたけど……まだ確証はない。前の世界での、勘だ。

でもまあ握手を拒む訳にはいかないので僕は握手に応じる。

「考えておきます。ちようどバイト先探してたんで」

「それはよかった。……」

店員は握手した状態のまま少し固まっていた。目線は僕に向けられたまま。

「あの」

「ああ。ゴメンね。よかった、是非考えといてね。それと……これは一人言だから」

そういうのは聞いてくれてパターンの思うんだけど。そこは気にしなくていいのかな？

「……君か、〃別世界〃から来たのは」

「ー!?!」

「……ああ、ごめんごめん。一人言だから気にしなくていいよ。ホントホント。別に何の意味もないから、じゃ」

店員はにつこりと笑って店の方に戻っていった。

僕は……しばらく動けなかった。動揺で、上手く思考が回らなかった。

もしかして綾時みたいな存在かもしれない。　　と思った。

「まー戦う気がないならいつか」

僕は特に気にする様子もなく昼ご飯と夜ご飯をまとめて買って家に戻り、片付けの続きと明日の準備をした。

「彼とまた会えるかな。話が会う人かもしれないから」

確証はないけれど、そんな気がした。



4月12日。火曜日。

八十神高校の職員室に行くと手招きされた。諸岡先生が担任の二年二組のクラスに入るようだ。近くに行くともう一人生徒がいた。

「あ」

「こいつも転校してきた奴だ。転校生同士仲良くするんだな」

「どうも。鳴上なるかみ悠ゆうです」

「有里 湊。昨日ガソリンスタンドで見た」

「そうか」

諸岡先生についていって二組の教室についた。先生の後に続き鳴上が入って僕も入った。

「落ち着けー！ 不本意ながら転校生を二人紹介する。ただれた都会からへんぴな地方都市に飛ばされた哀れなヤツ。いわば落武者だ」

あ。僕も都会からの設定なんだ。まあ合つてると言えば合つてるけど。それにしてもこの人口悪いね。落武者つて言われたよ。絶対嫌われてるよ諸岡先生。てかこそと「モロキン」とか聞こえた。モロキンがあだ名なんだね。

「鳴上悠です。よろしく」

「有里湊。よろしく」

このあと先生から何か言われかけたけど緑のジャージの女子から助けられ僕と鳴上は席に座った。鳴上は先ほどの子の隣で僕はその前の席。

座ると声をかけられた。先ほどの女子だ。名前は「さとなか里中 ちえ千枝」というようだ。元気さだとゆかりに負けてないかも。

『全職員・生徒にお知らせします。学区内で事件が発生しました。通学路に警察官が動員されています。それに伴い緊急会議を行いますので至急職員室までお戻りください。』

また全校生徒は各自教室で待機、指示があるまで下校しないでください』

急にこんな放送があつて教室中はざわざわとし出した。

先生が教室を出たあと里中ともう一人、僕の隣の女子が話始めた。

「はー……いつまでかかんだ」

「さあね」

「あ。そういえば『雪子』、前に話したヤツやってみた？ 「雨の夜中に……」ってヤツ」

「あ、ごめんやってない」

……眠たい。いくら「影時間」がなくて早く寝れるとしても僕はいつも眠たくなる。寝たい。

女子達の会話の中で気になるワード、「雨の夜中に……」があつて訊きたかったけど……。

「あ、有里くん。寝ちやったね」

隣の雪子と呼ばれていた女子が言った。僕は眠気に負け、しばらく寝ることにした。



「おーい、有里起きろー！」

誰？ 確かいつも学校では順平が起こしてくれるけど……。順平の声じゃない。

「もう少し……」

「もう帰らないと暗くなっちゃうよー!」

今度は聞き覚えのある声でした。……あーそうだ。里中だ。顔をあげ周りを見る。「もう帰っていいってさ」

三人いた。里中と鳴上、そして「花村はなむら陽介ようすけ」

赤の人は先に帰ったらしい。名前は「天城あまぎ雪子ゆきこ」と言うようだ。「天城屋旅館」という旅館の一人娘のようだ。

「さ、帰ろっ!」

有里湊。さっそく友達と呼べる存在が出来ました。

4月13日（水）　　4月14日（木）

4月13日。水曜日。

音楽を聴きながら歩いていると花村の声が聞こえた。「おわッ!!」って言ってた。

特に興味は無かったけど見てみると頭からゴミ箱に突っ込んでいて、その状態を鳴上に助けられてた。あのままの方が面白かったと思うよ。

花村は……順平ポジかな？　順平にもあんなことがあったような気がする。

あれは夏休みのこと。あ、勝手に回想っぽくいくから。

「おーい湊！　ゆかりっち！　早く早くー！」

「順平早く過ぎだつてー！」

「眠い……」

「ちよつと有里くん自転車乗った状態で寝ないでよ!？」

「有里くん、もうすぐだから頑張つてね」

「変わりにペダルをこぐでありますか？」

「もつと危ないから駄目！」

二年生組（アイギスは歳はアレだけど後に二年生の学年に入ってきたので）で少し遠

くに自転車で行こうということになって出掛けていた。

まあ、影時間のことや夜だと普通に注意を受けてしまうとのことで美鶴先輩からあまり遠くに行きすぎるな、と言われたのでそんなに遠くには行かなかつた。

簡単に言うるとサイクリングみたいな感じだ。少し遠い公園に行くだけ。でも何故かそれでも順平は張り切っていた。

「ほら湊も早く行くぞー!」

「順平、前、前」

順平の前に電柱、そしてゴミ箱。花村の状況とほぼ同じだった。

「えっ、うわあ! ……おわッ!!」

「ほーら言わんこつちやない」

「順平くん大丈夫……?」

「順平なら問題ない」

「自転車は無事であります」

「風花以外もつとオレに優しくしろよ……」

という事が昔あったのです。

……やっぱ順平と花村って似てるよね?

残念さが。

回想終了。隣には合流した鳴上と花村。

「つまりその昔起きたことと俺の時間が似ていたと？」

先程の回想、名前と時間帯は所々伏せて二人に話していた。何時なのかは……登校中。

「似ていたと言うかはそっくり」

「確かにそっくりだな」

「確かに状況は似ているかもしれないけどよ……」

「主に残念さ」

「あー、そっちな」

「残念さって何だよ……」

教室につくと花村からご飯を食べに行こうと誘いがあった。鳴上は今日助けてくれた礼も兼ねて、この町八十編羽に来た歓迎だと言っていた。

すると里中が「あたしにはお詫びはないのか」と花村に迫ってた。

「里中と花村、何があつたの？」

「千枝がね、花村くんに『成龍伝説』っていうDVDを貸したんだって。でも壊しちゃって。そっか、昨日有里くん寝てたから知らなかったんだ」

「そうなんだ」

そんなこんなで花村は里中にも奢ることになりました。

ちなみに天城は来なかった。太るのと家の手伝いがあるとか。

◇◇◇

放課後。

やって来たのはジュネスだった。ビフテキを奢るつもりだったらしいが里中にも奢るならそれは無理だとのこと。たこ焼きを変わりに奢ってくれた。

里中とのちよつとした口論のあと、僕と鳴上に花村が自分のことを話してくれた。

このジュネスの店長の息子だと。半年前にこの町に家族揃って引越してきたらしい。

こりや厳しい境遇だな。僕が商店街を歩いているとたまに聞こえた。「ジュネスへの恨み言」を。「ジュネスがなければ家の経営は安泰だったのに」とか「ジュネスがなければ」系が多々あった。

S. E. E. Sメンバーで言うのと美鶴先輩と同じ悩み……だろうけど正直花村の方がまだマシなのか。

「あ。先輩だ。わりい、ちよつと席外すぜ」

そう言つて花村は先輩と呼ぶ女性の元へと向かった。名前は「小西 早紀」と言うらしい。家は商店街の酒屋さんで経営が苦しいからジュネスでバイトをしている……。

「里中、ジュネスってバイト出来るの？」

「えっ、フツーに出来るんじゃない？」

「有里バイト探してるのか？」

「うん」

「ここバイト代いくらかな……。花村に今度頼んでみようかな。あ、小西先輩がこつち来た。」

「うーす、都会つ子同士はやっぱ気が合う？ こいつこつちに越してきたばつかで友だち少ないからさ。仲よくしてやってね。花ちゃん、お調子者でイヤツだけどウザかったらウザいって言いなね？」

「いや……。イヤツだよ」

「うん。たこ焼き奢ってくれるからイヤツ。あ、花村たこ焼きもう一個」

「あははっわかってるって冗談だよー！」

「ちよ、先輩もおまえらも！ 何言つて……。つてか有里お前食べ過ぎ！ もつと遠慮しろつて」

「前奢りと言われてハンバーガー大量に頼んでそいつの財布軽くしたことがある」

「こわっ!! 俺にはするなよ？」

「たこ焼き」

頼むと「しょうがねーな」と言つて持つてきてくれるのが花村のいいトコだと思う。

順平も結局は奢ってくれたから。だから、花村はイヤツ。これ決定事項ね。

小西先輩は休憩時間が終わったとかで去っていった。

「そうだ。花村は知ってるよね。だから、お二人さん。……『マヨナカテレビ』って知ってる？」

◇◇◇

『マヨナカテレビ』とは。

雨の夜の午前0時に消えてるテレビを一人で見る。すると画面に映る自分の顔を見つめていると別の人間がそこに映ってる。

それが、『運命の相手』だと言われている……。

◇◇◇

つまり……影時間のテレビバージョン？ 何でテレビ？ 何で0時？ 謎過ぎる。

花村は完全に信じていなかった。……僕もあまり信じてないけれどね。

「有里くんもね！」

「……えっ、何が？」

急に名前を呼ばれビクツとしてしまった。里中のオーラが何か怖い。

「今夜の0時に実行！ みんなでね！ いい！」

「う、うん……」

「よし決まった。試してみてもよね。絶対だよ！」

何か……急に今日久しぶりに0時まで起きることが決まった。

三人と別れた帰り道。0時までやることがない。強いて言えば読書くらい。それだとすぐに終わってしまうので散歩しながら帰る。

ここに来たばかりの時はあまり散歩してなかったから、今はちよいどいい頃だ。鮫川の河川敷にでも行ってみよう。あそこはたまに少年野球のバット振りやキャッチボールの練習場になっているらしい。

「いーちー！ にー！」

丁度今日だったか。少年たちが一生懸命素振りしている。コーチらしき男性が「体全体を使って振るべし！」とか言ってる。

「ジュンペー！ 素振りつまんねーよキャッチボールしよーぜ！」

「馬鹿だなお前、基本が大事なんだぞ。基本が」

「ちえー」

……ジュンペー？ じゅんぺい……順平……。

「ああつ!!」

「ん？ どーした少年。大きい声だして」

やばっ、気づかれた。大丈夫だよな？ この世界は「もしもの世界」だから僕が別世

界の元リーダーってことはばれない、ウン。それにさつき順平は「少年」って言ってた。だから問題はない。

「い、いや。知ってる人に似てたから」

「オレが？」

「うん」

「へえー。……よくよく見るとお前オレの知り合いに似てるな。ま、そいつは“女”だけどな」

よかった。ばれてない。女……か。

「そいつもお前と同じくイヤホンを常に持っててな、雰囲気ってやつがすっげー似てんの」

「……そう。有里湊、名前は？」

「オレは伊織いおり順平じゅんぺい。バイトしながらこの少年野球のコーチしてんだ」

順平……。成長したなあ。チドリと仲よくしてんのかなあ。気になる。何とか近づいて話を聞き出したい。

「野球、たまに僕もいい？」

「おつ、湊も野球に興味おありのようで。いいぜ、湊が暇な時にでも来てくれ。あ、“雨の日”と“土日”はナシな」

前の世界同様「湊」って呼んでくれたことに嬉しさを感じつつ、順平と連絡先を交換して別れた。

気がつくと同じく前の世界同様コミュニティが生まれていた。けど、少し違和感があつた。順平のペルソナ「ヘルメス」や「トリスメギストス」のアルカナは「魔術師」だ。けれど生まれたコミュニティ……コミュニティのアルカナは「正義」だった。

これも「もしもの世界」の影響かもしれない。

——新たなコミュニティ。「正義：伊織順平コミュニティ」

◇◇◇

そして夜。正確には午後11時50分。

仕方なく久しぶりにこんな時間まで起きてた。真面目でしょ？

とても暇だったから本屋で買ってきた本を読み尽くしてしまった。商店街の本屋の本が入荷までまだ少しかかるらしい。仕方ない。電車で沖奈の本屋にあとで行ってみよう。

「そろそろ、0時」

いつの間にか9分経っていて現在59分になっていた。僕はテレビの前のソファに座りその時を待つ。

残り10秒……5、4、3、2、1、0。

……やっぱりね。ただの噂だった……ついた。

消したはずのテレビがついて女性が一人映っていた。電波が繋がらない感じでノイズ音がした。

『やあ。お久しぶり』

「え……」

左の方から声が聞こえた。左を向くとすぐ近くに見知った“少年”がいた。

『僕の名前。覚えてる?』

「ファルロス……だよな? 綾時じゃなくて」

『うん。君のお陰でニユクスは力を使えないからね。僕は君の“中”にいた存在。逆に

「宣告者」として君たちと過ごした記憶はないけどそれ以外ならちやあんと覚えてる』

どうしているの? と聞くと「僕は君と共に」というよくわからない言葉が帰ってきた。

そしてもう一言。こっちの方がさらにわからない言葉がきた。

『テレビに指を突っ込んでみて』

考えてもよくわからないのでいう通りに突っ込んでみる。

ーずぼっと入った。勢いで体全体が入りそうになったがテレビが小さいお陰で入りきらずにすんだ。

『次の戦いは君が主役って訳じゃないけれど、君も“鍵”を握っている。初めてこの世界に来たとき、ベルベツトルームの主からここはどんな世界だと言われたか、覚えてる？』

覚えてる。よく、覚えてる。だから今、僕はこの世界で生きていられるんだ。

「この世界は「もしもの世界」だ、と」

『そう、もしもの世界。ここは色んな「もしも」が渦巻く世界。「もしも小学生の少女の引越先が八十稲羽だったら」「もしも古本屋の老夫婦が沖奈の外れで古本屋を営んでいたら」「もしもニユクスを封印したのが有里湊ではなく……汐見琴音という別の人間だったら」「もしも……元の世界では死んだ彼がこの世界では生きていたら」……驚いていたらきりがないからね』

「わかった」

『ねえ……。また、友だちになってくれないかな？』

「もちろん、よろしくファルロス」

『よろしく。……湊』

——新たなコミュニケーション。「死神：ファルロスコミュニー」

指が突っ込んだ原因はその内わかるとか。明日、三人に話してみよう。それにしても、あの女性どこかで見たような……？

◇◇◇

4月14日。木曜日。

どうやらテレビの中に入れたのは僕だけではなかったようだ。鳴上も入ったと言った。

しかもマヨナカテレビで見た人も同じらしい。これは残りの二人も同様だった。

「小西先輩に似てたかも」

里中の発言に僕は頷いた。よくよく思い出せばあの女性は小西先輩に似ていたのだ。その小西先輩は花村によると事件の第一発見者で今日は学校に来てない。

「ごめん千枝。先帰るね……」

「あ、うん」

「じゃあね有里くん」

隣の席だからなのか天城は僕に挨拶して帰ってくれた。僕は手を振って答えた。

「しっかし鳴上に有里。テレビの中に吸い込まれたってのはどうなんだ？ 動揺しすぎつつか寝ぼけてたんじゃね？」

「寝ぼけてない。少し前まで0時まで起きるなんて日常茶飯事だった(影時間のせい)し、動揺なんてしたことない。別に怖いのが平気(不良の溜まり場も平気だった)」

「……お前普段どんな生活送ってたんだ？」

「毎日のスケジュール管理は必須事項の生活（コミュ活動）」

「大変なんだな」

「けど夢にしてもおもしろい話だねそれ。『テレビが小さくて入れない』とか変にリアルつつかくだららないというか。もし、大きかったら……」

◇◇◇

と、言うわけで場所はジュネスの家電製品売り場。ひとときわ大きいテレビがある。花村と里中がテレビの画面に手を押し付ける。入れなかった。二人はやっぱり夢だと決めつけ里中の新しいテレビ探しとして隣のテレビへと向かっていった。

「有里。やってみるか？」

「そのために来たんじゃないの？」

「そうだな」

それでもやっぱり少し心配。同時に手を押し付けることにした。結果――

「て……おい。あいつらの腕……刺さってない？」

この花村の一言がきつかけで二人は慌て、騒ぎ始めた。

そんなこともお構いなしに鳴上は頭を突っ込んでいく。

「度胸あるな」

「そんなこと言ってる場合じゃねえよ！」

「ちよ！ 客来る！ 来る！」

「あ、押さないでよ」

里中が押しつけたせいで僕らもまとめて落ちてしまった。うーん。里中が今のところ一番うるさいな。ここ、タルタロスよりかは安全だと思うけど。(十分危ない)

成り行きに任せたら何も対策とらずして「テレビの中」に来てしまいましたとさ。

4月14日(木) ～ 4月15日(金)

テレビの中の世界は霧が多く漂っている場所だった。鳴上は落ち着いていたが里中と花村の二人はとでも焦っていた。やっぱタルタロスよりかは安全だと思うけど(二回目)

現在僕たちはとりあえず出口を探そうってことになり歩き続ける。するとある部屋にたどり着いた。ベッドがあり周りの壁には破れたポスターが沢山。それに部屋の真ん中に椅子、そして上に輪になつてる布がある。……どんな状況なのかは誰でも想像がついた。

「戻ろうよ……。気分悪くなってきた。さっきんトコ戻つて違う道探してみようよ。私……こんな場所いたくない」

まあ。確かに気分は僕も少し悪い感じがする。この霧のせい？ 影時間中も動き過ぎると気分悪くなって次の日全然元気がなかったりしたから。

鳴上と花村も賛成したので出ることにした。

「ちよつ、ここのですの!?!」

「しよーがねえだろ、結構我慢してたんだぞ!」

「鳴上くん止めてよ!」

「何で?」

「有里くん!」

「見なければいい」

戻る前に花村が「漏れる」とか言つて壁でしようとしてたが、僕らがいたせいなのか知らないけど出なかつた。「膀胱炎になつたらお前らのせいだからな」とか嘆いてたけど、僕は知らない。何も知らない。

「うぎゃあー!!」

「里中!」

急に里中の悲鳴が聞こえたから僕らは部屋の外に出る。外はマンションの廊下だった。僕らは今までマンションの部屋にいたのだ。

そして僕らの目の前にいるのは……クマだった。そんなクマも何かビビってた。

「き、君たち何でここにいるクマ!」

「それはこつちが知れてーよ!」

「何でそんなに焦っているの?」

僕が訊くがクマは結構取り乱してて答えてくれなかつた。その代わりクマはメガネを一つ取り出して鳴上に渡した。

「見える」

「ハツキリと？」

「ああ」

すると鳴上は奥の方をじつと見ていた。何かがいる。それを感じとつたのだろう。

「急いで逃げるクマー！ シヤドウ”が、シヤドウ”がああ！」

「シヤドウ？」

三人はわからないのではてなが浮かんたような顔をしていた。……けど僕にはわかる。まさか、イゴールが言ったことが本当に当たるとは。「また事件に巻き込まれる」……この事だったんだね。

「ぎゃああ!! 来たクマあああ!!」

クマが猛スピードで逃げた。嫌な気配がしてドアの方を見る。僕はメガネをしている訳ではないのでかなり凝視しないとわからないが、見えた。シヤドウ……「アブラー」の姿が。

「走って逃げろ！」

僕はとっさに叫んだ。僕が叫ぶのが珍しかったのか三人はぎよつと驚いていたがシヤドウの姿を全員確認した途端みんな走り出した。

何とか外に出たが先回りされシヤドウが里中の目の前に現れた。

「ぎゃっー！」

攻撃……というか舐めた。舐められた里中は気絶してしまった。囲まれてしまいう駄目。召喚器がなくペルソナが出せない。思わず目をつぶった。

「鳴上……？」

花村がそう呟く。鳴上の手のひらにカードがあった。「ペルソナ」だ。彼は呟く。召喚の言葉を。

「ペ……ル……ソ……ナ！」

思いつきり手を握ってカードを握りつぶした。青白い光の中、ペルソナが姿を表す。鳴上悠のペルソナ、「イザナギ」だ。

イザナギはシャドウをあつという間に倒していく。途中攻撃を受けたりしたが難なく撃破出来た。

「鳴上、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

倒し終わったあと、初めてのペルソナ召喚に体力を使ったのか鳴上は地面に座る。里中はまだ気絶しているのでそれまでの間だ。花村といつの間に戻ってきたクマは周りを確認してくれている。

◇◇◇

「鳴上、有里大変だあ！」

数分後。花村が大急ぎで戻ってきた。霧の影響があるのでそうそう早くこれないがそれでもかなり焦っていた。

「シヤドウってヤツがまだあっちから来る！」

「問題ない……くっ」

「鳴上は休んでて」

鳴上はまだ体力が回復しきってない。連続で戦うにはあと一回か二回テレビの中に入るしかないと思う。

『予感はしていたかい？』

……ファルロスの声が聞こえる。僕はクマの元に向かう。クマがメガネをくれた。かけると目の前には大量のアブリーの軍勢が。

「強さはそれほどでもないけど、数が多いクマ！ に、逃げた方がいいクマよ……」

「大丈夫。クマは下がってて」

クマは僕の言うとおりに下がった。

『覚悟は決まった？』

「ああ。決まった」

僕の右手には拳銃があった。

「そうか、その拳銃で……」

「それは無理クマよ。シャドウに普通の攻撃は効かないクマ！」

そんな会話が後ろから聞こえた。……違うんだ。この拳銃はそんな使い方じゃない。

『もう、あの時の恐怖はなくなっただ？』

「いや。やる度に怖いよ」

僕はいつもの召喚に移る。見慣れた召喚器の銃口をこめかみに当てる。

『さあ。新たな戦いの幕開けだ。湊……君の仮面の一つを呼び出すんだ』

「ペ……ル……ソ……ナ!!」

引き金を引く。衝撃と共に現れたペルソナ。僕が最初に呼び出した思い出ある仮面。

「オルフェウス」

「焼き尽くせ。オルフェウス!!」

そう指示するとオルフェウスはありったけの火属性の魔法「アギ」を放った。僕の精神力が尽きるまで。全てのシャドウが滅ぼされるまで。とにかく、ありったけ。いつしか僕は何も考えられなくなつた。精神力が尽きた証拠かもしれない。それでもオルフェウスはアギを放ち続けた。たぶんもうシャドウは全て葬つただろう。

「有里!!」

その一言ではつと気がついた。目の前は巨大な炎が燃えていて、地面にはシャドウが

消えた跡。そしてオルフェウスが上空でただただたずんでいた。後ろを振り向くと花村が僕の肩に手を置いていた。どうやら僕の肩を揺すっていたらしい。鳴上にクマ、いつの間に起きたのか里中もいた。

そして僕は――気を失った。

◇◇◇

目が覚めると見知らぬ所にいた。誰かの家のようだ。

「だいじょうぶ?」

起きると横から少女の声が聞こえた。確かガソリンスタンドで気分が悪そうな鳴上を心配していた子だ。

「うん。もう平気」

「よかった。一緒に朝ごはん食べよ」

名前を訊くと「堂島どうじま菜々子ななこ」だと言った。まだ小学生なのにすっかりした子だ。彼女を見てると天田を思い出す。小学生なのにとてもしっかりしていた。今ごろは……中学生だっけ? 背は伸びたのかな?

「有里、起きたか」

「鳴上。そのきの……」

「昨日のことはどうなった?」と訊こうとしたが遮られた。

「……菜々子に聞かれたくない。学校に行くとき話そう」

「わかった」

僕たちは朝ごはんを食べることにした。菜々子ちゃん、将来いいお嫁さんになる。そう言ったら「ありがと」と照れながらお礼を言ってくれた。……隣で鳴上が少しむすつとしていたのは気にしないでおこう。てか気にしたくない。

◇◇

4月15日。金曜日。

登校中。鳴上と昨日あの後どうなったのか訊いた。

あの後特にシャドウが襲ってくる気配がなく僕らが入ってきたスタジオみたいな場所へと戻った。どうやって帰ったのかと言うとクマが出したテレビを来たときと同じように入ると元の場所。ジュネスの家電製品売り場へと戻れたらしい。

そしてあの部屋で見たポスター。演歌歌手の「柊 みすず」だとわかった。数日前に死んだ「山野^{やまの} 真由美^{まゆみ}」と不倫していた人が旦那だった。と。僕はそんなニュースとか見てなかったから「そんな人いたんだ」くらいにしか思わなかった。

◇◇

今日は朝から集会があった。どうやら緊急らしい。そこで聞いた内容は驚くべきことだった。

山野アナの第一発見者である小西早紀先輩は……山野アナと同様に変死体となって遺体の姿で発見された……。

集会が終わったあと、鳴上と里中と一緒に廊下で静かに立っていた。外は雨が降っていて、雨の音が今日はやけに鮮明に聞こえた。

「あ……花村……」

里中が呟く。花村がゆっくりと歩いてきた。

「……なあ、おまえら。昨日、あの夜中のテレビ見たか？」

「あのさ……人が死んでるのに何言ってるの？ しかも被害者は」

「わかってるよ！ 聞いてくれ!!」

珍しく花村が真剣に話していた。話したのは昨日のマヨナカテレビを見たこと。小西先輩が苦しうにもがいているみたいに見えたこと。……もしかしたら小西先輩と山野アナは誰かに「あの世界」に放り込まれたかもしれないと思っっていること。

「……頼むよ。鳴上。おまえがいないと『テレビン中』に入れないんだ。俺、どうしてもあつちの世界に行つてたしかめたいんだ。先輩に関係する場所もあるかもしれない。なんで先輩が死ななきゃなんなかったのか、知つてきたいんだよ！ それにシヤドウつて化け物と戦えねえし。有里、おまえの力も借りたい」

「ジュネスで待っている」と言つて花村は去つていった。



今日はあんなことがあった為、すぐに下校となった。とりあえずジュネスには行くことになった。昨日と同じテレビの所に行くとしてロープを腰に巻いて束を持った花村がいた。

「来てくれたのか!!」

少し嬉しそうに言った花村。里中はまたあそこに行くのは反対のようだ。それでも花村は引かない。

「あんときと同じ場所……ここから入れればまたあのクマに会えるかもしれない」

「……それでそのロープ?」

僕が訊くと花村は頷いた。たぶん意味ないと思うけど。

里中がロープを持って留守番係、僕ら男子三人が突入係となった。

「戻ってきてよ、絶対に!!」

里中はとても心配そうに見送った。僕らはまたーここに来てしまったのだ。シャドウがうようよという世界に。

「キ……キミたち……。なんでまた来たクマ?」

「へへへ……。ちよつと真実をつかみにね」

正直言つて、めんどくさいと思つたけど。これは元の世界に戻るためだと思うし、何

より僕がいない「その後」の世界を見てみたかったつてのもある。それに……一年間共に過ごすリーダーとその相棒との、〃自分の意思での異世界訪問〃になつたのは……紛れもない事実つてこと。

◇◇◇

来た途端すぐにクマにどや顔で色々言われた。

「わーかつたつ！ 犯人はキミたちだクマ！ キミたちはココに来れる……。他人にムリヤリ入れられた感じじゃないクマ！ よつて一番怪しいのはキミたちクマ！ キミたちこそ、ここへ人を入れてるヤツに違いないクマアツ!!」

「つぎけんなツつーの！ 俺たちはその犯人つてヤツを突き止めに来たんだよ！ そうじゃなきゃ、わざわざこんな帰れるかもどうかもわかんねーところにまた来るかつての!!」

ごもつとも、花村。

花村はクマに知つてゐることがあれば話すよう言つたけどクマも何も知らないらしい。クマはここにずっと住んでるらしいけどこんな騒がしいこと今までなかつたようだ。

「証拠あるクマ？」と言われたが証拠はない。……いや。強いて言えば一つあるかな？ やつてみるか。

「……君を助けたこと」

「ん?」

呟くと花村がこつち向いた。それにつられて鳴上にクマもこつち向いた。

「昨日、君を助けてシャドウを倒したこと。それじゃダメ?」

「そっか」

あつさり納得してくれた。ありがたい。

「……おい。ずいぶん態度が違うじゃねえか。納得したのかよ」

「まだ疑いは晴れてないクマ。けど、この二人はシャドウから助けてくれたクマ。信じてもいいよ。……でも、その代わり言ってるとおりに犯人を捜し出してほしいクマ」

クマがしよんぼりとした表情で僕たちに頼んだ。クマはただ、ここで静かに暮らしたいだけだ、ど。

……そのあとニツコリとした顔で「約束してくれないとここから出さないよ。テヘペロ」とかそんな感じだったから召喚器ちらつかせて黙らせた。

「今回はちゃんと命綱を……あ」

花村が用意したロープ。それは見事にぶつぷりと切れていた。今ごろ里中はパニツクになっていることだろう。奢りを覚悟しないと。

結局約束することになった。

「一つ訊いてもいいかな？ あの番組『マヨナカテレビ』ってこのスタジオで撮影されてたりする？」

鳴上がクマに訊いた。

「バングミ？ サツエイ？ ココは元々こういう世界クマ。誰かが何かをトルとかそんなのないクマよ。でも、そっちがこっちに干渉するからこっちの世界、どんどんおかしくなってるクマ」

こっちの世界に住んでるクマが知らない。……マヨナカテレビは一体何なのだろうか。

「前に放り込まれた人」の気配が最後にあつた場所に案内してくれた。クマが言うにはそっち……つまり僕らの世界で霧が出る日はこっち……テレビの中だと晴れる日になるらしい。霧が晴れるとシャドウの活動が活発になるとか。

「それしても霧スゲーな」

「そー言えばセンチとハンチョーにはメガネ渡したけどヨースケには渡してなかったクマね。ほい」

クマは花村にメガネを渡した。メガネをかけた花村は関心していた。

「すげえ。濃い霧がまるでないみたいだ……。てか今鳴上と有里のことを「センチ」と「ハンチョー」って呼ばなかったか？」

そう言えばそうだ。クマは何故かどや顔で「ちゃんと敬意はあるクマよ」と言った。まあ別に僕と鳴上は嫌ではなかったもので快く了承した。

「つか、ここって町の商店街にそっくりじゃんか。けど、ここがウチの商店街と一緒ならこの先は……」

花村はある場所を見る。そこは小西先輩の家である「コニシ酒店」だ。

【ジュネスなんて潰れればいいのに……】

「なっ!!」

急に声が聞こえた。

【ジュネスのせい……】

【そういうえば小西さんちの早紀ちゃん、ジュネスでバイトしてるんですってよ】

【まあ……お家が大変だつてときに……ねえ】

【ジュネスのせいでのところ売上もよくないっていうし】

【娘さんがジュネスで働いているなんてご主人も苦勞するわねえ】

【困った子よねえ……】

ほとんどが……ジュネスについての悪口だった。

【先輩……っ!】

【花村!】

「鳴上、行くよ」

「ああ！」

花村が店に入っただけでいってしまつた。僕と鳴上にクマは後を追いかけて店に入つていく。

入ると声がまた聞こえた。次に聞こえたのは男性の声だつた。小西先輩のことを「早紀」と呼んでいることから父親なのだろう。

「なんと言えかわかるんだ早紀！」

「おまえが近所からどう言われているか知らないわけじゃないだろ！」

「代々続いたこの店の長女として恥ずかしくないのか！」

「金か？ それとも男か!？」

「よりによつてあんな店でバイトなんかしやがつて」

花村の顔を見るととても辛そうだつた。色々中を見てまわると机の上に色んな写真があつた。ある写真を手にとつて花村に訊く。僕がとつた写真はバイト仲間とジュネスで撮つたやつらしい。小西先輩は全然乗り気じゃなかつた、とも言つた。

「……ずつと」

「ずつと言えなかつた……」

「この声……先輩!？」

小西先輩の父親の声が聞こえたと思つたら次は先輩本人の声。……本当にこの世界は謎が多いな。

【本当の気持ち伝えたい……】

【私……ずっと花ちゃんのこと……】

「え……？ 俺のこと先輩……!？」

え……？ 何これ。ここで告白みたいなの？ 「好きでした」みたいなの？ 気になる。

順平とチドリのことと同じくらい今は気になっている。

【花ちゃんのこと……】

【ウザいと思つてた】

つらつ。辛すぎ。すごい心に突き刺さる。特に……思いを寄せていた花村には。

【仲よくしてたの店長の息子だから都合がいいってだけだったのに……】

【勘違いして盛りあがってほんとウザい】

【ジュネスなんてどうだっていい……】

【あんなもののせいで潰れそうなウチの店も怒鳴る親も好き勝手言う近所の人も……】

【全部なくなればいい……】

……これ以上、声が聞こえることはなかった。花村を見るととてもシヨックを受けている感じだった。

まるで……父親を失った時の美鶴先輩みたいな。それくらいの悲しみが、今の花村にはあった。

「ウ……ウソだよ……。こんなさ……。小西先輩は……。先輩は……。先輩は……。そんな人じゃないだろ!!」

『……悲しいなあ。可哀想だなあ俺……。でも、何もかもウザいと思っているのは……自分のほうだっつーの！ あはははははは』

花村と同じ……だけど少し違うノイズがかかったような。そんな声が聞こえた。奥の方から人影が一つ。

「誰だよー」

花村が怒鳴る。そこから現れたのは……花村と同じ容姿、制服に声。違うのは目が金色に妖しく光っていること。

「この反応……」シヤドウ「だクマー！」

『我は影……真なる我……。なあ、「俺』』

4月15日(金)

『いつまで媚びへつらつていいヤツ面して生きてんだよ。商店街もジユネスも全部ウゼーんだろ!』

「何言ってる……?」

シヤドウ陽介(?)は追い詰めるように次々と言葉を発する。それが真実なのか嘘なのか僕らにはわからないが、花村の様子を見るに「隠したい本音」みたいな、そんな感じなのだろう。

『そもそも……今の退屈な生活が……。田舎暮らしがウゼーんだよな!』

「俺はそんなこと思ってるない」

『何焦ってるんだ! 俺には全部お見通しなんだよ。だって俺は……「おまえ」なんだからな!』

『ここに来たのもおまえは単にワクワクしてたんだ。「小西先輩のためにこの世界を調べに来た」なんてらしい口実もあるしな』

「シヤドウ……生まれたては初めて見たクマ。それにセンセイやハンチョーみたく直接出て来たものだからすごい力を感じる」

この世界で生きるクマが言うのだからそうなのだろう。花村は頑なに否定する。

「違う!! おまえなんなんだ! 誰なんだよ!」

「ねえクマ。嫌な予感がする」

「ハンチョーも気づいたクマか? クマもとーつても嫌な感じがするクマよ……」

「花村……」

花村とシャドウ陽介の会話を聞いているとても嫌な感じがする。理由を聞かれてもわからない。けれど、まるで「負」の感情がシャドウ陽介に集まっている。そんな不気味な感じ。

『違うないさ!! いいぜえ、もつともつと言いな!』

「ふ……ふぎけんなつ! おまえなんか……俺じゃない!!」

『もつと! もつとだ!!』

「おまえなんて……」

そして……。僕の「嫌な予感」通りになった。

「俺じゃない!!」

『ああそうさ! 俺は俺だ! おまえなんかじゃ……ない!!』

シャドウ陽介はいきなり返信した。いや、「本来の姿になった」と言った方がいいのか。よくわからない。上が人で……下がカエル? とりあえず何か素早い感じのヤツ

だった。

「イザナギ！」

「オルフェウス！」

僕と鳴上はとっさにペルソナを召喚した。シャドウは花村を狙っていた。

「クマ、何であいつは花村を狙うんだ？」

「あれはもともとヨースケの中にいたものクマ！」

「つまり、花村が受け入れなかったから『暴走』したと？」

クマは頷いた。僕はある人たちを思い浮かべていた。そうしている時ではない。そうわかつてはいるのだが、つい思い出してしまった。

ストレガの三人……タカヤ、ジン、チドリ。そして荒垣先輩。荒垣先輩は僕らとの関わりはたった一ヶ月くらいしかなかったけど、とても頼れる先輩の一人として尊敬していた。

真田先輩に荒垣先輩はしばらくペルソナの『制御剤』を使っていたことを聞いた。荒垣先輩はそんなことしなくてもよかったそうだが、ストレガの三人は別だ。制御剤を使わないと「自分のペルソナに殺される」

まるで……今、この状況みたいに。

「クッ……！」

「鳴上、平気か？」

「ああ」

雷弱点のシャドウと風弱点のイザナギ。お互いに不利な状況だ。僕のオルフェウスは火属性。効きすぎでもなく効かなすぎでもない。

「オルフェウス！」

『チツ……。おまえ一番ウゼーな』

シャドウは僕に攻撃を集中させる。避けるのが精一杯になってきた。今のうちに鳴上の体力とか回復してくれればいいのだが。……手っ取り早いのは、花村に自分だと認めさせること、だよな……。

「違う……。あんなの、俺じゃ……ない」

こりやダメかも。シャドウの標的が僕である以上、花村を出せば変えるかな。やつちやおうかな。

……つて割りきれたらS. E. E. Sのリーダー、やれてなかったよなあ。

「有里」

「わかつてる。……オルフェウス！」

そんな僕の合図でオルフェウスは琴でシャドウを殴り、鳴上は“花村”を殴った。

「いってえ！ 何すんだよ！」

「あ、間違えた」

「はあ!」

絶対ウソだ。だってさっき僕に目線で言ったじゃん。と言ったら怒られそうなのでやめておく。それにもしも鳴上が殴らなかつたら僕が殴るから。

「小西先輩のこと、好きだったんだろ? ……花村は、このままあいつに殺されるつもりか。そうしなかったのか! そうなってほしかったのか!! このままあいつにやられるつもりなら。俺がおまえを倒してやる」

……カッコいいな、鳴上は。僕なんかよりずっと、カッコいい。僕は、花村に何も声をかけることが出来なかつたのだから。

彼が僕と同じ「ワイルド」の力を持つのなら、きっとその内に「世界」のアルカナを持つことになる。今回は、大丈夫だろうか。僕の戦いみたいに世界が滅ぶ、なんてことないだろうか。彼は死んでほしくない。いなくなつてほしくない。僕なんかより、ずっと頼れるから。

「……俺は、先輩ともっと話したかった。先輩のこともっと知りたかったよ。もう、遅いかな。できるなら……救つてやりたかったよ。でも、そんなこと言つたら先輩はきつとウザイって言うんだろうな」

話している花村の表情は、何かすつきりしたような顔だった。悩みを一つ解決した、

そんな感じだ。

「思い出したよ。先輩と初めて会ったときのこと……。あの頃はこんな田舎って見下してたっけ。……今でもそうなのかな。そんな俺に先輩は『親は親。キミはキミ』って言ってくれたっけ……。あれ、本心だったのかな？ そうじゃなくてもうれしかったんだ。先輩の言葉で俺、初めてこの町も悪くないかなって思えたんだ。先輩……先輩、ありがとうな」

そして花村は僕らの方を向いて言った。

「先輩に紹介した転校生二人。こいつらのお陰で俺は……気づけたんだ。もう大丈夫」
『何だよ何だよ!! ざっけんなああ!! カッコつけやがってよおお。田舎暮らしにうんざりして! この世界があると知ってワクワクして!! 先輩にも盛大にフラれただろうが! なのに「ありがとうな」ってふざけんじゃねえ!!』

急にシャドウが弱くなった気がした。花村が自分の「本音」を受け入れたからか？
とにかく、今がチャンスってこと。

「鳴上!」

「イザナギ!!」

シャドウの弱点属性の雷魔法の「ジオ」をイザナギが放った。弱まっていたシャドウは攻撃をモロに受けた。

「センセイ、ハンチヨー！ シャドウの反応がとーっても薄くなったクマー！」

目の前には倒れているシャドウ陽介の姿があった。

「ヨースケ。あれはもともとヨースケの中にいたものクマ。ヨースケが受け入れなかったらまた暴走するかもしれないクマ」

花村はシャドウの元に歩み寄る。

「ムズいよな……。自分と向き合うつてさ。わかつてた……。けどみつともねーし、どうしようもなくて。認めたくなかった……。でも、そういうの全部ひつくるめて俺は俺つてことだな。……おまえは、俺だ」

「おまえは俺」——その言葉を待つていたかのように、シャドウは少し微笑んで、姿をペルソナへと変えた。「ジライヤ」。花村の、ペルソナだ。

◇◇◇

最初のスタジオに戻ってきた。

「なあ……。『犯人』絶対見つけよーぜ。放つといたらこの先また誰が犠牲になっちゃうかわからねえ。俺らならまた誰かが放り込まれてもその人を救えるかもしれないねーし」

「当然やる。鳴上は？」

「やる気だな、有里」

鳴上は少し驚いた表情で僕に訊いた。やる気？ そんなのはないよ。ただ……。

「クマと約束したから」

「約束、守ってくれるクマか!？」

「有里の言う通りだな。約束しちまったし」

「それに、そうじやなきや俺たちをここから出さないって。クマが言ったんじゃないか」俺たちは少し笑顔になった。クマも元気が出たようで、張り切って帰りのテレビを呼んでいた。僕たちが帰る時、クマはずつと手を振っていた。

……そう言えば、何かと言うか……誰か忘れてる気がする。

◇◇◇

ジュネスの家電製品売り場へと戻ってきた。

「忘れてたと思ったら、里中だった」

僕はようやく思い出した。里中はかなり泣いており、僕らに文句を言っていたが聞き取れなかった。お詫びとして奢ることを条件に許してもらえた。

◇◇◇

外はもうすっかり夕暮れだった。鮫川の河川敷から見ると夕日はとても綺麗だ。高台からだともっと綺麗だと花村が教えてくれた。

「有里、鳴上。これから……よろしく頼むぜ。……なんてカツコつけてるけどよ。正直いろいろ不安なんだ。でも……俺、おまえらとなら犯人見つけてこの事件を解決できそ

うな気がするんだ」

僕と鳴上は頷く。すると花村は真剣な表情から急にいつも通りの顔に戻った。

「なあ。おまえら二人とも同じくらい俺にとつてはカツコいいワケ。どつちかを」相棒
“と呼びたい、つてかどつちも呼べばいいのか？」

「相棒は二人三人もいるもんじゃないでしょ」

僕がそう指摘すると花村はうなつた。鳴上が僕に譲ろうとするのが横目で見えたから、すぐに僕が辞退して鳴上に譲った。

「別に相棒と呼ばれるのが嫌だからつてワケじゃない。ただ……僕にはもう、そんな感じの関係の人がいるから」

本人がどうかは知らない。けど、僕にとつては……順平。あいつが、相棒なんだ。

「そつか。じゃ鳴上が相棒だな。よろしく、相棒」

「ああ！」

花村と鳴上はしっかりと握手した。僕はそれを少し後ろから見ている。いいね。青春かあ。

「おい有里」

「ん？」

二人とも、僕を見ていた。そして下を少し見ると二人とも手を出している。

「おまえともこれからよろしくつて意味」

「握手だ」

僕は別世界の二年前、特に理由があるわけでもなく「頼まれた。世界のため」そんな感じで戦つてた。S. E. E. Sは、そんな人たちで構成された雰囲気だった。

でも、この二人は違った。二人とも同じ目的、意思を持った「親友」だ。僕は仲が悪いわけではなかったけどギスギスとした時はあつた。こういう関係の中、僕は上手くやつていけるかな。

「僕も握手するの?」

「当たり前だろ。俺たちはもう「友達」だ! な、鳴上」

「ああ。「親友」と呼んでもいいんじゃないか?」

「いいなそれ!」

僕も、「親友」……どうやら、僕の不安は考えすぎだった。

「……よろしく。鳴上、花村」

「よろしく。有里」

「よろしくな。「有里ハンチョー」!」

「それ止めてよ」

この二人を見てみると、いつも思うんだ。例え別世界でも、あの時綾時を殺さずに

ニクスと戦う意思を持ったこと、命を使って封印すること。その行為は間違っていないな
かったかもしれない。と。

――新たなコミュニティ。「魔術師：花村陽介コミュニティ」

――新たなコミュニティ。「永劫：鳴上悠コミュニティ」

雪子姫の城

4月15日（金） ～ 4月17日（日）

家に帰ってテレビを見てみるとある旅館が映っていた。「天城屋旅館」——クラスメイトの天城の家だ。どうやらこの旅館に第一被害者の山野アナが泊まっていたらしい。

「……レポーターの発言、なんかイライラする」

天城が困っているのにあの態度は腹がたつ。だから僕は食べてる途中のコンビニ弁当を急いで食べてテレビの電源を消した。

チャンネル変えればいいのか思うけどどうせ疲れていたし、ゆっくりお風呂に入りたかったからどうでもよかった。

風呂から出て天気予報を見る。しばらくは雨だそうだ。今も雨が降っている。疲れてはいたけどマヨナカテレビを今晩見てみることにした。

マヨナカテレビの一時間くらい前にファルロスが現れたので少し話をして一緒にマヨナカテレビを見た。誰かに似ている。そう思ったがこの日は睡魔に負けて素直に寝ることにした。（死神コミユ2）



「雪子……雪子がないの!」

4月16日。土曜日。

里中が登校してきてすぐ僕らに言った。里中は僕と同じく昨日のマヨナカテレビを見たらしい。着ていた着物がいつも旅館で着ているのとよく似ていると言った。

「この前テレビでインタビュアー受けてたときも着てた。山野アナが事件前宿泊してたからって取り囲まれて、現役女子高校生女将とかインタビュアーにセクハラっぽいこと言われてもうほんとふざけんなって感じ……」

「それ僕も見た。何か珍しくイライラした」

「だよね!」

鳴上が連絡したかどうか里中に訊くと夜中にメールしたけど返事がこない。と、とても慌てた様子で言った。

「落ち着け里中! まずは無事を確かめるのが先だ。天城に電話!!」

「……うん」

電話するがコール音が鳴り響くだけで出る様子がない。だんだん不安だけが大きくなっていく。

「雪子? よかったよ いたよ!」

里中のとても安心しきった声が出た。どうやら急に団体さんが入って手伝わないと
いけなくなったらしい。実は年に一回はあるのだとか。

「早とちり」

「すみません……」

天城の無事がわかって、その後の里中はとても上機嫌だった。

◇◇

誰かがいるかクマに話を訊くためにジユネスへと向かった。

鳴上が手だけいれてクマがいるか確認する。

「……っー」

急に鳴上は手を引っ込めた。よく見ると歯形ついてる。噛まれたらしい。

「……泣きそう」

「泣かないの。フーフーすれば治る！」

……気をとりなおして改めてクマに今テレビの中に誰がいるか訊く。

『誰かって誰？ クマは今日もひとりで寂しん坊だけど？ むしろ寂しんボーイだけど
？』

クマが何かショボンンとしてるのが感じる。花村が気配とかないのかと訪ねると、
「気配も感じないクマ」と答えた。ちなみにまだ鳴上は痛そう。

とりあえず今日はマヨナカテレビを見ることにして、解散した。

◇◇◇

『こんばんは〜』

深夜12時。天城の声、姿が鮮明に映った。だけど……何かが違う。服装がもちろんそうだけど……テンション？ キャラ？ 何か違和感がある。

『えーと、今日は私天城雪子がなんと。〃逆ナン〃に挑戦したいと思います！ 題してー「やらせナシ！ 雪子姫。白馬の王子様さがし！」』

『もお超本気イ！』

『見えないトコまで勝負使用……。はあと、みたいなね！』

『もお、私用のホストクラブをブツ建てるくらいの意気込みで』

『じゃあ行つてきま〜す!!』

そして消えた。僕は衝撃が多き過ぎて一言しか言えなかった。

「……えっ。何、コレ？」

その後鳴上に電話した。少し前に花村とも話をしたらしく、明日ジュネスで里中と集合してから考える。ということになった。

◇◇◇

4月17日。日曜日。

里中と集合したあと、警察署に来た。天城がいついなくなつたか訊くことが目的だ。「え、あ、うーんとね……。言つていいのかなあ？　まあ天城さんと友だちなら……。特別だよ？」

対応してくれたのは鳴上が居候してる堂島さんつて人の部下の「足立^{あだち}透^{とおる}」さん。

足立さんによると居なくなつたのは昨日の夕方くらいから。急に姿が見えなくなつたつて家族から電話があつたらしい。失踪した人が霧の日に同じような遺体で見られていることから現在署内は過敏になつていようだ。確かに、ピリピリとした感じは伝わる。

一番疑わしい終みすずは事件当時、海外公演中でアリバイあり。旦那の生田目太郎も特になし。

そしてさらに、足立さんが言うには警察は天城のことを疑つているらしい。あの人口軽いな。

「天城完全に疑われている。やっぱ警察じゃあてにならねえ」

「テレビの中、行くんでしょ？　あたしも行く」

鳴上と花村が危ないから、と里中を止める。それでも里中は行く気マンマンだ。

「有里からも何か言つてくれよ！」

話が僕のところに飛んできた。里中が「行くからね」とでも言いたげな目を僕に向けていた。

「……別にいいんじゃない」

「おまえも知ってるだろ！ あそこは危ないんだぞ。なあ鳴上」

「シャドウはペルソナじゃないと倒せない。里中は身を守る手段がないんだ。とても危険だ」

「行きたければ勝手に来ればいい。自分の身は自分で守れば問題ない。里中は身軽な感じがするから最悪走って逃げれば後は僕たちが倒すし」

里中は唯一味方した僕の手を握り「ありがとね！」とお礼を言った。別に味方したわけじゃないんだけど。……たぶん。

男子が負ける形となり、里中は「自分たちについていく」といったことを条件に同行することになった。

◇◇◇

テレビの中に行くとかクマがゴローゴローとしていた。

「何やってんだおまえ？」

「見てわからんクマ？」

見てもわからんクマ、教えて。

「いろいろ考え事してるクマ。クマは何者なのかとか、この世界はなんなのとか。ハンニンのこととか」

「暇を持てあましてるようにしか見えんぞ」

「クマはさっぱりわからないクマで、それでクマはこんなにクマってるってのに……。あ、ダジャレ言っちゃった。うぶぶ……」

うん。ダジャレ言う元気はあるようだ。

クマが案内してる最中いろいろ事件について話していた。

本当にこの世界でマヨナカテレビを撮っている訳ではないのか……。

「誰かがトツてるとかそんなのないし、初めからここはこういう世界クマ」

のようで。クマの考えは「天城自身に原因があつて生み出されている」という気がする。らしい。

「雪子自身があの映像を生み出してる？ どういうこと？ ワケわかんない！ だいたいの雪子が『逆ナン』とかつて……あり得ないっつもの！」

「落ち着いて。別に逆ナンしたいワケじゃないと思う。それくらいの何か……暗い思いがあつて、それが何故か逆ナンになった。と僕は思う」

「……そうだよね。あの雪子が逆ナンなんて」

クマが「ハンチョー」と僕を呼ぶので「何？」と答えた。クマは僕の方を向いて言っ

た。

「逆ナンって?」

……僕は無視して先に進むことにした。クマは鳴上や花村にも訊いたが、僕の思いが伝わったのか元々そうするつもりだったのかわからないが二人も無視して歩いていった。

目的地に到着。目の前には大きな城があった。あのマヨナカテレビに映っていた城とおんなじだ。

「雪子!!」

「里中ひとりで行くなって!」

「約束だったのに……」

「有里悲しむなって」

「別に悲しんでない」

里中はひとりで走って行ってしまった。ちなみにこの城の中にもシャドウの反応があるようだ。急がないと里中も危ない。僕らも走る。僕は里中に追い付けるけど二人は中々追い付けない。二人に許可ももらって僕だけ里中を追いかけた。

「……赤が似合うねって」

しばらくすると天城の声が聞こえた。商店街の時みたい在天城の心の声みたいな

……そんな感じ。途中でシャドウが襲ってくるのであまり声だけに集中は出来なかった。

【私雪子って名前が嫌いだった……。雪なんて冷たくてすぐ溶けちゃう……。儂くて意味のないもの……】

【でも私にはピッタリよね。旅館の跡継ぎって以外価値のない私には……】

【……だけど千枝だけが言ってくれた。『雪子には赤が似合うね』って。千枝だけが……私に意味をくれた……】

「雪子……」

里中が呟く。天城の声はまだまだ続いた。

【千枝は明るくて強くてなんでもできて……。私にないものを全部持つてる……。私なんて……。私なんて千枝に比べたら】

【千枝は……。私を守ってくれる。なんの価値もない私を。私、そんな資格なんてないのに……】

「雪子。あ、あたし……」

扉にたどり着き里中は扉を一気に開けて中に入る。

【優しい千枝】

『優しい千枝だっさ……。笑える』

目の前にいたのは……シャドウだった。

「……………え。だ……誰？ あ……あたし!？」

「そう。〝もうひとりの里中〟。もっと簡単に言えば……シャドウ」

「有里くん!？」

鳴上と花村はまだ来ない。僕が里中に自分を否定する言葉を言わせなければまだいける。でも……花村の時だって、そう簡単に自分の奥底の本心を受け入れることは出来ない。

『雪子が……あの雪子が？ あたしに守られてるって!? 自分にはなんの価値もないってさ!!』

『ふふふ。うふふふふ……。そうでなくちゃねえ？ 雪子ってば美人で色白で女らしくて……男子なんかいっつもチャホヤしてる』

『その雪子が、ときどきあたしを卑屈な目で見てくる……。それがたまになくうれしかった』

「違う……。あ、あたし……。そんなこと!」

「里中落ち着いて!」

ダメだ。声が届かない。こうしてる間にもシャドウは言葉を続ける。

『ふふ……。そうだよねえ。ひとりじゃなんにもできないのは本当はあたし……』

『人としても女としても本当は勝てない。どうしようもないあたし……。でもあたしはあの雪子に頼られてるの……』

「里中！ ……あれは」

「シヤドウクマ」

「有里！」

……よかった。間に合った。……とは思えないよな、これは。

「……来ないで!!」

『ふふだから雪子はトモダチ……。雪子が大事……。手放せない……』

「そんなつ……。あたしはちゃんと……。や……。やだ。来ないで！ 見ないでえ!!」

『うふふ……。今までどおり見ないフリであたしを抑えつけるんだ?』

「黙れ!!」

「よせ里中!!」

花村が叫ぶ。でももう……。遅かった。里中は言ってしまった。

「アンタなんか……。アンタなんかあたしじゃない!!」

「……っ！」

シヤドウがニツと笑った。その言葉を待っていたと言いたげな目。

『……そうよ。そうよ雪子なんて本当はあたしがいなきやなんにもできない……』

シャドウは花村の時と同じようにどんどんと怪物の姿に変わっていく。

『あたしのほうが……あたしのほうが……あたしのほうが！ あたしのほうがずっと上じゃない!!』

v s シャドウ戦の第2幕が始まったのだった。

4月17日（日）　　4月18日（月）

「イザナギ！」

「ジライヤ！」

「オルフェウス！」

シャドウが里中に向かって鞭で攻撃する。それを僕らのペルソナが防いだ。

「……やっぱこうなっちゃうか。巻き込みたくなかったんだけど仕方ねえか。俺にも、同じ様なことあったんだよ」

『なにアンタら……。ホンモノさんなんかかばっちゃって……。あたしのほうが……。あたしのほうが……。あたしのほうが……。あたしのほうが……。あたしのほうが!!　ずっと素直で正直なの!!　そんな薄汚いサイテー女!!』

「ぐあっ！」

「花村!!」

里中を庇ってシャドウの長い髪で首を掴まれる花村。鳴上や僕が助けようとしたけどどこっちにも攻撃がきて自分や戦えない里中を守るのに精一杯。

「くっ！」

「鳴上っ」

鳴上が吹っ飛ばされてしまった。シャドウは花村の首を絞めようとしてる。不味い、このままだと花村が……。

「……っ」

なにか、感じた。鳴上の方からだ。

「……チェンジ」

イザナギが愚者のアルカナカードになった。そして別のアルカナになる。「魔術師」のアルカナだ。

「ワイルド」の力を持つ者しか出来ない能力。ペルソナのチェンジだ。

「ジャックランタン」っ!!」

「ペルソナがもう一体クマ?!」

クマだけじゃない、花村も驚いていた。普通はペルソナは一人一体だから驚くのも当然と言えば当然。

「いけっ!」

ジャックランタンはまず花村を掴んでる髪を焼いていく。僕もオルフェウスに「アギ」を指示。ペルソナ二体分のアギがシャドウに炸裂した。

『あたしのほうが……』

シャドウはまだ耐える。里中が認めてないからだ。

「花村！」

「おうっ！」

……とそのときシャドウの蹴りがジライヤの急所に当たった。ペルソナのダメージは本人にも影響してくる。つまりジライヤの急所のダメージも花村の急所にダメージがくるワケで……。

「……っ!!」

「ヨースケ！ どうしたクマ!? 動きがニブイクマ!! いつもならこうシユンビンにビンビンに!!」

「や……ビンビンっかギンギンっつーかキンキンっつーか。どうも相手が里中だと思うとやりにくいというか調子が出ないっつーか」

「花村……」

「そっとしておこう……」

「Mクマ?」

「ちげーよ!! とも言い切れないのがちよつと悲しい」

Mなんだね。

「……ねえ」

里中が声かけてきた。うつむいていて表情はよくわからないけど、何か悲しそうな声だった。

「あたし……どつかで間違えちゃったのかな。あたしのやってたことってただ自分に酔ってただけだったのかな」

鳴上が「……里中」と呟く。シャドウが怒っているのか強い口調で言った。

『何をそんなわかりきったことを!!』

「……あたし、そんなに強くない。雪子が思ってるほど強くない。雪子が……雪子がいてくれたから!」

里中は話し始める。里中の表情はさつきまでとは違って何かを決意したようだった。花村の時と同じだ。

「あたしは雪子みたいに美人じゃないし、女らしくないし。将来何したらいいとかもわかんないし。嫉妬もしちゃうでしょうもないサイテーなやつかもしれないけど、それでも! やつぱり雪子が一緒にいてくれることがうれしいから……!」

『あ、ああああああ!! 何よ何よ何よ! 結局は雪子がいないと何も出来ないじゃない! だから雪子が手放せない! 雪子がいないと! あたしは何も出来ないただの落ちこぼれじゃない!』

「でも!」

里中はシャドウに負けずに話す。

「でも……あたし、雪子を守ることは出来る！ 守りたいんだ。雪子を早く、助けてあげたい……！」

シャドウがどんどん弱まってる。

「今クマー！」

「ジャックランタン！」

ジャックランタンがアギでシャドウを攻撃する。

「ジライヤ！」

ジライヤは風属性の攻撃「ガル」で炎をさらに広げる。シャドウがとても苦しんでいるのがわかる。

「止めだ！」

「いけ有里！」

「ハンチョー！ やっちやうクマーっ！」

みんなが僕を応援する。止めなら鳴上とかがやればいいのにつて思うけど、前回は鳴上が最後の攻撃をしたから譲ってくれたのかな。

「オルフェウス！」

オルフェウスがシャドウに近づく。ジャックランタンの炎がまだ消えてないからか、

消そうと悶えていた。

『ホンモノさんを庇っちゃって……アンタたちバカなの!』

「バカだよ。でも、里中が認めるきつかけをつくったのはもう一人の里中である君だと思ふ。だから……君も相当バカだと思ふよ」

オルフェウスが超至近距離からのアギを何発も放った。今回はちゃんと倒れないくらいにしてある。

シャドウは怪物から里中の姿に戻った。

「里中」

「大丈夫。……こんなあたしでも、雪子のこと好きなのは嘘じゃないから」

里中は、シャドウ千枝に真つ直ぐと向かって言った。

「アンタは……あたし。だよ」

シャドウ千枝は少し笑って姿を変えた。里中のペルソナ。名を「トモエ」。里中らしいペルソナだと思ふ。

「あ、れ……?」

里中が座り込む。そう言えばメガネかけてない。僕はクマに里中のメガネを渡すよと言った。里中はメガネをかけると視界がはつきり見えることに驚いていた。

「あるなら早く言つてよ!」

「チエちゃんがどんどん行っちゃうから渡せなかったクマよ」
「う、ごめんなさい」

クマによるとシヤドウはペルソナを持たない普通の人間は霧が晴れる日までは襲わないらしい。僕たちの世界と霧の晴れる日が逆みたいだ。だからとりあえず今日一旦戻っても問題はないらしい。それでも里中にとつてはヒヤヒヤするだろうが、一旦は抑えてもらった。

「そだ。リーダーさ、鳴上がやってくんね？」

「俺か？」

クマも里中も、もちろん僕も異議なし。鳴上も頼まれたら断れない性格なのか了承した。

「何で花村はしないの？」

「俺ってほら、参謀的な？ 有里でもリーダーよかったんだけどさ」

「僕はパス」

「というと思ってやめました」

よくわかってらっしゃる。僕は……もうしばらくいいよリーダーは。それに、鳴上の方が似合ってるし。

——新たなコミュニティ。「愚者：自称特別捜査隊コミュニー」

◇◇◇

今日の夜もファルロスが来た。正直後にしてほしいと思っただが、シャドウ戦後に来る習慣を変えないらしい。もう諦めた。少し話して寝た。(死神コミュ3)

◇◇◇

4月18日。月曜日。

花村と鳴上と話していると里中が登校してきた。もう体は大丈夫らしい。疲れもつれ、いつでもも行けると張り切っている。

「今日行っちゃうか？」

「リーダーは鳴上だから」

「俺が決めるのか？」

「鳴上くんなら文句なし。てか有里くんが決めても文句なし」

「それ花村じゃなきや文句ないってことだよね」

今日行っちゃうことになりました、と。

「やべトイレ行きたかったんだ！」

花村がダツシユでトイレに向かう。すると里中が僕と鳴上に話しかけてきた。

「二人とも、ありがとね。あたし、絶対雪子助けるから。頼っちゃっていいよ」

里中はニツと笑う。シャドウがする不気味な笑みではなく、とても明るい笑みだつ

た。

——新たなコミュニティ。「戦車：里中千枝コミュニ」

4月18日(月) ～ 4月19日(火)

放課後。再びテレビの中のお城。

「おい里中先行きすぎだっ!!」

「里中もう少しゆっくり行った方が……」

「大丈夫大丈夫!」

「何で鳴上にだけ返答するんだよっ」

「ヨースケフラレたクマね」

「フラレたの?」

会話は楽しそうだけど実はシャドウが次から次へと襲ってきて意外と楽しくない状況が続いていた。

『あらあ? サプライズゲスト?』

少し大きなホールに出ると前には天城がいた。いや、服装がドレス……シャドウか。

『どんな風に絡んでくれるの? さてさて、私は引き続き王子様探し! いったいどこにいるのでしょうか? こう広いと期待も高まる反面なつかなか見つかりませぬね』

『あ、それともこの霧で隠れんぼ? ようし、捕まえちやうぞ!』

『それじゃあ再突撃行つてきます！ 王子様、首を洗つて待つてろヨ！』

なかなかのテンション高めでそう言つて、シャドウ雪子は走り去つて行つた。途中で雑魚シャドウが襲つてくるが特に障害じゃない。僕らは倒しつつ先に進む。

「この扉の奥に気配がするクマ！」

「よし、行くぞ！」

鳴上の合図で里中が一気に扉を開ける。

「千枝!？」

クマの言うとおり、その部屋には天城がいた。そしてシャドウも。

『ようこそサプライズゲストのみなさん。はたまた王子様……。雪子……。待つてた!!』

『王子様が4人も！ いやくん雪子どうしよう!! つーかあ、雪子ねえ。どっか行つちやいたんだあ。どっか誰も知らない遠くう』

『王子様なら連れてつてくれるでしょお？ ねえ早くう』

「むっほ？ これが噂の“逆ナン”クマ!？」

そこに反応するんだ。つて4人？ 男子は鳴上に花村に僕……。

「4人の王子つて……まさかあたしも入つてるワケ……？」

「4人目はクマでしよーが！」

「それはないな……」

うん。僕もないと思う。そもそもクマって人間？ 頭外したら空っぽだったよ？
そんな不気味ってワケではなかったけど。

『千枝……ふふ、そうよ。アタシの王子様……いつだってアタシをリードしてくれる
……。千枝は強い王子様……』

『……王子様 “だった”』

“だった” ……？ 過去形？

『結局千枝じゃダメなのよ！ 千枝じゃアタシをここから連れ出せない！ 救ってくれ
ない！』

「雪子……」

『老舗旅館？ 女将修行!? そんなウザい束縛まっぴらなのよ！ たまたまここに生ま
れただけ！ なのに……』

「や、やめて……」

天城はそう言うがシャドウ雪子はやめずに話した。まるで、“ホンモノ”が言えない
のなら“影”が全部たまったのをはきだす、そんな感じを僕はシャドウ雪子から感じ
た。

『生き方……死ぬまで全部決められてる！ あーやだイヤだ。イヤあーっ!!』

「そんなことない……」

天城は必死に否定するが声がとても弱々しい。

『老舗の伝統？ 町の誇り？ んなもんクソ食らえだわッ！』

『それがホンネ。そうよね……？ もうひとりの“アタシ”！』

「ち、ちが……」

「よせ言うなッ！」

花村が叫ぶが今回も間に合わなかった。

「違う！ あなたなんか……私じゃない！」

『うふふふふふ！ いいわあ。力がみなぎってくるう！ そんなにしたらアタシ

……』

シャドウ雪子を囲む黒い影は上空に飛んでいった。そして勢いよく大きな鳥かごが落ちてきた。その中に鳥の大きなシャドウが現れた。

『我は影……真なる我』

シャドウが炎を出して攻撃してくる。あつという間にこの部屋一帯が炎に包まれた。

「ーっ！」

急に頭の中に声が響く。ファルロスだ。

【やあ湊。前回は彼がチェンジしたようだけど、今回は君からいこうよ】

僕は召喚器を構える。

「そうだね。彼が『ランタン』なら『フロスト』でいこう」

「うん。いいよ」

「ハンチョー? どうしたクマか?」

「鳴上に負けたくないだけ。……『ジャックフロスト』!!」

引き金をひく。現れたのは新たなペルソナジャックフロスト。ランタンが火でフロストが氷。彼が火を吸収するのなら僕は火を凍らそう。

『どつか遠くへ行きたいの……。誰かに連れ出してほしいの……。ここじゃないどこかへ!』

シヤドウが鳥かごで物理攻撃を仕掛けてきた。

「『アラミタマ』!」

勾玉のような形のペルソナが物理攻撃をガードする。鳴上の新しいペルソナだ。

僕はオルフェウスとジャックフロストを使い分けて戦っていく。鳴上もたまたまジャックランタンを出して火を吸収しながらイザナギで戦っていた。

「……ねえ鳴上。ジャックランタンとジャックフロストって間違えやすすくない?」

「そうだな。非常に間違えそうだな」

「今その話している!?!」

花村ナイスツツコミ。ジライヤが風でサポートしながらトモエを中心に戦っていた。

シャドウはそれに応戦しつつ語っていた。

『ひとりじゃ出て行けない……。ひとりじゃアタシにはなんにもないから』

「トモエっ!!」

トモエの攻撃がうまくいった。シャドウは苦しみだす。

『ああアアア。アンタなんかああああ……。』

『アンタなんか王子様なんかじゃない! どこ!? アタシの王子様!!』

天城は色々と悩んでいた。

「……鳴上、少し僕ら守っというて」

「わかった」

鳴上は僕に何も訊かずにイザナギで僕と天城を守るようにしてくれた。天城は僕の顔をじつと見てる。

「天城。僕の知り合いにも、家系に苦しんでた人がいた。苦しんでた、と言うより受け入れてた。その人は昔自分の家系の人が起こした罪なのに、自分が償うのは当然だ。みにいに思ってた」

僕が話したのは美鶴先輩のこと。花村と天城の悩みは、美鶴先輩と何となく似ているように思えた。里中は……友だちとか、親との関係で悩んでた風花かな?

天城は僕の話をしつと聞いてくれた。花村も、何か思ったことがあったのかジライヤ

でシャドウを少しづつ攻撃して僕らを守りつつ器用に聞いていた。

「つまり、シャドウが言っていたことは別にどうでもいい。天城はどうなの？ 家から出たいの？ 出たくないの？ この町が好きなら、家が好きだろうと嫌いだろうと別にいいんじゃない？」

言い終わると鳴上に目線で「もういい」と伝える。頷くとイザナギをシャドウの攻撃に全力を注いでいた。花村も攻撃を再開させた。

「そう……だね」

天城はそう呟く。すると次は大きな声だった。

「家の跡継ぎなんてクソ食らえッ！」

……かなり大胆なお言葉だ。

「けどね。父さんも母さんも。おじいちゃんもおばあちゃんも。旅館の人たちみんな、仲居さんたちも板前さんたちも。お得意のお客さんたちも、稲羽の町の近所のみんな家族みたいで」

「知ってる？ 小さい頃からみんな優しくしてくれたんだよ？ 千枝だって、おじさんおばさんも。今だって、鳴上くん、花村くん、有里くんだって。そういうなかで育ったから今の私があるんだよ。『旅館なんて潰れてくれたほうが』って思ったりもするけど」

「やっぱり私の家……。みんながいてくれて私がいられる場所……。潰すなんてやっぱりできないよ」

『アアアア!!』

途端にシャドウが苦しみだした。弱まった証拠だ。

『王子様はまだ来ないの？ 王子様早く。アタシを連れ去って！ どこか……。アタシのことなんか。誰も知らない世界に!!』

『希望もないこの世界から。ひとりを出ていく勇氣もないこのアタシを。ねえお願い。誰か私をここから連れ出して！ 私、待ってるの!!』

それでもシャドウは、王子様を待っていた。とても、悲しい気がした。

「ジャックランタン！」

ジャックランタンがシャドウの火の攻撃を吸収する。そして上空からジライヤとトモエ。

「いっけジライヤ！」

「トモエ！」

息の合った攻撃でシャドウを地面に叩きつける。後一息だ。

「この前もただけどき、何でトドメやらないの？」

「今回ののは、おまえが、いいこと言ったで賞だ！」

「ハンチョー！ 意味はわからなかったクマけど、いいこと言ったのは分かるクマよ！」
「やったれ有里くん！」

「有里、頼んだ」

僕はため息をひとつつく。とても盛大なため息だ。幸せ二日分は消えると思う。

『王子、様……』

「残念だけど来ないよ。王子様」

それでもシャドウは王子様と呟く。

「王子様は、探してもらうより自分で決めた方がいいんじゃない？ 男が待つ側だと思うけど」

『自分で探す……？』

「うん。その方が女子にとってトキメキ？ みたいなのあるんじゃない？ ……それでも見つからないなら」

僕はシャドウ相手に何言ってるのかと自分でも思ったけど、きつと他の人聞いてないよね。とか思いつつ。ジャックフロストを召喚して、言った。

「僕がなるよ。その『王子様』に」

『ああ……。私の、王子様……』

ジャックフロストの放つ氷がシャドウの体にまとわり、破裂。シャドウは消え、上空

からシャドウ雪子がきた。

「天城」

天城は頷いてシャドウに近寄る。

「前は、今までは千枝が手を差し伸べてくれたけど。今度は私がそうしてあげる。連れて行つてあげる。『あなたは……私』。一緒に行こう？　今回は大丈夫だから」

シャドウはペルソナに姿を変える。天城のペルソナ「コノハナサクヤ」。可憐な天城にピツタリなピンク色のペルソナだ。

こうして、天城雪子は無事に救出された。

ちなみに、今夜もファルロスが来た。(死神コミュ4)

◇◇◇

4月19日。火曜日。

天城は霧の影響で体調は優れないらしく、しばらくは休むらしい。それでもとても元気そうだと、と里中が言っていた。とりあえず、一件落着でよかった。

しばしの日常

4月19日(火) ～ 4月24日(日)

朝のHR前。天城の無事報告の後。

「それにしても里中。おまえよくそんなに元気だよな」

「え、フツーでしょ？」

「いやいや、俺結構疲れてる。な、鳴上、有里」

「え、平気だけど」

「疲れはないけど眠気ならある」

「有里に関してはいつもだろっ」

まだ戦いはじめて間もない頃の時はずかに結構疲れたけど……今は全然。けど鳴上は凄い。あ、里中もか。花村が弱すぎるだけ？

「鳴上くんと有里くんって結構体力あるよね。部活入ってたの？」

「いや、特には」

「僕は一応運動部入ってた」

あれは楽しかったなあ。剣道部だった僕は毎日練習が大変だった。

「話しは聞かせてもらった！ 鳴上に有里、バスケット部入らないか？」

「……へ？」

朝のHR5分前。いつの間に横にいた人に勧誘されてしまった。

「……違うクラスだよね？」

「話が聞こえたから」

これ以上つつこんだら負けだと思う。

◇◇◇

先程の謎の人物は「一条 康」というバスケット部の部長だった。一組だけど里中と天城はそれなりに交流はあったらしく知り合いだとか。

そして時は放課後。体育館。バスケット部員数名とサッカー部なのに助っ人である三組の「長瀬 大輔」。そしてバスケット部マネージャーの「海老原 あい」の前に僕と鳴上がいた。

「新しく入部した鳴上と有里だ」

「よろしくー」

僕と鳴上は軽くお辞儀した。このバスケット部は人数が少ないのでよく仲よしの長瀬が助っ人として来ることが多いらしい。

今日は挨拶だけなので、これで解散となった。帰り、肉丼食べようと一条に誘われ愛

屋に寄っていくことになった。

◇◇◇

「入ってくれて助かるよ！ 人数が少ないから練習試合も出来ないし大変だったんだ」
要するに感謝されているようだ。ただ入っただけなのにこんな喜びとは思わなかった。

「これからちよくちよく部活来いよな。来なかったら呼びに行っちゃうからな」

僕と鳴上は互いに顔を見たあと一条に頷いた。剣道やってた自分がバスケなんて出来るのかと思ったが、とりあえずやってみようとは思うのだった。

——新たなコミュニティ。「剛毅：一条康コミュニー」

「そうだ。有里」

長瀬に呼ばれた。鳴上ではなく僕だ。嫌な予感もするのだが一応訊いた。

「なに？」

「おまえ剣道部だったって聞いたぞ」

「うん」

「足には自信あるよな？」

「それなりに」

話を聞いていた一条が乱入してきた。

「サッカー部は人数いるだろう」

「バスケット部の助っ人で来てた恩がまだあるだろう？ それにたまにでいいんだ。俺の練習相手として、たまに付き合ってくれないか？」

三人の視線が僕にきた。剣道とサッカーって絶対結びつかないと思うんだけど。よし、こうなったら鳴上巻き込んでやる。

「たまに鳴上も巻き込むなら」

「えっ」

鳴上が驚いた顔してる。やったぜ。

長瀬が頷き、渋々鳴上も頷いたので交渉成立。たまに長瀬の練習相手としてサッカー部にも顔を出すことになった。

――新たなコミュニティ。「節制：長瀬大輔コミュニティ」

◇◇◇

4月20日。水曜日。

暇。その一言しか言えなかった。暇だったので河川敷に行ったら順平率いる少年野球チームがせっせと練習していた。

暇だったので今日一日は野球の練習に加わった。（正義コミュニティ2）

◇◇◇

4月21日。木曜日。

事件が進歩しないので今日も暇だった。そろそろ月末。お金の心配が出てきたので花村に頼んでジュネスで不定期でバイトが出来るようにしてもらった。花村には感謝しきれないな。その日はジュネスの売り上げに貢献してやった。(魔術師コミユ2)

◇◇◇

4月22日。金曜日。

鳴上とジュネスのフードコートで話し合った。ワイルドの力について色々話した。途中でバイト終わりの花村も加わり、事件についての話やマヨナカテレビについてなど話した。(永劫コミユ2)

◇◇◇

4月23日。土曜日。

明日休みだ何しよう、と考えていると急に別の人が寝ていたらしく先生が怒っていた。ブーツとしていたから僕までドキツとした。チラツと先生が行った方向を見ると花村だった。

「花村のせいで僕までドキツとした」

「えっ。俺のせい？」

◇◇◇

4月24日。日曜日。

本気で何しよう。二度寝しようかな。でもせっかくの田舎だから散歩もしたい。

「それで俺を呼んだの？ 俺も引越して来た組なんだけど」

花村を急遽呼び出して暇潰しの散歩をすることにした。

「鳴上は呼ばなかったのか？」

「花村が一番呼びやすい」

「まあ、俺は基本断らないタイプだから？ 頼られてる？」

「うんうん。頼ってる頼ってる」

「雑！」

暇潰しだったのか今回はコミュのランクは上がらなかった。残念。

4月25日(月) ～ 4月29日(金)

4月25日。月曜日。

どうやら文化部の募集が始まったらしい。演劇部と吹奏楽部が募集しているそうだ。

「……え」

朝のHR前。僕は椅子に座って数分後驚きの声のある人物に向かって言った。後ろの人、と言えはわかるだろう。鳴上悠だ。

「一応訊こう。何で僕に？」

花村とか里中……いや里中は運動系の方が似合ってる。

「じゃあ逆に訊く。花村も文化系が似合うと思うか？」

「思わないな」

「おいつ」

あ。聞こえていたようだ。花村がこちらに来る。

「おはよう。花村」

「相棒おはよう……じゃなくて。俺だって出来るよ？ 似合うよ？ 文化部」

「そう」

「有里もつと興味もって!？」

花村がそう軽く叫ぶが僕には特に関係ない。僕は鳴上に話を戻すよう言う。

「鳴上。もう一度言つて」

「一緒に吹奏楽部に入ろう」

何でそうなった。

鳴上は吹奏楽部に入ろうと思ったが何なら誰かと一緒に入った方が楽しいかと思ひ僕を誘つたらしい。

「別に部活出る日は合わせなくてもいいから。頼む」

僕は花村をチラリと見る。「俺知らね」とでも言うように視線をそらす。少し苛立つたから消ゴムを花村に向かって投げた。

「いてっ」

「あ、手が滑つた」

「わざとだろ」

「うん」

ここでチャイムが鳴った。「考えておいてくれ」と鳴上に言われた。リーダーの頼みだからたまには真面目に考えようと試みることにした。



「いいよ。入る」

「ありがとう」

僕と鳴上は音楽室に行った。部員に挨拶したあと、今日は見学して終わりになった。

「……手伝おうか」

「え、あ。ありがとうございます」

僕と鳴上は一年の女子の片付けの手伝いをした。名前は「松永^{まつなが}綾音^{あやね}」。

「手伝ってくれてありがとうございました。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ」

「よろしく」

——新たなコミュニティ。「太陽：松永綾音コミュニー」

◇◇◇

4月26日。火曜日。

今日の夜から29日まで雨が降るらしい。そろそろマヨナカテレビの確認もしないといけないだろう。今日は特に何もせず、何も起きなかった。

◇◇◇

4月27日。水曜日。

放課後。鮫川河川敷。

今日は一日中雨が降っていた。川の流れを見ながら歩いてしていると急に声が聞こえた。周りに誰もいないことから僕に向かって言っていることがすぐに分かった。

「ちよつ！ ちよつと傘入れてーっ!!」

「……っ!!」

聞き覚えがかなりある声と共に一人の女性が傘に入ってきた。その女性は屋根のあるところを見つけるとそこまでお願いと頼んできた。僕はゆっくりと歩く。

到着すると女性はバックからタオルを取り出して濡れたところを拭く。傘を持ってない少女に渡してしまったとか。

「ホントありがとね。こどもに傘を渡したのはいいケドそれで私が風邪ひいたらどうするのって話よねえ……」

「……あの。名前訊いても、いい?」

「ん? いいよ。入れてくれたお礼だと思えば安いしね。……私の名前は「岳羽^{たけぼ} ゆかり」! 不死鳥戦隊フェザーマンRのフェザーピンク役……わかるかな?」

「一応。知り合いが好きだから」

「よかった……。今ここら辺で撮影してるの。結構長い撮影だね。今年はずつといる“んじゃないかな”

二年前からとても成長してる。身長だったり精神もそう。順平と同じく大人になっ

てる。

ちなみにフェザーマン見てるのは完全に天田の影響かも。ゆかりがフェザーピンクやっているのも知ってた。見てるからね。けど撮影で八十稲羽来てるのは驚いた。

「そうだ！ 今度見に来る？ 君、私の知り合いに雰囲気似てるって言うか？ ミステリアスな感じなのよねえ。それに傘のお礼」

「いいの？」

「うん！」

知り合いに雰囲気似てるって……順平にも言われたな。そんなに似てるかな？

今度、撮影を見学させてもらおう約束をした。とても嬉しかった。なにげに僕もハマったのかな？ フェザーマン。

「じゃあ電話番号とメルアド。それと名前教えて」

「僕の名前は……有里湊」

「うん。よろしく、有里くん」

やっぱり、昔の仲間に会えるのは嬉しいよな。今も楽しいけど、やっぱり命がけで戦ったからかな？ これからも戦うことになるけれど。

この調子で他のみんなとも出会えるといいな。

——新たなコミュニケーション。「悪魔：岳羽ゆかりコミュニー」



4月28日。木曜日。

「いらつしやいアルー！」

「肉丼一つ」

「あいヨー!!」

「愛屋」によつた。お腹へつたしジュネス行くの面倒だし、それに暇。夜ごはんと暇潰しを兼ねて来た。

カウンターの席に座りふと隣を見た。大盛りの雨の日限定「スペシャル肉丼」を食べている男性だった。そこまではよかつた。問題が一つ、いやかなりあつた。

「あの」

「ん? 何だ?」

「何故、〃マント姿で上半身裸〃なんですか?」

顔見て驚いたが正直順平やゆかり程ではなかつた。むしろ衝撃が小さすぎた。何故だか納得してしまつたのだ。目の前にいるのはかつて一緒に戦つた「真田^{さなだ}明彦^{あきひこ}」先輩だつたのだ。もちろんここは別世界なので真田先輩は僕のことを知らない。

「少し前まで大学を休んで外国に修行に行つていたんだ。この町には雨の日限定の肉丼があると聞いてな。一旦帰国することにしたんだ」

「いや大学行ってくださいよ。もうかなり筋肉あるじゃないですか」

「いいや。まだまだ足りんのだ」

「そうですか」

「お待たせー 肉丼一つアルー！」

肉丼きたので僕も食べることにした。真田先輩はもくもくとスペシャル肉丼を食べている。するとふと真田先輩が僕に訊いてきた。

「最近、不可解な事件が起きてるらしいな。それとマヨナカテレビ……だったか？ おまえは何か知らないか？」

この真田先輩の真剣な表情。もしかして美鶴先輩辺りが何か組織とか作った？ まあどうでもいいけど。……でも真田先輩たちにはこっちの事件には踏み込んでほしくない。

これは、僕たちの解決すべき事件だと思うから。

「……何も知らなくていいと思いますよ。『真田先輩』」

だからと言って何も知らせないのはアレなのでは？ と思ったのであるキーワードだけ言おうと思う。

「何故俺の名前を知っている？」

「これは警察じゃ解決出来ない。何故なら『シャドウ関連』だから」

「まさかおまえ……」

「これは僕たちが解決すべき事件だと思うから、あなたたちは踏み込んでほしくない」

小声で会話したから周りの人には聞こえていないと思うけど、少し心配。でも、これで僕がペルソナ使いだということは分かってもらえただろうか。

「ふっ。そうか。覚悟はあるようだな。別に構わん。どうせ俺はまた修行に戻るからな」

「いやだから大学行ってくださいよ」

真田先輩は会計を済ませると僕の肩に手をポンと置き、一言行って去っていった。

「頑張れよ」

ただ、それだけだった。

◇◇◇

4月29日。金曜日。

今日を過ぎれば霧が出る。今夜はマヨナカテレビを見ようと僕たちは決めた。

家に帰り深夜12時まで待つ。この時間がかかなり長く感じる。影時間の時だつてそうだ。タルタロスに行くのと知らせてから時間になるまでがかかなり長く感じるのだ。

「……そろそろ」

そう呟くとすぐにテレビがついた。誰も映っていなかった。つまり天城は死ぬこと

はない。無事に今回は救出出来たとようやく実感がわく。

すると電話が鳴った。鳴上からだ。

「もしもし」

『明日から天城来るって里中が』

「よかった」

『……やったな』

「喜ぶのは犯人捕まえてから」

『そうだな』

「おやすみ」と言い合って電話をきる。今日はよく寝れそうだ。……いつものことだ
けど。

4月30日（土） ～ 5月2日（月）

4月30日。土曜日。

里中の言うとおり元気な姿で天城がやってきた。体調に問題はないようだ。安心。

放課後。僕らは屋上に集まっていた。天城と里中はカップ麺を食べるようだ。現在お湯を入れてしばらく待つてるところ。

「お待たせ。千枝はお蕎麦のほうだよね」

「サンキュ！ おくこの匂いたまらん……。これ、あとどんくらい待ち？」
「全然まだよ」

話を戻す。天城に事情を訊くために今回は集まったのだ。花村は天城にさらわれたときのことを覚えてないか訊く。

「落ち着けば思い出すかなって思ったけど時間が経つほどよくわからなくなっちゃって……。ただ、玄関の……チャイムが鳴って誰かに呼ばれたような気はする」

「ただそのあとは気づいたらもうお城の中だったらしい。天城は「ゴメンね」と謝った。」

「謝んなくていいって。けどやっぱその来客つてのが犯人!？」

「どうだろうな……もしそうなら相当大胆だぜ。玄関からピンポンなんてき、目撃者がいないか警察も洗ってんだろうけど……。あんま期待できねーな。すぐ身元割れるよ
うなナリで歩き回んねえだろうし」

「なぜこんなことするのか？」についてはわからなかった。鳴上は犯人に訊かないとわからないとか言っていた。だけどハッキリしたことがひとつある。

「ーこれは悪意のある人がさらってテレビに放り込んでる。つまり……『殺人』だ
ということだ。」

「あ。そうだ言っただけだ。俺と鳴上に有里で犯人挙げちゃうことにしたからさ！」

この事件、正直警察には無理そーだけど俺らには「^{ベルツナ}力」があるからな」

里中も元気に手を挙げて「あたしもやる」と名乗りをあげた。そしたら天城もやると
言った。もう自分から逃げたくない、と言った。

「でもどうやって犯人捜す？ 今んとこ手がかりなしだよな」

「先回り」という案があったがそもそも誰が次に放り込まれるのかわからないのが悩
みだ。でもひとつだけもしかしたら手の手がかりがあった。「マヨナカテレビ」だ。

ハッキリ映るのが放り込まれた後ならノイズ音の混じった荒い映像はその前。天城
のときはその順だった。

雨が降ったら要注意。とりあえずみんなですう決めて、この話は終わりにした。

ちなみに、天城と里中のカップ麺を鳴上と花村が食べてしまい、肉を奢ることになったのは……また別の話。だって僕は食べてないから関係ないしね。

◇◇◇

クマを天城に紹介するため、僕たちはテレビの中に来たよ。

「お礼に来たよ。クマくん」

「ユキちゃん元氣？」

「まあこのクマきちのためにも犯人見つけようってことになってさ」

クマは事前につけてあったらしく、天城にメガネを渡した。メガネをかけた天城はとてもインテリ系でスゴい似合っていた。

「クマはメガネをしないの？」

「おっとハンチョーそれ訊いちやう？ またまたいい質問クマ！ 何を隠そうクマはこの『眼』自体がレンズになってるクマ！ 知らなかったクマ？」

花村が「知らねーよ」と眩く。クマは指先を動かしているらしいが全然わからない。花村が肘でクマの頭を突くと何かが落ちた音がした。

「あ。それちよつぱり失敗したメガネ」

そのメガネを天城にかけてみる。

「あはは。どごう？」

「似合ってる」

「え!？」

「うん。むしろ自然」

「へ!？」

失敗したメガネとは宴会で使われると言われている「鼻メガネ」だった。意外と似合ってる。

「はい次は千枝ね」

「どういう流れ? これ……」

「ぶふーっ!! う……ぶぶっ! あはは、あははっはっはっは! ち……千枝の顔……ぷっ……ははは。あははっはっはっはっは!」

急に爆笑しだした。確かに里中の鼻メガネ姿面白けどそこまでいく?

里中によると天城は笑いのツボがおかしらしく、よく変なことで笑うのだとか。里中の前以外ではないと思っていたらしい。つまり、他人でも見せるくらい天城は変わったってことだ。それでもまだ僕らしか見せないのかもしれないけど。

ーランクアップ。「愚者：自称特別捜査隊2」

◇◇◇

5月1日。日曜日。

月が変わって5月になった。この世界に来てもうそろそろ一ヶ月になると思う。時の流れは早いと思う。

……と、思っていたのだが。ブーツとしてばかりいられなくなってしまった。

「花村。休憩まだ？」

「始まってまだ一時間しか経ってねえのによくそんなこと言えんな」

さっそくバイトを始めました。初めてのジュネスでのバイトということで花村のサポートを今回はすることになった。

「てか最近花村とばかり絡んでる気がするの、は気のせい？」

「……どうも気のせいとは思えねえのはなぜ？」

暇になるたびに花村を呼びつけている気がする。

「ほら続きやるぞ」

「はーん」

そんなこんなで今日のバイトは終わり、無事にバイト代をゲット出来た。……節約しててもいつかはなくなってしまうし、それで怖いんだよね。

◇◇

5月2日。月曜日。

里中に頼まれて河川敷で特訓することになった。二人きりとかどんな苦行だよ、と思

い鳴上も連行。チラツとベンチの方を見たらいつも通り少年野球チームが練習してた。

ボールが転がってきき順平が「湊へイ!!」とか言っていたので思いつきり投げたら順平が尻餅ついた。速かったらしい。別に僕はそんなつもりないんだけどな。(戦車コ

ミュ2)

5月3日（火） ～ 5月13日（金）

5月3日。火曜日。

今日は憲法記念日で学校はお休み。僕は家にいた。すると電話が鳴る。花村からだ。

『おーっす有里。ジュネス遊びに来ねーか？ 里中に天城、鳴上に菜々子ちゃんも来るぜ』

「うん。行く」

『おっしや。じゃ、待ってるぜ』

「了解」

◇◇◇

ジュネスに行くのと既に他のメンバーが揃ってた。花村がピフテキを奢ってくれた。

「サンキュ」

「奢ってくれた。じゃなくて奢らされた。な」

「うんまー!!」

「千枝。ゆっくり食べないと喉につまらせちゃうよ」

「おいしいー!」

「うまいな」

友だちと食べるのはいつでも楽しい。今日は暇だなと思っていたけど、楽しい休日になっただけ。

「ゴールデンウィークだったのにこんな店じゃ菜々子ちゃん可哀想だろ」

「そうだね。こんな店で、ゴメンね」

「うっ、真面目に言われるときつい」

「こんな店って花村が言い出したんでしょ。ある意味自業自得。」

「ジュネスだいき」

菜々子ちゃんは笑って言った。花村が感動してる。よかつたな花村。

「でもほんとはどこか行こう行くはずだったんだ。おべんとう作って」

「お弁当、菜々子ちゃん作れるの?」

天城が訊くと菜々子ちゃんは首を横に振った。その後鳴上を見る。……なるほど。

「鳴上、料理出来るんだ」

「たしなむ程度には」

「へー 家族のお弁当係? すごいじゃん、お兄ちゃん」

菜々子ちゃんは小さな声で「お兄……ちゃん」と言っていた。意外と気に入ったのかな、鳴上の呼び方。

「へー おまえ料理とかできんだ。たしかに器用そうな感じあるけどさ」

「あ、あたしも何気に……上手いよ。たぶん」

「何でそんなに自信なさげなの？」

「有里くんは料理出来るの？」

「同じくたしなむ程度」

「って言ったら花村がかなり驚いてた。やってたし教えてもらってたから。……荒垣先輩に、ね。」

「あ、有里くんが出来るならあたしも出来る！」

「いっやー ……ないわ、それは」

「何で僕が出来るなら里中も出来るのさ」

「僕できないとか思われてた？」

「んじやあ勝負しようじゃん」

「じやあ菜々子ちゃんが審査員かな。この人ら、菜々子ちゃんのママよりウマイの作っちゃうかもよ？」

すると菜々子ちゃんは少し悲しげに言った。

「おかあさんいないんだ。ジコで死んだって」

花村……地雷踏んだな。命ないな。

それでも菜々子ちゃんはお父さんがいるから平気だと言った。それに、お兄ちゃん……鳴上もいるから、と。

「よし菜々子ちゃん一緒にジュース買いに行くか！」

「うん！」

花村は悪いと思っただのだろう。菜々子ちゃんと共にジュースを買いに行った。そしてたら天城と里中も菜々子ちゃんに何か奢るべく二人の元に向かった。

「不味いな。僕収入ジュネスのバイトしかないんだけど」

「貸そうか？」

「……いや、さすがに“お兄ちゃん”に奢られるのは」

「あまりお兄ちゃん……とは」

鳴上を呼びに戻ってきたのか菜々子ちゃんが来た。

「なにしてるの？ いっしょに行こ？ ほら“湊お兄ちゃん”も！」

……湊、お兄ちゃん。

「行こうか“湊お兄ちゃん”」

「鳴上ホントごめん。僕が悪かった」

僕らは菜々子ちゃんの元に向かう。僕が右側で鳴上が左側。

「菜々子ちゃん里中たちから何か奢ってもらおうの？」

「たこやき買ってくれるって。湊お兄ちゃんも食べよ！　いいよねお兄ちゃん？」
「……ああ」

ちよつと待つて鳴上怖いよ。ホント怖いよ。

今だけ鳴上が笑うと怖かったが菜々子ちゃんが元気に笑っている姿を見ると普段通りに戻った。シスコンだな。

今日はシスコンな鳴上の姿を見ただけでもよしとしよう。……湊お兄ちゃんと呼ばれた衝撃は翌日になっても続いたが。

◇◇◇

5月4日。水曜日。

今日もみどりの日でお休み。特に何もなかった。

強いて言うなら、「一日中寝てみよう！」と思つてベッドで寝て、気がつくとき深夜12時だったことには衝撃的だった。

◇◇◇

5月5日。木曜日。

ゴールデンウィーク最終日。こどもの日。

今日はバイトをした。休憩時間に昨日のことを花村に言つたら、

「飯は？」

「朝ごはんだけ。午前7時に起きて食べて10時に寝て深夜12時」

「……おまえある意味スゲーよ」

「ありがとう」

「誉めてるワケじゃない。ちゃんと飯は食べるって」

何かオカンみたいなことを言われました。どうしましょう。そうだ、消ゴムを投げようリターンズだ。

「いてっ!」

「ごめん手が滑った」

「絶対嘘だよなっ」

「うん」

「開き直った!?!」

バイトは辛いけどお喋りは楽しかった。

◇◇◇

5月6日。金曜日。

放課後。

そう言えば、みなさんお分かりだろうか？

実はあと土日挟んだ月曜日は中間テスト

だということに。

「先生花村くんが寝てますっ!」

「起きろスイング」

「いてっ! ……ってまた消ゴムかよっ!! 何回使うのそのネタ?」

「これがラスト。名付けて『消ゴムを投げようファイナル』」

「無駄にかっこよくすんじやねえよ」

僕は今教室でテスト勉強の真っ最中。高二の勉強再びの僕、成績上位の天城、前の高校で10番以内を勝ち取った鳴上。この三人が先生役だ。

生徒役は平均以上をとれるものがあればダメな教科もある里中と基本アウトギリギリの花村。やり方さえ覚えれば赤点余裕で回避出来る学力をもってるのになあ。

「わっかんねえ!」

「だからこうしてこう。花村は覚えがいいんだから覚えちゃった方が早いよ」

「くっそく まさか有里スゴく頭いい組だったとは」

「……ふふ」

「うわあー!!」

月光館学園の三年トップが美鶴先輩ならば、僕は二年のトップとも言える。何せ毎回一位だったから。

続きは土日であろう、ということになり今日はひとまず解散した。

◇◇◇

5月7日。土曜日。

今日は一日雷雨だった。雨は今日でやむらしいのでマヨナカテレビの心配はないが、里中のこの怯えようが唯一の心配だった。

放課後。僕らが帰ろうとするところでもない雷が鳴り響いた。そのせいで数分停電になった。

「うう……」

「里中怖いのか？」

「こゝ、怖くなんかないもん！」

そう言う里中の目にはうつつすらと涙があつた。……かわいい。

「今日はさっさと帰った方がいいね」

「そうだな」

今日勉強しようにもこの雷じゃ集中出来なそう（主に里中）なので今日は止めておくことにした。明日は晴れるらしいので、明日朝一にジュネスのフードコート待ち合わせとなった。

◇◇◇

5月8日。日曜日。

雨や雷はやんだが空はまだ雲があった。明日からの中間テスト。里中は頑張ってるよ感はあるが、花村がもう死んでた。真っ白に燃え尽きた感じしかなかった。

「花村……燃え尽きたって感じだな」

「明日大丈夫、コレ？」

「うーん、千枝はギリギリって感じだけど花村くんは……」

「うう、もう……ダメ」

◇◇◇

5月9日。月曜日。

中間テスト一日目。何か後ろでヒューヒュー小言を言ってる声が聞こえた。

◇◇◇

5月10日。火曜日。

二日目。今日はグシャグシャって音が聞こえた。まさかとは思いついてみるとそのまさか。花村がテスト用紙をグシャってした音だった。

◇◇◇

5月11日。水曜日。

三日目。次はスースーと聞こえた。チャイム鳴った瞬間に後ろを見ると花村が寝ていて起きるところだった。

◇◇◇

5月12日。木曜日。

最終日。今日は何も聞こえない。最終日くらいは真面目にやろうと思ったのだろうか。今日もチャイム鳴った瞬間に見ると……。

「えっ、いない」

いなかった。僕の眩きに気づいたのか鳴上も後ろを見る。

「……有里。俺、相棒としてスゴく心配になった」

「僕もスゴい心配」

◇◇◇

5月13日。金曜日。

ジュネスに行くのと鳴上ともう一人いた。

「誰だっけ？」

「天城がいなくなった時の。あの刑事さん」

「足立です。どうも」

思い出した。あの口が軽そうな刑事だ。

「サボリ？」

「酷いなあ、聞き込みだよ聞き込み」

「右手にソフトクリームを持って聞き込みする刑事初めて見た」

「あ、あはは……」

結論。足立さんはサボりだ。鳴上もそのサボりに付き合うらしい。僕も付き合うことにした。

「物好きだよねえ、君たち。ここでこんなことしてないで友だちと遊んでた方が楽しいと思うよ？」

「今も十分楽しいと思います」

「僕は暇を潰せればどうでもいい」

「あはは。面白いね君たちは。僕、これからもここにいるから。あ、悠くん堂島さんには内緒ね。たまに話に付き合っつてよ」

サボり癖のある刑事。足立さんと知り合ったのであった。

——新たなコミュニケーション。「道化師：足立透コミュニー」

熱気立つ大浴場

5月14日(土) ～ 5月17日(火)

『静かな町をおびやかす暴走行為を誇らしげに見せ付ける少年たち……』

『そのリーダー格の一人が、突然カメラに向かって襲い掛かった!』

『見世モンじゃねーぞコラア!!』

5月14日。土曜日。

テレビに一人の少年が映ってた。そう言えば何か一年で噂が色々あつたな。その噂には一人の少年の名前が必ず出てきた。

「たつみ かんじ 巽 完二」

八十神高校一年生。まさかの後輩キヤラだとは驚き。S・E・E・S時代の時は後輩キヤラはなあ。……天田くらいなもの。コミユキヤラなら伏見とかいたけど。……コミユキヤラだし。

こういう後輩キヤラが仲間になったら最高だろうな。あ、別にテレビに落とされると願ってるワケではない。

一応、これでもちゃんと事件について考えてはいる。

そして夜。雨が降っていた。マヨナカテレビ、念のために見ておかないと。「……あれ、どこかで見たような」

強そうで不良みたいな外見。ついさつき……あ。そうか。異完二だ。つまり、次の犯人の標的は彼かもしれない。鳴上と電話して、明日ジュネスに集まろうということになった。



5月15日。日曜日。

僕たちはジュネスに集まった。

「えー それでは。『稲羽市連続誘拐殺人事件特別捜査会議』をはじめます」

「ながっ！」

「じゃあ、ここは特別捜査本部？」

「おー それぞれ！ 天城上手いこと言うな」

『特別捜査本部』……いいね。何か惹かれるものがある。

「まずは昨日……マヨナカテレビ、見たよな？」

花村が話をきりだす。みんな頷く。特番見た直後だから映った人物が誰なのかピンきたようだ。

「はつきり映らなかったってことは、まださらわれてないってことか」

鳴上の意見に僕も頷いて同意する。つまり、まだ助けられる。ということだ。

「あの子。小さいときはあんな風じゃなかったけどな……」

「天城は知ってるの?」

「うん。あの子の家染物屋さんなんだけど、ウチ昔からお土産品仕入れてるの。だから今も完二くんのお母さんとはたまに話すよ」

「染物屋さん、行ってみる?」と天城が提案し、僕たちはその染物屋「巽屋」に行くことになった。

◇◇◇

「こんにちは」

店に入ると人がいた。お婆さん……この人が完二のお母さんだろう。そして少年が一人。

「それじゃあ僕はこれで」

「あんまりお役に立てなくてごめんね」

「いえ。なかなか興味深かったです。ではまた」

少年は去っていく。僕たちの横を通り過ぎる際、こつちを見た気がした。鳴上も見ていたらしく、同感らしい。

気を取り直して完二のお母さんに話を訊く。

「このスカーフ、どつかで見たような」

里中が見てるひとつのスカーフ。確かに、僕も見覚えがあった。どこだろう……？
思い出そうとしていると横から「あつ！」と何か思い出した顔を花村がしていた。

「わかったテレビの中だ！ ほら、山野アナの……！」

あー。確かにそうだった。あの不気味な部屋のスカーフ。あれだ。里中も鳴上も思
い出したようだ。

完二母によると元々山野アナに頼まれたオーダーメイドだったらしい。男物と女物
のセット。だけど片方しかいらないと言われたらしく、もう一枚は仕方なく売りに出
ている、と。

マヨナカテレビを確認しつつ完二に注意。となつて、今日は解散となつた。



5月16日。月曜日。

学校終わり、気になつたので僕は異屋によつた。すると昨日会つた少年と完二が話を
していた。

「あ……明日なら別にいいけどよ……。あ？ 学校？ も、もちろん行ってつけど……」

「じゃあ明日の放課後、校門まで迎えに行くよ。それじゃあ、また明日」

「お……おう」

少年は去っていった。僕の横を通った時、目が合ってしまった。少しドキドキしたのは秘密だ。

「男にドキドキしてるの？」

「あ？ 誰だおまえ」

「二年二組、有里湊。よろしく、完二」

「え、あ……ウス」

あ、敬語使えるんだ。僕が先輩だとわかった途端に敬語使うてことは……。

「僕って先輩に見えない？」

「……その。正直、そうっスね」

完二は申し訳なさそうに言った。すると今度は完二の方から僕に訊いてきた。

「その。先輩は俺のこと怖くなのか？」

「別に？ 僕の周りには完二より怖い見た目の人(荒垣先輩)がいたからね。完二なんて

まだ可愛いもんだよ」

「か、かかかか可愛いつて言うんじゃねえよ！ キュツとしめんぞオラア！」

「なぜそこで動揺する」

何か今回のマヨナカテレビは色んな意味で恐ろしい気がする……！

「じゃ、また暇潰しで来るから」

「暇潰しで来られても困るっス」

「なら突撃？」

「もつと迷惑！」

とりあえず、今日の生存確認は出来た。次は、「尾行」だ。僕は花村に今日の完二と少年との会話を話した。明日、二人が校門前で待ち合わせをする、と。そしたら僕の予想通り、尾行するぞ、と返ってきた。



5月17日。火曜日。

朝。僕らは集まって今日の尾行について話していた。

「場所は完二と染物店の両方。絶対犯人に先越されたくないな。……というわけなんです。天城、ケータイ番号教えてみない？」

花村。それが狙いか。

「……あ、思い出した。今日尾行終わったらお豆腐買って帰るんだった」

「うわ……いつさい聞いてねえ……」

「はいはい。……でもそっか。張り込み？ 尾行？ 地味にワクワクしてきたぞ！」



放課後。僕らはすでに張り込みを始めていた。

『ターゲットは登校しているな?!』

『目標確認。ターゲットは登校済みであります!』

『ターゲットは本日昼休み終了間際、母親の手作り弁当持参にて登校。現在はトイレで髪の毛をいじってるであります』

『ターゲットはやたらソワソワしており、絡まれたらイヤなので出てきたであります!』

「ここまでは花村と里中の会話だ。いつもより張り切っている。テスト勉強の時と大違いだ。この二人の音声は電話を通して。では今僕はどこにいるのか。」

『……んで何で有里は堂々とターゲットと共に行動してるんだよ!!』

『いつの間に完二さんと仲よくなっただね』

天城が「すごい」と誉めてくれたのはいいけど花村はともうるさい。ターゲットにバレルだろう。

「何で先輩は俺の横にいるんすか。その……周りに変な噂とか」

「知らないしどうでもいい」

「……オレ待ち合わせがあんだけど」

「別にいいよ。行ってきた。ただこの学校にいる最中は共に行動をしてもらうだけ。僕のこととは気にせず行動すればいい」

完二は少し納得いってない顔だが僕は無理矢理納得させた。今日のターゲットの情

報は大部分は僕が直接訊いてきたのだ。今回の張り込みのMVPをもらってもいいと思う。

『有里。ターゲットと少年の接触を確認。至急戻ってこい』

「りよーかい。それハマった？」

『ちよつとな』

みんなと合流したあと分担を分けた。完二には里中と花村が。染物屋の方は僕、鳴上、天城が向かう。

◇◇◇

神社の入り口で僕らは飲み物を飲みながらゆっくりと待っていた。

「お店の方は特に変わったことはないみたい。このまま何もなければいいけど。犯人来るかな……?」

「どうかな。な、有里」

「僕にふらないでよ。来ないことを祈るしかない」

天城は少し怖いけど、自分だけ何もやらないってのはイヤなようだ。

「あ、ごめんね。なんでこんな話してるんだろ。な、なんか緊張してるみたい。千枝もね、ああいう性格だから男の子の友だち多いけど……今は鳴上くん、有里くん。それに花村くんと一緒に一番楽しいみたい」

するとボソツと「……私も」と聞こえた。天城の顔を見ると少し恥ずかしそうだ。
「……私も楽しいよ」

そうだ。花村は失敗したけど僕らならいけると思う。

「天城、番号交換しない?」

「そうか、事件のことですぐに情報交換出来るように。だな」

頷く。天城は少し恥ずかしがっていたけどOKしてくれた。花村、君だけ断られたな。どんまい。

——新たなコミュニケーション。「女教皇：天城雪子コミュニー」

◇◇◇

その後、二人が戻ってきた。両手を上にあげ、まるで「お手上げ侍」とでも言うかの如く。そしたら完二が戻ってきて変にキョドったりして、色々逃げ回ったあと解散した。空はもう暗くなりかけていた。これならきつと完二は大丈夫だろう。

……そう、思っていた。

『あ、天城ですけど。あのね、完二くん家にいないんだって! 旅館のちよつとした用のついでに染物屋さんで電話してみたの。それでね、完二くんのお母さんと話したんだけど……。完二くんどこかへ出掛けちゃってそのまま帰ってきてないみたいなの』

夜に散歩かれては……。こちらもお手上げ侍としか言いようがないよね。

マヨナカテレビを確認して明日話そう。そう天城に落ち着くよう言って電話をきつた。そしてテレビを見る。深夜12時。ノイズ音から始まりどんどん映像が……鮮明になっていった。

「完二はすでに中、か」

鮮明になった映像にたたずむのは一人の男。異完二。ただ天城と同じく違うところと言うかツツコミたいところが大量にあつた。

まず一つ目。

『皆様こんばんは。〃ハツテンボクの町!〃のお時間どえす!!』

その口調とキモい顔はなに？

そして二つ目。

『今回は……性別の壁を越え、崇高な愛を求める人々が集う。ある施設をご案内します。極秘潜入リポートをするのはこのボク……。異完二くんどえす!!』

何故サウナ？　そしてだからその最後の「どえす」はなに？

最後の三つ目。

『いったいボクは、というかボクの体はどうなつちやうんでしようか!?　それではこの崇高な愛を求める施設〃に突入!　してきまあす!!』

完二。おまえ……やっぱり……。〃そう〃なのか？

5月18日(水) ～ 5月19日(木)

5月18日。水曜日。

テレビの中に行くとかクマがシヨボンとしていた。誰かいるだろ、と花村が訊いても、「あ……うん。誰かいるみたい」

とても元気がなさそうだ。僕らは色々訊いてみる。元気なさそうだがちゃんと答えてはくれる。

「みたいて場所は？」

「わからんクマ……」

「もー なんなの。なんかスネてるのか？」

「わからんクマ……」

「完二くんって男の子だと思っただけだ」

「鼻クンクンしてもどつからのニオイかわからないの……」

「どうやらかなり深刻なご様子。この世界ではクマが頼り。クマがわからないとかなり困るのだ。」

「ムムムム。『カンジクン』のヒントがあるといいかも！ そしたらクマ、シュー

チューできる予感がひしめいてる」

完二のことがよくわかるような……。噂ならとつても大量に聞くけど……。人柄が感じるようなヒント、か。これは難関だなあ。



5月19日。木曜日。

ちなみに今日はテストの結果発表の日だった。先生役はいつも通り。僕と鳴上でトップ争いだったらしいが、勝負は僕の勝ちだった。里中は何とか赤点じゃなかった。一方花村。真面目に受けたやつと最早教室にいなかった教科があった。

そしてまさかの受けたやつは全て赤点を余裕を回避。これだったら全部出てろって話だよな。

そして放課後。正直こちらが本題。

「ヒントって言われてもなー。カンジクン」。お友だちとか少なそうだしな」

ヒントを求めジュネスにやってきた僕、鳴上、花村。

「おまえ最近仲いいだろ。何かなかった？」

「一言二言話したただけだから」

「そか」

「二人とも。あいつ……」

鳴上が指差す方を見るとあの少年がいた。

「有里、おまえ行つてこい」

「何で」

「俺に借り返してねえはずだ」

バイトの件、と言われて僕はドキツとした。確かにそれに関してはまだ返してない。

僕は仕方なくその少年に声をかけた。

「ちよつといい？」

「……何か？」

「この前、完二……異完二と話してたところ見たんだけど、何話してたの？ おかしなと

ころなかつた？」

これだけ訊くと何かと疑われそうなので一応補足的なものも言っておく。

「僕完二の先輩……なのは制服見ればわかるか。最近仲よくしてるから心配で。何か

あったのか、と」

「……ふうん。ま、いいでしょう。何か急いでいる様子だし、聞かれたことにお答えしま

す。それに……」

……？ それに？

「周りから避けられている彼とすぐに仲よくなれた貴方は少し興味深いので」

「そう」

見てたんだ。あの時の会話。

「そうですね……たしかに最近のことを聞いたら何か様子が変でした。だから感じたまま伝えました。『変な人』だね……と。ずいぶん顔色を変えてましたよ。こちらがビックリするくらいでした。それを踏まえると普段の振る舞いも少し不自然だったよ。うな気がしましたね」

少年は『コンプレックス』を抱えているのでは、と丁寧に教えてくれた。それにしても……何か違和感がある。この少年に対して。

僕は二人に先に行くよう伝えた。

「まだ何か？」

「えっと、僕は君のことを少年と呼んでいる。あ、名前知らないからこう呼んでるだけ。それで、その変なこと訊くけどさ、たまに君のことが『女』に見えるんだけど……」

それ以上は何も言えなかった。この前少年と初めて会い、張り込みの前日に会った時に感じた違和感。どうしてもこれだけは早急に取り除かないといけないと思い、意を決して訊くことにした。

「……まずは名前を。『白鐘 直斗』です。性別は……そうですね。貴方の違和感の通り、とだけ答えましょう」

「歳訊いていい?」

「16歳の一年生です」

つ、つまり……少年……直斗は、女? 違和感の通り、が答えならたぶんそうだよな。

「先ほどの方たち待ってるのでは?」
「有里先輩」

「あつ。ありがとう直斗」

僕はお礼を言つてエレベーターに乗った。一瞬間こえた直斗の眩き。

「これで……二人目ですよ。すぐに見破つたのは」

聞くと少し誇らしげになった。

「あれ、僕の名前言つたっけ?」

疑問がひとつ生まれてしまったが、これ以上みんなを待たせる訳にはいかないのでそのままテレビの中に入っていった。

◇◇◇

テレビの中。別部隊の里中と天城も戻っていた。

「手掛かり見つかったクマね! ふむふむコンプレックス……。……え、それだけ!?

それだけで探すクマ? クマ使いが荒いクマね……」

「これ、完二くんのハンカチ染物屋さんに行つて借りてきた」

ヒントとハンカチを使ってクマはクンクンと鼻を酷使している。たまに汗くさいと

かでどんよりしていたけど、無事に反応を見つけてることが出来たようだ。

僕たちはクマの後ろについていく。

「(ハ、ハ)……」

サウナだった。とても熱気がムンムンとしてる。何か……僕ら男子にとって嫌な予感しかしない場所だ。

「なあ、二手に別れね？俺と鳴上、有里はこのまま帰って、里中と天城はこのまま完二の救出」

「それだー！」

「いいと思う」

「じゃない！ほら、行くよ」

僕ら重い足取りで歩く。するとひとつの広い部屋についた。真ん中にいたのは……シヤドウ完二だった。

『ウツホツホ。これはこれは、ご注目ありがとうございます！さあついに突入りちゃったボク完二!!』

「うわあ……」

僕たち全員の心の声だった。こうやって生でシヤドウ完二を見ると……何か腹立ちよね。

『【女人禁制！ 突入！ 愛の汗だく熱帯天国】 あ・や・し・い、熱帯天国から、お送り
していまあす!!』

「ペルソナああつ!!」

僕、鳴上、花村がペルソナを召喚した。今にも襲いかかろうとする僕らを里中、天城、クマが必死に止める。

「お、落ち着くクマ〜!」

「うっせ! 早くしねえと体が危ねえんだよ! もう心がもたねえんだよっ」

「あ、有里くんも落ち着いてっ」

「あれはダメ。本気でダメ」

これに巻き込まれるのなら風花入ったばかりの大型シャドウ戦の方がまだ……マシだった! たぶん!

『まだ素敵な出会いはありません。このアツイ霧のせいなんでしょうか? 汗から立ちのぼる湯気みたいで、ん〜 ムネがピンピンしちゃいますねえ』

「ペルソナああああつ!!」

「チエちゃんも落ち着くクマ〜!」

「何かムカつく」

「だよな」

まるで「ヤケクソ」のバットステータスを受けてるような気分だった。でもノリは同じだったよな。天城の時と。

「ノリとしては天城と同じ気がする」

「えっ……」

何かショボンと悲しんでいた。

『ボクが本当に求めるモノ……見つかるんでしょうかんふつ。それでは更なる愛の高みを目指して、もつと奥まで突入！ はりきって……行くぜコラアア!!』

何で最後素に戻った？

「同じ、アレと同じ……」

奥から雑魚シャドウが襲ってくる。

「……何かムカつく！ ペルソナツ!!」

天城はペルソナ「コノハナサクヤ」を召喚して火の攻撃でどんどん倒していった。

「ジライヤツ!!」

ジライヤが続けて攻撃しようとするが、火がまだ燃えていてジライヤに移り花村の背中にも火が出た。

「あっちい！」

「トモエ！」

トモエの氷結魔法で燃えていたシャドウを凍らせる。すると花村の背中^ツの火も凍った。

「うう……さみーよー」

「イザナギ！」

最後にイザナギが凍ったシャドウを砕いて倒す。またまた連動して花村の氷も砕かれた。

「花村無事？」

「もうダメ……早く助けよーぜ。身も心もヤバくなる」

「ガンガー」

僕は『女教皇』のペルソナ、ガンガーを召喚して回復魔法^{ディアラマ}をかけた。花村の言うとおり早く助けないとこちらの安全がヤバくなる。

「いつそ灰にしちやう？」

「いいんじゃないか？」

「よくない！」

「ええ〜？」

あつちで物騒な会話があつたが里中がいて助かった。危うくシャドウ完二^ニが灰に……。

「オルフェウスでも出来るよ」

「じゃあ一緒にやる?」

「有里くんものつちやダメ!」

やっぱりダメらしい。ホンモノなら躊躇うがシャドウは、と言われるといっさい躊躇わなくなりそう。

僕らは早急に完二を助けるため奥へと向かう。

一番奥の部屋の扉にはピンクのペンキとかで「おいでませ」とか何とか書いてあった。完璧ココが完二のいる部屋だろう。

「さあ行くか」

そう花村が言ったが……。

「……行かないクマか?」

「え?」

五人分の「え?」が響いた。誰も扉を開けようとしなかったのであった。そりやあ……自ら行きたくはないよねえ。

5月19日(木)

誰も……もちろん僕も扉の前に立つだけで開けようとしな。自分から開ける人なんてここにはいないのだ。

「こういう時は男子から、ほら」

「はあ!? つておい里中押すなよ!」

花村が反論するが里中は僕ら男性人の背中を押すのをやめない。「わかったから」と観念し押すのをやめてもらった。

ゆっくり、そーつと開ける。

「おい!! 動くんじゃねえ!」

『いいね! もつと!』

僕ははすぐに扉を閉めた。

「……さ、帰ろ」

「帰ろう」

「これ以上いたら俺たちの心と体はポロポロだ」

「おい男子たち待てえ!」

帰ろうと出口に向かって（本気で）歩きだそうとすると里中と天城、クマに止められた。君らはさっきの光景を見てないからそんな幸せでいられるんだ！

「あれはダメ！ 里中も見えてみろってマジ無理だからっ！」

「あれは……ないわ」

「そ、そこまで言うんだ」

次は女性人プラスクマが先頭だ。彼女らもゆつくりと開ける。その瞬間閉めた。

「ダメダメダメ!!」

「あれはないクマ！ ダメクマ！」

「やっぱ灰にしているんじゃないかな」

どうやら彼女らもわかったようだ。それでも助けないと完二の命が危ないので泣きの一回だ。全員で突入する。

「ほらやっぱり……」

完二とシャドウ完二は取っ組み合いをしているのだが、格好からして最早アレにしか見えない。二度と見たくない光景だ。

とりあえず何とか離れてもらった。

『おっと、邪魔するならこうだっ！』

シャドウ完二は何かマッスルポーズをすると横のお湯が漏れて足元に浸かる。

「……………？ 何これ、これが何だって……………うわあ！」

「千枝！ ……えつ、きやあ!!」

「こ、これはローション!? あのぬるぬるの!？」

「おい里中、天城大丈夫か……………」

花村が固まった。花村に向けてた視線を女子の二人に戻す。

「な、何よこれえ……………」

「ぬるぬるしてて気持ち悪い……………」

「鳴上、録画出来るもの持ってないか!？」

「くつ、ない!」

確かに写真撮りたい気持ちはわからなくは……………ないな。これを順平が見たら花村並に興奮しそう。

てかクマは? と思つたらクマはローションで滑つてた。

邪魔者僕たちが足止めされたのを見ると、シャドウ完二が話し出した。

『もうやめようよ嘘つくの……………。人を騙すのも自分を騙すのも嫌いだろ? やりたいことやりたいって言つて何が悪い?』

「……………！ オ、オレあ……………」

『ボクはキミの〴〵やりたいこと〴〵だよ』

「違うー！」

僕らがいるからだろうか。バレたくないの一心で必死に反抗してる。でも、それじゃあシャドウの思う壺。

『女は嫌いだ……。偉そうでわがままで怒れば泣く。陰口は言う。チクる、試す、化ける。気持ち悪いモノみたいになんかボクを見て変人、変人ってさ……。で……。笑いながらこう言うんだ』

いつの間にかふざけている表情から真剣な表情になつていたシャドウ完二。

『裁縫好きなんて気持ち悪い。絵を描くなんて似合わない。男のくせに、男のくせに、男のくせに……。』

『男ってなんだ？ 男らしいってなんなんだ？ 女は怖いよなあ……。』

「こつ、怖くなんかねえ」

『男がいい……。男のくせについて言わないしな。そうさ男がいい……。』

「ぎつ……。けんな！ なんなんだテメエ。人と同じ顔してフザけやがって……。』

『キミはボク……。ボクはキミだよ……。わかってるだろ……。？』

「違う……。違う、違う！」

「ダメだ完二！」

「完二くん！」

僕と天城が叫ぶ。けど、既にヒートアップしたのか聞こえなかったらしい。言っ
てしまったのだ。

「テメエみてえのが……。『オレなもんかよ』!!」

『ふふ……。ふふうふふ……。ボクはキミ、キミさアア!!』

シャドウ完二は姿を変える。巨体に薔薇……。

「天城と里中のシャドウの方がまだいいと思わない?」

クマに訊いてみる。クマは静かにウンウンと頷いた。

『我は影……。真なる我……。ボクはジブンに正直なんだよ。だからさ……。邪魔なモンには消えてもらうよ!!』

雷攻撃で完二を攻撃しようとするシャドウ。僕たちはペルソナでどうにか完二を守
る。

「これ……。完二くんの本音なの!?!」

「こんなの本音じゃねえ! タチ悪く暴走しちまつてるだけだ!!」

シャドウに攻撃するが中々通らない。二体の別のシャドウが邪魔をしているからだ。
クマが言うにはこれもシャドウ完二の一部だとか。

「イザナギ!」

イザナギが突っ込む、が片方に捕まった。うわ、気持ち悪っ。

『ふふ、いい体ね』

「チエ、チェンジで！」

鳴上はイザナギを引つ込める。イザナギを捕まえた奴を天城のコノハナサクヤが攻撃する。

『効く〜！』

「えっ、火が効かない!？」

火の耐性持ちのようだ。

「トモエー！」

もう一体をトモエが「ブフ」で攻撃する。

『ヒンヤリ〜！』

「ええーっ!？」

こっちは氷耐性らしい。

「ペルソナツ!!」

鳴上が「ラクシャーサ」を召喚し、ジライヤとオルフェウスで突っ込む。魔法が効かないなら物理でいこうとした、が。

『捕まえたっ』

「チェンジで！」

「チェンジ」

「うわっ！ おまえらずりぞっ」

……うっ！ 何か後ろから強烈な視線を感じる！

「うっ」

「ひっ」

「ギャー！ センセイとヨースケがドクドクマー！」

二人はその……尻を触られた。色々と終わった感を出して倒れてる。僕は狙われなかったようだ。ホッ。

「わっ」

「ギャー！ ハンチョーまでドクドクマー！」

油断していた……。まさか僕まで標的だとは。

「男子がやられた！」

「大丈夫。私たちには興味ない、はず……」

さっき僕らを毒にしたヤツが天城をジーツと見ていた。たぶん火耐性のヤツだ。そいつは天城を上からジーツと見ると一気に言った。

『ミスマツチ、レッド!!』

「何ですって!!」

怒った天城はコノハナサクヤで攻撃を連発。しかし火耐性のせいで全然効かない。

「ちよつと雪子!? ……へ?」

次は氷耐性のヤツが里中を見ていた。そして何か言うのかと思つたら……。

『……』

里中の肩に手を乗せて「うんうん」と頷くだけだった。

「何か言えよっ!!」

里中也怒つて氷攻撃を連発させた。こちらも全然効かない。

「みんな落ち着くクマーっ!」

唯一無事なのは非戦闘メンバーのクマだけ。

男性人は毒を受け、女性人はヤケクソのバツトステータスを受けてしまった。

「二人スゴい怒つてるぞ」

「ああ、そーだな」

「こつちの方が精神的ダメージなのわかつてる?」

「……そう、だな」

女性人は怒つてるだけで倒す気満々だからまだいい。けど、僕らは精神的にやられてしまったのだ。花村と鳴上は色んな意味で苦しんでいた。もちろん、僕もだ。

「何とかしないとなあ」

「俺、しばらく立ち直れそうにねえぞ」

「何するんだ有里？」

そろそろこれする頃合いだと思うから、今回は先に僕が鳴上に手本を……ああもう説明するのもめんどいのでやつちやう。精神的にしんどすぎ。毒は治ったけど。

「行くよ、＼イゴール」

聞こえてるのかどうかわからないけど、とりあえず言ってみた。するとまさかの聞こえたらしく返答が返ってきた。

「＼合体、をなさるのですな」

僕は頭の中で合体するアルカナの属性を思い浮かべる。今回は「戦車」と「太陽」だ。

合体の召喚には銃はいらない。目の前に魔方陣が見え、左右に合体するアルカナカードがある。後ろのみんなが驚いていたことを見るにみんなにも見えているのだろう。

「鳴上、よく見といて。これが……＼合体」だ」

一気に二枚を合わせる。カードは一つになる。僕はそのペルソナをそのまま召喚する。

「ハッ！」

「剛毅」のペルソナの「オニ」。見た目そのまま名前通りのオニだ。

「いけっ！」

木っ端激塵新り

オニは物理攻撃をする。少し体力が減った気がするが今はそんなの気にしない。それでも倒せる気はしないが少しづつダメージを与えられている気はある。

『な……なんだよお……。自分らだつて“ヘン”つて思ったクセに……。心の底じや認めてないクセにツ!!』

どんだん力が強くなつてる。だんだんとこちらが押される状況になってしまった。

『ボクはもう押し通すつて決めたんだああああああああ。絶対に負けるもんかあああああああああツ!!』

攻撃一発一発がとても重い。とくに雷攻撃が強力。雷弱点のジライヤはかなりキツいだろう。

「花村無事？」

「何とか、だな」

「回復は任せて」

ガンガーのディアラマを定期的にかけて花村を助ける。それでも二連続きたときは死ぬかと思つた。

『……まだ生きてたんだ。ホンモノは消えてもらうよっ!』

「完二くんが！」

「危ないっ!」

女性人が叫ぶが完二との距離はシャドウの方が近い。でもその雷攻撃は防がれた。

「相棒!」

「くっ……」

鳴上がとつさにイザナギで防いだのだ。イザナギは雷耐性だけどダメージはかなりきたようだ。鳴上は膝をついた。

「鳴上、もう一回くるよ!」

シャドウは攻撃のモーションをとる。絶体絶命……そう思ったが、問題なかったようだ。

「あれはさつき有里がやったやつ、だよな」

鳴上もペルソナ合体を始めた。召喚されたのは『月』のアルカナ「ヤマタノオロチ」だ。

「有里くん、これ完二くんに」

その時、天城が僕にウサギのストラップを渡した。少年が完二に渡してほしいと。

「完二、これ!」

僕は鳴上の後ろにいる完二に渡した。そこまでの道のりは若干危なかったけど花村がサポートしてくれた。回復のお礼だと言っていた。

「それ、完二が作ったのか？」

鳴上が完二に訊いた。完二は恥ずかしそうに「悪いかよ」と言った。鳴上は首を横に振って否定する。

「いいんじゃないか？ ……かわいいよ、完二」

「……一応訊くけど完二の人間性、だよな？」

「……それ以外にあるのか？」

天然だコイツ！ 天然だ！

その後、鳴上のヤマタノオロチで邪魔な二体を倒し、残るはシャドウ完二だけになった。シャドウ完二の攻撃は鳴上が防いでる。

完二は渡したウサギのストラップを握りしめると前に歩きます。鳴上は何をするか察したのか右にずれた。

「うおおおおっ!!」

完二は走りだし、シャドウのお腹を……えっ、殴った!?

「うわ、あれで倒れた」

「本人ならいけるってことじゃないのか？」

「それか完二だから出来たとか？」

初めてホンモノがシャドウを倒した瞬間だった。

『…………ツグ、ウフフ…………ふふふ』

シャドウの姿は元に戻ったが、まだ諦めてないようだ。

「ま、まだ向かってくるクマ！ よっほど強く拒絶されてたクマか…………？」

『誰でもいい…………ボクを受け入れて…………。誰でもいいんだ。誰かボクを受け入れてよお
おおおお!!』

「やめろって言うてんだろお!!」

シャドウは完二の一声で止まった。そんな完二の表情は先程とは違っていた。……
もう、大丈夫のようだ。

「たく…………情けねえぜ…………。こんなんがオレん中にいるかと思うとよ…………。知ってんだ
よ…………。テメエみてえのがオレん中にいることくらいな！ 男だ女だってんじやねえ
…………。拒絶されんのが怖くてビビッてよ…………。自分から嫌われようとしてるチキン野
郎だ。」

「テメエがオレだなんてこたあとつくに知ってんだよ。テメエはオレで、オレはテメエ
だよクソツタレが！」

完二は心の底から思いつきり言ったからなのかとてもスッキリとした表情になって
いた。シャドウ完二もさつきまでと変わっていい表情になってペルソナへと変化した。

完二のペルソナ。「タケミカツチ」——黒くて大きい。たくましいペルソナだ。

「今回も、無事救出成功。だな」

花村の言葉にみんな頷いた。無事に、今回も終わったのだ。

「それにしても、さ」

「……そうだな」

「疲れたよなあ……」

「もうここに来たくない……」

「そうだね」

「クマも疲れたクマよ……」

クマは何もしてないよね？

ーランクアップ。「愚者…自称特別捜査隊3」

日常回2

5月19日(木) ～ 5月23日(月)

完二救出後の夜、久しぶりのファルロスがきた。何だか少し嬉しそうだつた。(死神 コミュ5)



5月20日。金曜日。

「やば。熱でた」

久しぶりにペルソナ合体をしたからなのか、もしくはあんなシャドウと戦ったからなのかわからないが、僕は熱をひいて寝込んでいた。もちろん学校は休んだ。

「仕方ない。病院行くか」

バスに乗って稲羽唯一の病院に向かう。風邪ひくのは月光館の文化祭の日以来かな。あれは辛かった。



無事に薬を買って帰ろうと病院を出た直後。

「……いたつ。すみません」

「ああ。こちらこそ悪い」

人とぶつかってしまった。熱のせいで足元がふらついたのだ。こういうことになるなら放課後で鳴上や花村に頼めばよかったな。

「ん？　ー！　おいっ、大丈夫か!？」

後悔しても遅かった。僕は……気がつくのと氣を失っていた。失う前、声が聞こえた。誰かの声にそっくりだったけど……誰だったっけ。

◇◇◇

「……ん」

「起きたか。今リンゴ剥いてる。食べるか？」

「食べれます。……え!？」

ぶつかった人は隣でリンゴを剥いてくれていた。その人に礼を言おうとして顔を見たととき、僕は普段出ない変な声を出してしまった。そして、*“涙”*が出た。

「お、おい。どうした？」

「あ、いや……」

声が出なかった。僕の目の前にいた人物。僕のいた世界では*“死んでしまった”*。僕に嫌々ながらも料理を覚えてくれた優しい先輩。「荒垣先輩」だったのだ。

「とりあえず、リンゴ食って落ち着け」

「いただきます」

しばらく僕は無言でリングゴを食べた。目の前に荒垣先輩がいることをまだ信じるこ
とが出来ず、たまにチラツと荒垣先輩の顔を見てしまう。

その度に荒垣先輩から「……何だ」と言われてしまった。恥ずかしくて「別に」とそつ
ぽを向く。……まあ、よくよく考えればこれも“if”の一つだと思えばいいのだ。

「荒垣先輩が生きてる世界」。これもまたりっぱなif世界だ。

それでも気になつてしまう。何故荒垣先輩はこの世界では生きているのかと。

「……今さら訊きますけど、二年前に起きた「辰巳ポートアイランド」での事件に巻き込
まれたりは……?」

「よく知ってんな。二年前あそこに住んでたのか?」

「……ええ」

真田先輩には活動部の核の一部的な存在だったから思わず話してしまつたが、荒垣先
輩にはちよつと躊躇われる。

「確かに巻き込まれたけどな、**“重症”**つてだけで生きてたんだ。死ぬんじやねえかと
自分でも思つたけどな」

今はこの八十稲羽に引越してのんびりしながら、半年に一回程度念のため検査に來
ているらしい。

本来なら検査はまだなのだが、偶然にも風邪をひいたらしく薬を買いにきたようだ。僕はこの町にきて一ヶ月経つが荒垣先輩に今まで会わなかったなんて……！ ある意味不運だと思う。やっぱ花村といたからかな？ 花村つて不運なんだよ。

◇◇◇

「ここです会ったのも何かの縁」ということで荒垣先輩と色々話をした。もちろん、シャドウ、ペルソナ関連は伏せた。やっぱ真田先輩に言ったのは間違いだったかな？ ま、もう遅いけど。

病室に医者に来て「もう帰っていい」と言われたので帰ることにした。携帯を確認すると捜査隊のみんなからメールがきていたので返信した。

「じゃ、もう平気だな」

「はい」

「またな」

荒垣先輩が帰ろうとする。僕は思わず引き留めた。

せつかく会えた。例えいつかはまた会えなくなるとしても、今この時荒垣先輩が生きることが事実だから。幻でもなく、夢でもない。紛れもない現実。

「今度、料理教えてください」

「誰から聞いた」

「……いえ、誰にも。そういう怖い人に限って何か女子力あるのが定番なので」
「どんな定番だよそれ。……はあ。わかった」

こうして、僕はこの世界の荒垣先輩と知り合った。午前辛いと思ってた熱も、ポジティブに考えるなら……荒垣先輩と知り合えたという幸運があつたのだろう。

——新たなコミュニティ。「月：荒垣真次郎コミュニティ」



5月21日。土曜日。

放課後、僕は神社に向かった。特に意味は無いのだが何かお参りすると学力が上がる気がして、昔行っていたのでついつい足を運んでしまった。それに、神社に行くと「少女」がいたからよく行っていたのだ。

昨日荒垣先輩がいたのだからもしかしたらこういう「もしも」もあり得るんじゃないかと思った。

「……お兄ちゃん、食べないの?」

「あ、うん。あげようか?」

「いいの!?! ありがとうお兄ちゃん!」

現在「惣菜大学」という店の前の小さな飲食スペースにいる。

さつき僕が考えた「もしかしたら僕の世界で出会った人たちがいるのでは説」につい

てだ。正直僕は半信半疑の所もあつた。偶然、そう思つていた。ゆかりも順平も真田先輩も、荒垣先輩だつて単なる偶然。

「よく食べるね」

「お兄ちゃんは男の子なのに食べないんだね」

「お腹減つてないだけ」

では、この目の前にいる「少女」についてはどう説明すればよいのだろうか？

知つてる人は知つている。知らない人は知らない。少女の名前は「大橋おおはし舞子まいこ」。ちなみに名字の方は今日知つた。だつて前の世界では教えてくれなかつたし。

神社につくと珍しく、そしてとつても見覚えのある顔があつたので声をかけたところ舞子だつた。舞子が言うには「お腹空いたけど家に帰りたくない」とのことらしいので仕方なくここで奢つていたという訳だ。後で花村に今度バイト連続でシフト組んでもらうよう頼まないと。

ちなみに両親は離婚して今は母親と暮らしている。ここは僕も知つてる。同じで少しホツとしたのは内緒だ。悩みは「母親が仕事ばかりで構つてくれない」。……また家庭の問題だつた。

「お兄ちゃん、また遊んでくれる？」

舞子がキラキラとした目でこちらを見てくる。二年歳をとつても相変わらずの笑顔

だ。

「うん。また遊ぼう」

「約束だよ！」

この世界でも僕は舞子に振り回されることになるのであった。……手紙を読んだあと父親に厳しい目を向けられたのがまるで昨日のようだ。

——新たなコミュニケーション。「刑死者：大橋舞子コミュニケーション」



5月22日。日曜日。

今日はたまたま外に出掛けていた。帰り道、ある人を見かけた。

「鳴上に菜々子ちゃん」

「有里か」

「湊お兄ちゃん、こんにちは！」

「こんにちは」

そうか。この家は鳴上の家か。正確に言えば堂島家だけど普段僕は鳴上しか(菜々子ちゃんはたまに)接しないので、ここは「鳴上の家」と言っておく。

「何してるの？」

「お兄ちゃんがね、〃かていさいえん〃を作ってくれてる！」

「家庭菜園？」

「菜々子が苗を貰ってきたから植える場所を作ってるんだ。ここを上手く開拓すればそれなりに出来ると思っただんだ」

へえ……。鳴上って器用だね。

進歩状況はあと看板を作れば終わりのようだ。「せっかくだから」と僕も手伝うことに。かなりの力仕事だった。

「できたーっ!!」

「結構それなりに出来たな」

「ああ」

そして菜々子ちゃんが苗を植える。あとは水をあげながら成長を見守るだけだ。

「有里、手伝ってくれてありがとう」

「別に。僕は特に何もしなかった」

仲良く話していると急に鳴上が話を変えてきた。

「そうだ。有里、聞いたことあるか？ 河原に不思議な人がいるんだと」

「不思議な人？」

「ああ。何か……一言で言うなら。『エレベーターガール』？」

「ーっ!」

まさか……。 「エリザベス」か？ いや、ただのエレベーターガールつてこともありうる。けれどこの町にいたか？ 不思議なエレベーターガール。

「明日いるらしい」

「……教えてくれてありがとう」

僕の反応を見て知っていると察したのか鳴上は何も訊かなかった。とても冷静で、ありがたかった。

今日は二人に別れを言って帰り、そのまま寝た。明日、まつさきに河原に行こうと心に決めて。



5月23日。月曜日。

放課後、早速僕は鮫川河川敷に行ってみた。

「ほうほう。釣り……。つまり魚との戦い。命をかけた素晴らしい決闘。ということでございますね」

いた。一人言を呟いていた。

「別に命はかけないと思うよ。……。いや、魚にとっては命懸けか」

「あら、これはこれは。お客人、偶然でございますね」

「マーガレットから聞いたの？」

「ええ。しつかり、聞かせていただきました」

エリザベスは足元の石を持つと投げた。何がしたかったのだろう。……あ、水切りか。

僕も足元の石を持ってやってみた。意外と上手く出来たので少し嬉しかった。

「流石でございませす。水切りは力をいかにコントロールしどの角度で投げるのか。……とても興味深い遊戯でございませす」

そこまで真剣に水切りを分析しなくてもいいと思う。

「有里湊様。……二年前、別世界で貴方がしてくれたようにこの世界でもあの町を案内してくれたお客様がおりませす」

辰巳ボートアイランド

そこで、ひとつお願いがございませす。……この八十稲羽を案内して頂けませんか？」

僕は頷く。エリザベスの言うとおり僕はあの町をいろいろと案内した。エリザベスはとても不思議な人だけども楽しかった。

「ありがとうございます。私が暇な時は大体河原かベルベツトルームの前にありますので、その時はよろしくお願い致します」

エリザベスは丁寧にお辞儀したので僕もつられてお辞儀した。そして、最後にもう一度水切りをして去っていった。

——新たなコミュニティー。「女帝：エリザベスコミュニー」

5月24日(火) ～ 5月31日(火)

5月24日。火曜日。

放課後。河川敷のベンチで天城に頼みがあると言われて付き合うことにした。頼みとは「弁当作ったから食べてみてくれ」だった。鳴上に押し付けようとしたら「もう食べた」と返事が返ってきた。このとき、天城が料理出来ないことを知った。風花と同じレベルだった。(女教皇コミユ2)

☒☒☒

5月25日。水曜日。

ゆかりから今日撮影があると連絡があつたのでお邪魔することにした。フェザーピंकを演じてるゆかりはとてもカッコよかった。(悪魔コミユ2)

☒☒☒

5月26日。木曜日。

今日は高台に来た。高いところから見る景色が気に入ったのでこうしてたまに来て
いる。

ベンチに座っている一人の女性がいた。今日は先客がいたようだ。

「外見の条件と一致。見つけました」

こちらを振り向くとそう言った。服装は違っていたものの、その顔はとても見たことがあった。

「貴方は……ペルソナ使い”ですね。真田さんを、ご存じの”

「……やっぱ報告したか」

目の前にいたのは対シャドウ特別制圧兵装七式「アイギス」だった。真田先輩が何かの組織に入っているとは思っていた。

アイギスに真田先輩が何を報告したのか訊くと答えてくれた。

「真田さんを知っているということは恐らく美鶴さんも知っていることかと思えます。

真田さんが報告したのは八十稲羽での殺人事件はシャドウ関連だということ。ペルソナ使いが事件を解決しようとしていること。その中の一人が「関わってほしくない」とこちらがペルソナ使いだと知ってて言ったこと。

この三点です」

それにしてもアイギスってどんどん人間っぽくなってきてる。まあ、それは一旦おいて。

「組織の名前、教えてくれる?」

「“シャドウワーカー”」

「シャドウワーカー……。それで、そちらのリーダーからの伝言とかあるの?」

アイギスは頷く。リーダー、すなわち美鶴先輩のこと。僕としては出来れば関わってほしくない。じゃあ真田先輩に言わなければよかったのではとか思うが、どうせ事件の詳細は後に伝わるだろう。

「美鶴さん……と言うよりかはシャドウワーカーとしての伝言です」

個人ではなく組織としての?

「何故名前を知っているのかは訊かないことにする。そして、我々はこの事件に〃一切関わらない〃。しかし、万が一のことがあった時のために組織の人間を二名配属する」
それ関わらないって言えないのでは? もう美鶴先輩に伝わってしまったのだからいいよね。思いっきり言って。

「ゆかりや順平は組織の人じゃないの?」

「お知り合いましたか?」

「いや、ここで会って知り合った」

「ゆかりさん達は組織の中でも特別な位置にありまして、非常時特別制圧部隊。通称エクストラ・ナンバーズに所属しています」

ならなおさら、万が一の場合は彼らでも十分果たせるはず。そう言うときアイギスは首を振った。

「配属はわたしと風花さんが担当致します。この町に在住の組織の人間には「ただの息抜き」と無理矢理嘘をついて在住してます」

アイギスによると風花は正式な組織の人間ではないののだが、大学での成績は優秀なため休学をあつさり認めてくれたとか。それに「田舎に興味があった」とかで本人も少しのり気らしい。

「最後に訊くけど、本当に関わらない？」

「はい」

「アイギスはこれから何を？」

「のんびりしていようと思います。出来れば、事件の状況をたまに教えていただきたいのですが」

僕は頷く。

シャドウワーカーはこの事件には関わらない。その代わりに、事件の状況をたまにアイギスに報告する。

交渉成立だ。

「新しいコミュニティ。『塔：アイギスコミュニー』」

「今度、風花さんの方からも挨拶に来るかと思えます。……あ、名前教えてくれますか？」

「有里湊」

「よろしくお願いします。湊さん」

それにしてもシャドウワーカー……か。結構デカイ組織作ったなあ美鶴先輩は。

☒☒☒

5月27日。金曜日。

今日はバイトをして帰った。今月はいろいろと出費があつたからそろそろ収入を得ないと少々まずいのだ。

「有里湊さん……ですか？」

玄関の前に女性がいた。声で何となくわかつたが一応訊いた。

「山岸風花さん？」

「はい」

「ここ、オートロックだったと思うけど」

「その……外で待つてたんですけど、余りにも早く来すぎてしまった待ち時間が長かつたんです。そしたらそんな私を見かねた管理人さんが通してくれて」

それでいいのか管理人。もつと疑えよ。いや、風花を疑えと言つてる訳ではない。

「昨日アイギスから聞いたけど挨拶をしに来た……でいいんだよね？」

「はい。ついでに湊さんがゆかりちゃんや順平くんと仲がいいと聞きましたので二人か

ら情報も仕入れてきました。二人のことも名前前で呼んでるそうですね。私のことも自由と呼んでくれて構わないですよ」

情報を仕入れた……風花らしい言い方だ。そこは普通に話を聞いてきた、とかでいいと思うのだけど。

「何かオペレーター面で困ったことがあれば私の「ユノ」がお助けしますので言うてくださいね。あ、万が一、ですからね」

「ありがとう」

風花は「では」とご丁寧にお辞儀して帰っていった。髪は伸びていて結んであった。とても大人っぽい。みんな本当に成長してるんだなあと思った。あと出会ってないのは美鶴先輩と天田にコロマルくらいかな。会えるといいな。

——新たなコミュニティ。「隠者：山岸風花コミュニティ」

5月28日。土曜日。

今日の放課後は鳴上に花村の相棒コンビと一緒に帰った。鳴上の家の家庭菜園を見に行くためだ。花村？ 奴はついで。とても綺麗な「プチソウルマト」が実っていた。鳴上は少し分けてくれた。



5月29日。日曜日。

登校中に聞いた話だが、二年後の今も「時価ネットたなか」が放送されているらしい。しかも日、月、火の三日放送だ。

せっかくなので見てみることにした。

一つ目は「アディオスシューズ、ダイエットフード真×2 セット 5980円」

二つ目は「緊急医療キット、傷薬×4 セット 2980円」

つつい安い方を買いがちなのだが、元の世界で彼の指導を受けてきた僕は違う。ちゃんとよく考える。

「アディオスシューズセットを買おう！」

僕は電話して注文した。傷薬なんて僕のペルソナに「ディアラマ」をもってるのがいるから必要ない。有意義な買い物が出来た。ちなみに今日はのんびりした。

☒☒☒

5月30日。月曜日。

今日の放課後は舞子と遊んだ。周りの子ども達の視線が何か痛かった。舞子の悩みも聞いてあげた僕は大人だと思う。(刑死者コミユ2)

☒☒☒

5月31日。火曜日。

鳴上とバスケット部にいった。今日は一段と人が少なかったなので練習相手に花村を巻き込んだ。完二がいればもっとよかったと思ったので復活したら巻き込もうと思った。

(剛毅コミュ2)

6月1日(水)～6月6日(月)

6月1日。水曜日。

月が変わり6月。河川敷に行ってみると暇そうに水切りをしているエリザベスがい
たから、商店街を案内した。ピフテキ串にそうとうご満悦のようだった。(女帝コミ
2)

☒☒☒

6月2日。木曜日。

せつかく入部したので吹奏楽部に行くことにした。楽器は意外と難しくてすぐにコ
ツを掴んだ鳴上が少し羨ましかった。僕二年前は写真部だったから。(太陽コミュ2)

☒☒☒

6月3日。金曜日。

ジュネスでバイトをした。今日は一日中雨だ。明日も雨が降る予報が出ていた。

「なあ有里。明後日霧が出るって」

花村が少し心配そうに僕に言った。完二は助けたからもう安心、なのだがそれでもド
キドキする。

「大丈夫。助けたから」

「そうだな。……おい有里、俺の目は誤魔化せねえよ。サボってるだろ」

「さつきまで心配してた人に言われたくない」

「それとこれとは別だっ」



6月4日。土曜日。

今日は真つ直ぐ家に帰った。雨で何も出来ないことと、今日は必ずマヨナカテレビを見ると捜査隊のみんなで決めたからだ。



そして夜。あと十秒ほどで深夜12時になる。

「……」

時間の流れがゆっくりに感じた。日付が5日になる。マヨナカテレビが流れるがノイズ音が響くだけで何も映らなかった。今回も救出をちゃんと成功させたのだ。



6月5日。日曜日。

「時価ネットたなか」の日だ。

一つ目は「仁義のふんどし、ダイエットフード真×2 11800円」

二つ目は「稲羽マス、コハクヤマメ×2 2980円」

「どっち買おう……?」

どちらも正直いらぬ物だ。ならばいつそ今回は買うのをやめるのも一つの手だ。

「……やめとこ」

今週は買うのをやめ、ジユネスへと向かった。別にバイトをするためではない。今日
はゆつくりと客として行くつもりだ。

サボり中の足立さんを見かけたので今日は足立さんとお話しして帰った。……何故
だか違和感があつて嫌な感じになつたけど、半分は僕のせいだから気にしないでおこ
う。(道化師コミユ2)

☒☒☒

6月6日。月曜日。

「自分でもよくわかんねんすけど、オレ……気づいたらまた会いたいとか口走つてて
……」

「男相手に」

放課後。復活した完二を連れて学校の屋上にいた。完二から話を訊くためだ。

それと里中。「男相手に」とか言つてたけど、僕は知っている。て言うか本人に確認し
たし。

ー白鐘直斗は“女”である。

……女だと知ってる僕はどう反応すればいいのだろう？

「あの彼とはどういう関係？」

天城が訊くと変に動揺した完二は「特に何も無い」的な事を言った。だけどそんな完二の顔は少し赤くなっていたけど言わない、面倒だから。

「女ってキンキンうるせーし、その……すげー……苦手で男といたほうが楽なんすよ。」

だ、だから……もしかしたら自分が女に興味持てねえタチなんじゃって……。けどゼツテー認めたくないし、そんなんでグダグダしてたっつーか……」

「まー たしかに男同士の方が楽ってのはわかるけどな」

完二の発言に花村が同意する。確かに同意することもある。だれだって同性の方が楽な所があるものだ。

「……でも、もう大丈夫っすよ。要は勝手な思い込みだったってことっすよ。壁作ってたのはオレだったんだ。オレ、男だ女だじゃなくて、人に対してビビったんスカね。」

……あ、んだオレ？ 何一人でペラペラしゃべってた。あー、今のなしで！ なんかオレだいがカッコ悪いっすね!!」

完二が一人で喋って一人で顔を赤くしてる。僕は完二の肩に手を置き僕の方に視線

がいくのを確認すると、どや顔気味で言った。

「……どんだん喋っちゃって」

「絶対嫌っスよ！」

「何でどや顔なんだよ！」

「あ、わかった？ 流石、花村」

ひとしきり笑うと里中が「いい子じゃん！」と完二を誉めた。

「い、いいいい。いい子は止めろよ!!」

屋上に完二の悲鳴とも呼ぶ大声が響いたとか。

◇◇◇

僕たちはジュネスのフードコートへと向かった。通称「特別捜査本部」——命名したのは花村だ。到着すると八校生二人組男子が何やら話していた。

「……つーかさ、〃例のテレビ〃最近けっこーおもしろくね？ 〃次に出んの誰？〃とか気になるな」

「オレ前から次はぜってーアイツって思ってたんだよ。名前はなんだっけ、一年の暴走族上がりの……」

「そいつあたぶん。〃巽完二〃って名前だな……。ちなみにゾク上がりじゃなくて、ゾクを潰したほうだけだな」

完二が怖い顔して行くから二人は逃げて行つた。その後完二が「んだよ……つまんねーな」とか言つてたけど完全完二のせいだと思ふ。

「なんだかやり切れないうね……。殺人事件の絡みとかよく知らないで言つてんのかもだけど、同じ学校の子なのに……。」

「関係ねーとか自分は大丈夫だとか、観客気分なんだろう……。」

里中がそう言うのは無理もないと思ふ。みんなは僕たちが人の命を救つてゐることを「知らない」のだ。影時間の戦いと……同じ。

「なあ完二。ほんとに思い出せないか？俺らのことシメんぞーつつつて追つ払つたあとだよ」

花村がビフテキガツガツ食べてる完二に訊く。

「ん。あー……うち戻つて……部屋でフテ寝決め込んで……。あれ、そーいや誰か来たよ。うな……。」

「誰か来た？　どんなヤツだ!？」

「あ、いや普通に宅配ツスよ。業者から荷物受け取つて」

「前進したと思つたら全くダメだった。すると完二が一枚の紙を取り出した。とある刑事からとつたららしい。特徴から言うにたぶん……足立さんだろう。」

鳴上が紙を読む。

「『演歌ヒットチャート。第一位、終みせず新曲』」

「そういえば事件あつてから前より売れてるって聞くね。知つててうまく利用してんならちよつとやな感じだけど」

「この人はアリバイあつたよね。関係なさそうだから次に行こう」

鳴上が続きを読む。

「3月のローカル局別人気女子アナランキング！」 山野真由美は中の下くらい」

「こりや単に興味のリストじゃねーの？ オッサン趣味つて感じだよな」

花村が「やっぱ『りせち』だろ！」とか言つてたけど僕は女子達と同じように冷たい視線を向けておく。そもそも僕はテレビで数回しか見たことないし、僕の『二年間』は空白だし。

鳴上はそんな花村を華麗にスルーして最後を読む。

「『山野真由美、4月11日。小西早紀、4月12日』」

「なんの日付だ？ 山野アナの遺体が発見された日……は始業式だったから12日か。11日はその前の日だけど……」

……あ。そうか、わかった。

「『テレビ報道番組表』だ。11日は山野アナと生田目との不倫報道。12日は小西先輩が『第一発見者』のインタビュー」

みんなもハツと気づいたようだ。花村が天城と完二に流れた日付を訊く。

天城は鳴上と土手で会った日のすぐ後らしい。完二も僕たちと会う少し前。

色々と繋がった気がした。つまり、犯人の狙ってるのは、テレビで取り上げられた人
“ つてこと。

花村が頭を抱えて唸る。

「テレビ繋がりの線、全然あるな……。つまり被害者は単に事件関係者じゃなくてその
中でも、メディアで有名になった人」か。

でも……。そうになると動機はなんなんだ？ テレビに出たら殺すってどういうんだ？

あー くつそ。よく考えたら全然解決できてねーよ！ なんて俺もつと頭よくねー
んだ……！」

「なんで落ち込むことあんすか？ オレ先輩らスゲーって思ってるんすけど。だって先
輩ら結局オレのこと気づいて体張って救ったじゃねえすか。十分だぜそれで」

完二……いいこと言ったな。

「私だつて助けてもらつた。解決はまだでももう二人も救つてる」

「今回は惜しかったよね。ま、こんだけわかつてりや次こそは先回りできそうだし。タ
イホも時間の問題かもね」

里中と天城も花村をフォローする。仕方ない。僕もフォローしてあげるか。鳴上も

そんなこと思っていたのだろう。最後に僕ら二人が花村に声をかけた。

「まあ、次はいけるでしょ。焦ってたらお仕舞いだよ」

「それに、今度こそ犯行終わりって可能性もあるかも知れないし」

花村は少し笑顔が戻った。どうやらもう問題ないようだ。

「だといいけどな！二度も邪魔してやったんだ。いい加減懲りてほしいぜ」

「ーランクアップ。「愚者：自称特別捜査隊コミュ4」

6月7日（火） ～ 6月12日（日）

6月7日。火曜日。

今日は長瀬の練習の手伝いをした。とりあえず思ったのは「長瀬はスポーツ馬鹿なのか？」ということだった。女性関係を持つとうとせずサッカーのことばかり。何か誰かさんを想像してしまった。（節制コミユ2）

☒☒☒

6月8日。水曜日。

「なあ有里、鳴上。免許、とらね？」

放課後。花村が急にそんなこと言ってきた。鳴上の机に原付免許の教材を置く。

「後ろにさ、その、な。ムギューつとなるんだよ」

ムギュー？ 何が？ 鳴上もよくわかってないようで首を傾げていた。ムギュー

……ムギュー……。ああ。

「牛？」

「ギューじゃねーよ」

花村が色々と熱弁していたけど結局何がムギューつとなるのかを言ってくれない。

「ほら、ムギューつとなるんだよ」

「分かるだろ？」とでも言いたげな目をしているが残念ながら僕には一切分からない。「牛が？」

「だからギューじゃねーよ」

同じツッコミをしてくれた。花村はツッコミの才能が高いといつも思うよ。

「ウーッス」

完二がやってきた。僕たちの話に混じってきた。

「先輩たち免許とるんスか？ カチコミならオレに任せてくださいッス！」

「いやカチコミじゃねーから！」

ちなみに完二は「自転車で十分っしょ」とか言ってた。凄いな。あと完二は年齢的にダメらしい。そっかー、じゃあ月光館の時免許とれたんだ。まあ都会だったから交通面で困ることなかったし、仕方ないか。

あと、何が「ムギュー」なのかと言うと女子のアレがムギューとなるとか。でも原付二ケツ禁止だと完二につっこまれた。どんまい花村。とか言ったら「ナンパする計画は終わらない！」とか。普通にドン引きするわ。

でも免許とるのは悪くないかも。

「二冊鳴上と有里用に買ったんだ。感謝しろよ？」

「悪いな、花村」

「うん、どうも」

「有里感謝してる!?!」

モチロンシテルヨ。最近花村の扱いが雑になった気がするけど気にしないでおく。

鳴上は堂島さんという保護者の存在がいるため一応訊くことになった。僕？ 一人

暮らしだから。

「お前一人暮らしだったんだな」

「だから親の許可とか必要ない。僕は免許いつでもとれるよ」

「じゃあ相棒。訊いたら連絡くれよ」

「ああ」

その後、足立さんの援護ーあんまり意味なかったらしいーがあり鳴上も問題ナシ。早速明日とりに行くことになった。



6月9日。木曜日。

放課後、僕たちは免許をとりにはバスで試験会場へ向かった。試験はとても簡単な問題が出たり、事前の勉強が役に立ったのか楽々合格出来た。

「簡単だったな」

「ああ」

「あんまり勉強しなくてもよかった」

ガソリンスタンドを通ると刑事さんがいた。近くに足立さんの姿が見えたから上司だろうか。よく見ると鳴上を初めて見た日に一緒にいた人だった。もしかしてあの人が「堂島さん」？

堂島さんは鳴上が昨日の今日に免許をとって来たことに驚いていたがその驚きは一瞬だった。

「おい足立！」

「はいはい。ちようど終わりましたよ」

足立さんが一台の原付バイクを持ってきた。白いバイクだ。

「これお前にやる。俺のお古だ。大事に使えよ」

堂島さん、一見厳しそうな人だけどいい人なんだね。

「花村、明日学校で一緒にカタログ見よ」

「いいぜ。じゃ、またな鳴上」

僕は堂島さんと足立さんにお辞儀して別れた。

◇◇◇

さて、これからどうしようか。このまま帰ってもいいけど正直まだ暇だ。学校に戻っ

て誰か知り合いを探すのもひとつの手だ。

すると携帯の着信が鳴った。見てみると完二からだった。

「もしもし」

『急にスンマセン先輩。一緒に愛屋の肉丼でもどつスカ？』

「ちよつと待つてて」

僕は財布を取りだして中身を見る。ふむ、肉丼一杯分なら問題ないだろう。

「いいよ。行こうか」

『あざっす！』

◇◇◇

待ち合わせをして店内に入る。店長の娘の「中村あいか」が案内してくれた。ちなみに彼女が同じクラスだと知ったのは今日だ。とても驚いて思わず彼女に謝ってしまった。

「肉丼二つ。お待ちどうぞ」

僕らの前にホカホカの肉丼が置かれる。ここの肉丼は飽きないからとても好きだ。

「はがくれ」のラーメンと同じくらい好きだな。通いたくなる味だ。……現実はそう甘くはないけど。

「完二」

「…………? なんスカ」

僕はふと思ったことを完二に訊いてみた。本当に、たまたま思っただけなのだが。

「どうして急に誘ったの?」

完二の顔が少し怖くなる。僕は箸を置いて完二の次の言葉を待つ。肉丼? もう食べたよ。

「…………人付き合いがよくわかんなくてよ。こんなだから変に思われたりしたらどうしようって常に不安があつて。でも、先輩達はそんなオレのことをただただ善意で助けてくれたことに、オレ、カッケーって思ったんす。

オレに何が出来るんだろう。そう考えて、何も分からなくて。この前鳴上先輩に訊いてみたんすよ」

鳴上が…………ね。流石リーダーだよ。僕は、相談とかされても「いい答え」を返せそうにないから。前の世界での二年間、僕はすっかりリーダーが出来ていたか…………不安になるくらいに。鳴上のリーダーとしての器は大きいと改めて知った。

「何て言ったの、鳴上は」

「まず仲よくなることじゃないかな」って言ってたんす。だから、有里先輩とこうして愛屋の肉丼食って仲よくなるかと…………」

なるほど。そういうことだったのか。とりあえず納得出来た。

「完二。愛屋だけじゃなくて、他の場所行ったり喋ったりしよう。それが、仲よくなることに繋がる……はず」

「ウスー！」

異完二。……彼は本当に純粋で、いい子だと思った。ただひとつ。

ーシヤドウが「あんな」じゃなければよかったなあ。

そう思つて残念がったのは秘密だ。

ー新たなコミュニティ。「皇帝：異完二コミュニティ」



6月10日。金曜日。

今日は雨が降るけどすぐに止むらしい。最近天候に敏感になってきた。

「やっぱ色はオレンジかな」

「僕は……青？」

「群青とかは？ ほら、ちよつと濁つた感じ」

「うん、いいと思う」

昨日の約束通り、僕と花村は朝、教室にて一緒にカタログを見ていた。今は色を決めているところだ。

「そーいや来週林間学校らしいぜ。俺ら班一緒だよ。里中はどうか知らねえけど天城

は旅館の娘だろ? いやあ、期待しちゃうなあ」

「そ、そう……だね」

花村。君は何も知らないから幸せだね。あのムドオン弁当を食べた僕は……正直休みたい気分だ。

この世界に来てから料理は簡単なものしかしてない。二年前は結構みんなのー主に順平ー夜ごはんとか作ってたりしたからやっていただけ。

久しぶりにやろうかな。

◇◇

という訳で今日は荒垣先輩の家にアポナシでお邪魔した。流石荒垣先輩。世界は違えど料理上手さは変わらなかった。(月コミユ2)

◇◇

6月11日。土曜日。

今日は完二と一緒に帰った。「一緒に編みぐるみ作ろう」と誘われた。なので完二の家で編みぐるみ作り体験をした。かなり難しい。完二の女子力の高さに驚き半分軽く引いたのが半分だった。(皇帝コミユ2)

◇◇

6月12日。日曜日。

今週もやってきた時価ネットたなか。前の世界の癖でどうしても日曜に見てしまう。まあ、いつか。

一つ目は「火伏せの符、野草サブリ×2 4980円」

二つ目は「反魂香、呪殺ペーパー×4 2980円」

今回はすんなり決められそう。反魂香は意外と最後の方でも重宝するアイテムだ。これと同じ効果の魔法マジックが使えるペルソナはいるにはいるのだけど……アレ、精神力S_Pがごっそり減るんだよ。

だからあまり使いたくない。だからこのアイテムは重宝するのだ。

僕は迷わず反魂香セットを注文した。

◇◇◇

土手のベンチに行くと鳴上がいた。そう言えば鳴上はシャドウ完二戦が初めてのペルソナ合体なのに本人は全然疲れがなさそう。訊いたら「特にない」と。

……やっぱりシャドウ完二の影響かな？ そうじゃなかったら僕どれだけ体弱いんだって話だよね。(永劫コミュ3)

6月13日(月) ～ 6月16日(木)

6月13日。月曜日。

今日から衣替え。やっぱ夏服の方が動きやすいな。

そう言えば今日の放課後にバイクがくる。何か「ナンパ作戦」とか花村がマジで計画してるらしく、冲奈市に行くのだからか。一応冲奈くらいには行けるようにしておかないと。放課後、今日はバイクの試運転に使おう。

◇◇◇

一通り乗ってみた。意外とすんなり出来た。慣れるととても楽しい。これならすぐに乗りにこなせそう。ナンパ作戦……どうやって逃げるか考えておかないと。

◇◇◇

6月14日。火曜日。

放課後。高台に行くと風花がいた。ここからの景色について話していたらいつの間にかペルソナの話になった。展開が謎過ぎたけど考えたら余計に分からなくなったので諦めた。(隠者コミュ2)

◇◇◇

6月15日。水曜日。

「今日行くぞ！　〃ナンパ作戦in沖奈〃!!」

「ほ……」

「ほ？」

「ほ……」

「??」

「ホントにやるとは思わなかったよっ!!」

思わず「静かキヤラ」を崩してしまった僕。それも無理はないと思いたい。

時は朝のHR前。鳴上と話していると花村が登校してきた。僕と鳴上は普通に挨拶した。だけど花村は挨拶の代わりに言ったのだ。

「今日行くぞ！」

◇◇◇

沖奈市。

「自転車でも追い付くなんて。流石完二」

「あざっす！　有里先輩もいい走りっぷりで！」

「走りっぷりとかどうでもいい。ナンパ作戦を今から決行するぞ！」

僕、花村、鳴上。そして何故か自転車についてきた完二。花村はさっそく行おうと言っ

ていたが非常に僕は帰るか沖奈市を探索したい。

「3分だな」

「カツプラーメンが出来るっす」

「鳴上、君は拒否する側だと思っただよ」

そう信じていた僕がバカみたいではないか。

そしてマジでナンパ作戦が始まった。ルールは簡単。女の子から連絡先を教えてください。

「あの……湊くん？」

「僕が本気でナンパとかすると思っただよ大間違い。だと思わない……ですか？」

「えっ、お……思うよー！」

喫茶店「シャガール」。目の前に座っているのは風花だ。逃げようと思っただよこの喫茶店に入ったら偶然いたので連れだど嘘を言っただよ無理矢理座った。

「懐かしいなあ。私が高校二年生の頃ね、屋久島行っただよ」

……うん。よく、知っただよ。

「順平くん、ゆかりちゃん、美鶴先輩、真田先輩……そして琴音ちゃん。特別課外活動部っただよ言っただよ湊くんたちの集まりと一緒。シャドウと戦う為に集まった集団でね。みんなで行っただよ。あそこ、美鶴先輩の別荘があるの」

……それも、よく知ってる。

「順平くんと真田先輩がナンパをしていたらしくね。男子つて必ずナンパをするのが定番なのかな？」

「それはないんじゃない？ 興味ない人だっているよ」

「そうだね。現に湊くん、とつてもつまらなさそう」

風花は笑った。

これは完全に言えないよね。僕が「つまらなさそう」なのは「興味ない」ではなく前の世界で「すでにやったことがある」からだということ……。

「そう言えば知ってるかな？ この沖奈市に小さい『古本屋』があるの。その人ね、琴音ちゃん……あ、湊くんと同じ「ワイルド」の能力をもつんだけど、知り合いだったんだ。知らなかったなあ」

古本屋……。もしかして。

「ありがとう風花。僕もう出る。これ、僕の分のお金。なんか急に押し掛けた感じですねみません」

「いいの。湊くんと話すと昔のことを思い出せて懐かしい感じがするから」

風花の目は少し悲しそうだった。

ニユクスを封じる代償。……僕の世界でもみんなは悲しんでくれているだろうか。

僕は風花にお辞儀をし、外に出た。駅前で絶賛ナンパ作戦中の三人は置いておき、僕は風花が言っていた古本屋を探す。この世界での僕の担当である汐見琴音が知り合いだと言うのなら僕も別世界で知り合いだった可能性が高い。

◇◇◇

「いらっしやうい」

「……どうも」

僕の予想は当たった。

「北村 文吉」——文吉じいさんと「北村 光子」——光子ばあさんだ。

「前は辰巳ポートアイランドの方にあつたと聞きましたが……」

「よく知ってたねえ」

「あそこの学園にはね、柿の木があつて離れたくはなかつただけどね……」

じいさんもばあさんも少し悲しそうだった。二人はあの柿の木を大事にしていた。だからそれを放つといてこちらに来るなんて不思議なのだ。

「いろいろとワケあつてねえ。しばらくはここで店を開くんだよ」
なるほど。

「お前さん、名前は？」

「有里湊」

「ふむ。湊ちゃんか。湊ちゃん、また来ておくれ。サービスするぞい」

文吉じいさんはそう言って笑った。湊ちゃんなんて呼ばれるの久しぶりな気がする。何か恥ずかしい。

今日は挨拶程度に一冊本を買った。暇潰しによく読むからこういう店はありがたい。

「新しいコミニティ。「法王：古本屋コミニ」」

ちなみに、ナンパ作戦のことはこの頃から本気で忘れていた。三人に結果を訊いてみると見事に失敗。花村に至ってはバイクが壊れる事態になった。

「ナンパしようとした罰じゃない？」

そう軽口を言ってみただけどいつも花村からのツツコミがなかったので本気で心配することになってしまった。

花村だけ電車で帰ることになった……。



6月16日。木曜日。

昼休みの屋上。完二抜ききの四人でカップ麺を食べていた。

「ついに明日かあー」

かなり花村が浮かれていた。明日……林間学校だ。でも楽しいさ満開って訳でもなく、ただゴミ拾いをひたすらするだけらしい。夜は飯ごう炊さんとか、テントで寝たり

とか。そこは楽しいのだとか。

◇◇◇

放課後。ジュネスに飯ごう炊きさんの材料を買いにやって来た。

「そういえば去年は河原で遊んで帰ったよね」

ふと天城が言った。その発言を聞き逃すことはなかった花村。泳げるのかどうか訊いた。

「あー、泳げんじゃん？ 入ってるヤツいるよ毎年」

「そっか。泳げんだ……」

そう呟くと花村は駆け足でどこかに向かった。買い物は僕たちに任せて。

「鳴上。僕たちは端で待ってない？」

「ああ」

女子に任せて端っ子に行く僕と鳴上。僕らはあの「ムドオン弁当」を食した勇者とも言えるだろう。

「里中は平気だと思おう」

「俺も。……だといいな」

「僕もそう思うよ……」

女子の会話の中に「キムチ」とか「チョコ」とか「コーヒー」とか「ヨーグルト」……「コー

ヒー牛乳」。「なまこ」。

何故か里中も納得顔。これ……まさか里中「も」、なのではないか……？

隣の鳴上の表情を見てみると僕と同じことを思ったけど勇気がないせいで固まっていた。最初は「ムド」程度だと思っていたけど……これじゃあ「ムドオン」に強さが上がってしまう。覚悟、決めておこうかな。

6月17日(金) ～ 6月18日(土)

6月17日。金曜日。

昼間は基本ゴミ拾い。天城、里中は別エリア。一年の完二も別エリア。僕と花村、鳴上。そして運動部コンビの一条と長瀬でゴミ拾いをした。途中一年の女子たちに鳴上がヘルプで行ってしまったので四人になった。花村が始めた恋バナ的な会話で「花村の好きな人」という若干タブーともなる話になった時はヒヤヒヤしたけどもう、大丈夫だった。

……ちなみに、女子の手料理という最も危うい話題が出た時はさらにヒヤヒヤしたが三人にその表情がバレる事はなかった。(番外編)

◇◇◇

夕方。飯ごう炊さんの時間。料理は天城と里中に任せ僕たちは座って待つことにした。本当は、任せたくはないのだが。

「有里」

隣に座っている鳴上が声をかけてきた。花村に聞かれないように少し離れて話す。もちろん、女性人にも聞かれぬように。

「どうしたの？」

「有里なら止める勇気があったんじゃないのか？」

「あつたよ」

「じゃあ……」

鳴上がさらに何か言おうとしたけど僕は止める。

「花村リアクションの反応。見たくない？」

「は？」

鳴上は僕が何を言っているのか分かっていないようだ。仕方ない。もう一度詳しく言おう。

「あのツツコミ名人（仮）の花村リアクションの反応。さぞかし凄いだらう。見たいと、思わない？」

「いや、まあ……。少しは気になるけど……」

鳴上はもう諦めたようだ。スタスタとベンチに戻る。花村が何を話していたのかと訊いてきたが、何も言わないでおいた。僕もリーダー様も、「心の準備」で忙しいのだ。

「お、来た来た！」

女性人が「カレー」を持ってきた。カレー……？

「あ、天城さん。これ……」

「カレー」

「いやだつてこれムド……」

「カレー」

「ムドオン……」

「カレー」

どうしても天城さんはこれを「カレー」だと言いたいようだ。しかし、これは……。

——明らかに「ムドオンカレー」だ!!

一瞬鳴上もそう思っていると感じた。同じワイルド同士だから何となく分かるのだろうか。

「あーと、お待たせ。その……。『愛情』は、入ってるからさ……」

里中さん。この「物体X」ムドオンカレーには「愛情」ではなく、「殺意」しか感じられません。

「うお、入っちゃってる?」

入っちゃってるよ。『殺意』のスパイスが。

「それベタな台詞だけどグツとくるな!」

グツとくる。そうですか。この後、「ウツ!」となるから。

「じゃ、いったきまーす!」

花村よ。骨は拾ってやる……!」

「……!!!」

……「ウツ！」ではなく「ブツ！」とカレーを吹き出す音が出たようだ。

「花村よ。死す」

「……花村」

◇◇◇

「あんじゃコリヤーアア！」

花村、生きてたんだ。……別に真面目に死んだとか思っていないよ。思うわけないじゃないか。……あはは。

「おつめーら、どんなっ……ゲホー！」

カレーは「辛い」とか「甘い」とかだろ！ コレクせーんだよ！ それにジャリジャリしてんだよ！ 「ジャリジャリ」してるうえに「ドロドロ」してて、「ブヨブヨ」んともあつて……。

も、いろんな気持ちワリーのだらけで飲み込めねーんだよ！

里中が反論するが花村は「まっじーんだよ！」と、かなりお怒りのご様子。流石の花村でもダメなようだ。

「……鳴上くん、有里くん」

あー、きた。女性人のこの期待のこもった目線。

「真顔で言っとくぜ？ 止めとけよ？」

かなり真顔だ。

「僕らは、天城の弁当がアレなことは知ってたんだよなあ」

「そうなの!？」

鳴上が頷く。花村の目が「知ってるなら教えてくれよ」と言いたげだったがそこは無視した。

そう、僕はこれを^{カレ}食べる覚悟で^{花村}君に食べてもらおうとしたのだよ。

……そう言ったらチョップされた。痛い。

「……鳴上、食べようか」

「そうだな」

一口。そーつと、そーつと……口に入れた。

「……」

「……」

そして僕らは同時に……倒れた。

「鳴上くーん! 有里くーん!」

そんな心配する女子二人の声が聞こえた……けど。倒れたのは君たちのせいだと僕は声を大にして言いたい。

◇◇◇

「……すみませんでした」

「ごめんなさい……」

天城と里中が謝る。彼女たちも悪気はないので僕らもー僕と鳴上は覚悟していたので事実花村ひとリー怒れない。

「はあ……どーすんだ？ 俺らの班メシ抜きじゃん。せめて食えんならいーけど、こんな『物体X』ムリだろ絶対……」

これを女子二人が食べれたのならー絶対無理だけどー抜きなのは男性人となるのだが、それは早々却下となった為、班全員抜きになる状況なのだ。

「……!! いいにおい」

里中が呟く。確かにいいにおいが漂う。

「大谷さん!？」

大谷さんが山盛りのカレーを持って席に座るところだった。ちなみに、ナンバ対決沖奈市での一件にて花村のバイクを壊したのは大谷さんらしい。故意ではないそうだ。

まあ、あの体型を見れば……壊した方法を推理するのは容易だろう。

花村が大谷さんにカレーをわけてもらおうよう頼む。

「無理ね。ダイエツト中だからこれっぽっちしか作ってないし」

ダイエツト中……？ バケツくらいあるのに……不思議だ。

結局、あの後モロキンに追い出されテントへと向かった。僕たちの班は最終的にご飯抜き。これはキツイ。

◇◇◇

「あークソ。腹へった……」

テント内。花村が呟く。そして目の前にいる「後輩」に声をかけた。

「つか、なんでおまえここにいんの？」

「バツクレたら進級させねえって釘刺されたんすよ。それに一年のテント、葬式みてーに静かだし」

「完二がいたらそうなるよね」

何故か完二がいるのだ。別にいいのだけれど。

本来テント内には鳴上、花村、僕、そしてもうひとりくらいいたはずなのだが、他のテントの人と一緒に病欠（仮病）で休み。賢いな。

「しゃーねーなあ……じゃあおまえ、寝る場所あそこな」

花村が指差した場所は岩があつて中々寝れなそうなどこだ。絶対朝起きると背中が痛くなりそう。

「有里先輩はどこで寝るんすか？」

「僕？　ハハハ」

入り口近くを指差した。簡単に言えば鳴上たちが縦向きで寝るのに対して僕は横向き。アイツらが寝相悪ければ足蹴りの被害者コースだ。

「ジャンケンで負けた」

「オレのとこと代わります?」

「だが断る。岩で寝るよりマシだから」

僕はバックの中からタッパーを取り出す。

「有里何それ?」

「簡単なもの。作ってきた。この状況をご飯抜き予想出来たから」

「食べ物」と聞いた途端みんな食いついてきた。

「有里さんお願い! それ恵んで!」

「オレは食べてきたんで別にいいっす。でも有里先輩の手料理は興味あるっすね」

「有里、頼む」

ひとり言葉の意味によっては恐怖を感じるが、気にせず多目に持つてきた割り箸を人数分渡した。

作ったのは本当に簡単な物で、量もそんなにない。まさか完二まで乱入するとは思わなかったからだ。何を作ったのか?

「おおっ! お弁当の定番、玉子焼きだ!」

「花村うるさい。静かに食べて」

「す、すまん」

「そう言えばさつき花村何かボリボリ食べていた気がするけど……。あ、おつとつとだ。横に置いてある。玉子焼き食べたらまた食べる気だ。」

「旨い！ おまえハイスペック過ぎねえ？」

「俺より上手かも」

「流石先輩っス！」

「編みぐるみ作りが得意な女子力ある完二と僕よりリーダー性がある鳴上、色々気を使ってくれる花村の三人に誉められるのは少し恥ずかしい。」

「何とか今夜をしのぐ程度に食べられたので寝ることにした。」

「完二……。おまえ、もつとあっちだろ」

「……」

「……」

「あそこじゃエビゾリなるんスよ」

「何か重苦しい雰囲気。いや、そんな雰囲気を出しているのは僕らか。」

「……そうか。あの……。さあ」

「なんスか」

「……なんでこのテント来たんだ？」

「あ？ さつき言つたじゃねえスカ。 なんだよ……なんなんスカ？」

勇気を振り絞り話しを続ける花村。 こういう時尊敬するな。 こういう時……だけ。

「お。 おまえつてやつぱ……アツチ系なの？」

「アツチ……？」

完二はキョトンとした表情。 花村が言いたいことをよく分かつていないみたいだ。

「……貞操の危機」

僕がボソツと言つた。

「なななな、何言つてんじゃコラア！」

「何故そこでキョドる!？」

「なおさらホンモノっぽいじゃんかよ！」

僕と花村は思わず起き上がる。 本来ツツコミは花村の役目なのに僕がしてしまった

じゃないか。

「今はもう女ぐらい平気つスよ！」

「し……静かに、な」

鳴上は冷静に注意するが花村たち——僕も——は止まらなかつた。

「証明、出来る？」

「しよ、証明だ……?」

「そ、そうだぜ! じやなきや俺ら一晚ビクビクしながら過ごすことになんだろ」

「ケツ……も、いつスよ。んならオレ、女子のテント行つてくるっスよ!」

え? それはマズイのではないだろうか。見つかったら停学だ、つてモロキン言つてたし。

流石に「女子のテントに行く」ことについては止めた。だけど完二は止まらなかった。
「コイツ、本気で行きそうだぜ。な、おまえからも止めてくれよ」

花村は鳴上にそう頼んだ。鳴上は少し考えているようだった。

「……行つてこい」

「は?」

「はあ!」

「妙な疑いかけられて黙つてられつか。先輩にも見せてやるっスよ! モロキンがなんぼのモンじゃ! 巽完二なめんなコラアア!! うおおおおおおおー!!!」

……行つてしまった。もう、知らない。

◇◇◇

「……何で来たの?」

中々寝れないのでトランプで遊んでいると何故か里中と天城が来たのだ。これこそ

モロキンに見つかったらヤバイのでは？

話を聞くと急に完二が来て気絶してしまい、寝ようにも寝れない……と。しかも大谷さんと同じテントで、イビキがスゴくて寝るのも無理がある。

イビキに關しては大谷さんのせいだとはつきり言えるのかもしれないが……。完二が気絶した原因……まさか里中のキツクじやないよね？

そう言ったら里中は目線をそらした。え。いやこつち見てよ里中さん。完二にキツクしてないよね？

二人がテントに入ってしばらくするとモロキンがこつちに近づいてきた。僕らは布団の中に隠れる。鳴上と天城、花村と里中がそれぞれ同じ布団に入って密着状態だったがこの時はそう言っていられないだろう。

……絶対順平とか羨ましいとか言ってくるだろうな。

モロキンはしばらくこの辺うろつくだろうし、戻れない状況になった。結局、二人もこのテントで寝た。かなり、狭かったなあ。



6月18日。土曜日。

朝早くに二人は目覚めてテントを出た。

「完二……無事かな」

「アイツなら大丈夫だろ」

「完二なら、な」

「完二なら大丈夫」。しばらく僕たちはそれだけを言葉にっていて、色々と察したかのごとくテントから出たのであった。

6月18日（土）　　6月19日（日）

「俺らしか来てないみてーだなー！」

現地解散した後、僕たちは河原へと向かった。花村が一段とウキウキしている。

完二は朝の内に僕らのテントに回収した。夜中走り出した後のことを覚えてないらしい。里中が「夢だよ！」と強く言っていたので完二はこれ以上は気にしないことにしたようだ。

「よし。とりあえず泳ぐか！」

花村が笑顔でそう言うが完二はダルいらしくパス。女子二人もあまりやる気ではないようだ。

僕？　僕も断つただけだよ……。

「女子二人、君たちには『貸し』があつたよな。そして有里、おまえ女子の料理の腕前、あんなだつてこと隠してたよな」

「それを言うなら鳴上だつて」

「相棒は泳ぐことに既に賛成だから」

う……。確かに隠していたのは僕で、鳴上にも黙っているように言っただけだよ。

「そう、水着持ってきてないし！ いや残念だなー」

「そ、そうだよね。残念」

里中と天城も必死に入らないことを訴えていた。よ、よし。これに便乗すれば……！

「……？ 有里、どうした？」

「いや……。逃げ道が失っていることにさつき気づいた」

逃げ道がない。僕は、水着を持ってきたしまったのだ。そうだ。林間学校前日、花村から水着を持つてくるように言われたんだ。それでしつかりと持つてきて……はあ。

「有里の性格の良さがここで出たな」

鳴上が慰めているのか分らないが、そう声をかけてくれた。

一方の花村は昨日のカレーがかなり根にもっていたらしく、脅しとも言える手腕で女子を説得していた。里中は逃げるために「ほんとに水着持つてくれば入れた」と言っていた。

「じゃーん！ なんとここにありましたー！ ジュネスオリジナルブランド初夏の新作だぜ！！」

花村が取り出した「水着」。確かに初夏っぽい柄をしていた。

「花村。それずっと持つてたの？」

「やだなあ。さつきバッグから取り出したに決まってるじゃないか」

おまえ……そこまでして女子の水着姿を拝みたいのかっ。

「水着持つてくれば入れたのになー」

「う……」

「晚メシ楽しみにしてたのになあー」

「うう……」

「昨日の晩、俺らが助けなかったらどうなっていたかなー」

「わーかったつっの！ しつこい男だな！ まったく！」

しつこい男、花村の勝ちとなった。

◇◇◇

僕たちも着替えて少し経つと女子たちが戻ってきた。

「そ、そんなジロジロ見ないでよ！」

「ちよ、ちよつと……。や、やだ」

「いっやー 想像以上にいいんじゃないやね？」

まあ。確かに……。活動部女子三人の水着姿の良さはまた違った良さがある。こ

れはこれでいいよね。

「昨日『物体X』を食わされた分はまーちよつとは報われた？ みたいなさー。ていう

か俺の見立てよくねー？ こう、グイグイ食い込んでみたいな」

は、花村……？ 少し調子に乗りすぎなのでは？

「まあ中身がちよつとだけガキっぽいけど、将来いい感じのオネーサンになるぜきつと！ な！ そう思うだろ？」

「あー……うん」

女子二人の何か怖い雰囲気気づいたのか鳴上の返答も曖昧だ。僕はノーコメントで。

「……すつげー不愉快……」

「……私も……」

「どわっ!？」

「!？」

……あ、鳴上と花村が二人に落とされた。僕は何も言わなかったし、若干完二の方に近づいていたから落とされなかった。よかった……。

「つめてえー!! お……おお落とすことねーだろ……!？」

「いーじゃんツ！ どーせ入るつもりだったんでしょ!? ……自業自得だつたのつた。最低だよね」

天城もプンスカと怒っていた。……少しかわいい気がするの目は錯覚？ 怒ってるよね？ まあ……いつか。

「完二くん？」

完二が座つたまま動かないので里中が心配して声をかけた。

「さつきからずつと黙りつぱだけど体調悪い？ も、もしかして昨日のダメージが……」
そこで僕がいたことを忘れていて今思い出したのか言おうとした言葉をストツプさせた。

やっぱり。里中さんがキツクしたんだね。……ね？

「……つて」

「な……なんスか？」

「完二……鼻血出てる」

僕が教えると完二は自分の鼻をさすり血のついた手を見て「……あ」と呟いた。

「ちよつと……やだっ!!」

「ぶっ！ ……あ」

「危なかつた……」

完二がビンタされて落ちた……。天城さん、ビンタ強くね？ よかつた、僕何も言わなくてよかつた！ 花村に「な？」とか訊かれたら答えてしまいそうだったけど、僕に訊かずに鳴上にだけ訊いたのがまさに奇跡。

「ぶはー！ あ、危ねえのはこっちだろ!? オレなんもしてねースよッ!」

「お、おまえらー！　なんてことすんだ!!　……って有里！　おまえだけ免れてズリーぞっ！」

やつと気づいた。……アレ？　何か上から音つて言うか声？　が聞こえる気がする。僕らはそつと見てみた。……モロキンが飲みすぎで吐いてた。なるほど、だから僕たちしかなかったんだね。入る前でよかった……。

下をチラツツを見ると男子三人固まっていた。若干涙目だったことも伝えておく。



6月19日。日曜日。

毎週日曜恒例の時価ネットたなか。

今回の一つ目は「力帯、野草サプリ×2　4980円」

二つ目は「オオミズウオ、角氷×4　9800円」

「……どちらもいらない」

僕はテレビを見てそう呟く。今回は買わないことにした。



今日は沖奈市に向かった。古本屋に行くと文吉じいさんと光子ばあさんがニコニコと迎えてくれた。色んなことについてお話をした。帰りにメロンパンくれた事はじいさんらしいなと思った。(法王コミュニティ)

特出し劇場丸久座

6月19日(日) ～ 6月21日(火)

夜。とある記者会見がテレビで流れていた。

『……以上、当プロ “久慈川りせ” 休業に關します本人よりのコメントでした。えー、時間が押しておりますので質問などございませう方は手短に……』

『失礼。えー「女性ビュウ」の石岡です。静養ということは何か体調に問題でも?』

『いえ、体を壊してゐるって訳じゃ……』

『とするとやっぱり心のほう?』

“やっぱり” ……? 彼女も少し動揺していた。それから記者の質問はだんだん熱をおびていく。

休業後は親族の家で静養。実家は稲羽市。……あの“連続殺人”の。老舗の豆腐店が実家らしい。そちらを手伝うのか。

ここで司会の人が「記者会見は終わり」と無理矢理終わらせた。

久慈川りせ。人気絶頂の中突然の休業。この後は実家の稲羽の豆腐店に。そしてこっちは連続殺人二件に誘拐二件で騒がれている八十稲羽。……きつと、この町にずつ

と住んでる人にとっては、ずいぶんと騒がしくなったんじゃないかな。



6月20日。月曜日。

「うーす」

「お、来た。最近マジメに来てんじゃん。どしたん？」

「出席日数って面倒なんがあるもんで」

「これからも続けるがよいぞ」

「有里先輩、何でチヨール上から目線なんスか」

昼休み。僕たちは屋上に集まって昼ごはんを食べながら「昨日のテレビ」について話していた。

「『久慈川りせ・電撃休業』ってやつでしょ？ まさに今ブレイク中ってところのになんで休業すんだろーね」

「アイドルつてのも大変だよなー うん……りせいよね！ まだデビューして短いけどこのままいきやじきトップアイドルだぜ。」

俺、結構好きなんだよ！ なんとって……キャワイイ!!」

「オッサンかよ」

「花村キモツ」

里中と僕が同時にツッコミ。最後の「キャワイイ!!」は流石にアウトだわ。ダメだわ。「たしか彼女ここ出身で小さい頃まで住んでたらしいし。ファンキッと多いんじゃない?」

里中がそう言うのと天城が何かを思い出したようだ。

「そう言えば、ニユースだと彼女 “お祖母さんの豆腐屋さん” へ行くんでしょ? それ……もしかしてマル久さんのことかな」

「マルキユー?」

「“マル久豆腐店”。ちよつと前までウチの旅館でも仕入れてたの」

「もしかして、商店街にあるあの豆腐店」

そう言うのと天城は頷いた。

「え、じゃああの豆腐屋行ったらりせに会えるのかな!」

「ちよつとちよつと。重要な点から逸れてつてない? 事件の話だつて! アンタ自分で“テレビつながり?” っつて言ったでしょーが! 狙われるかもよ、彼女」

うーん。里中の言うとおり、彼女が狙われる可能性もあるけど……。

「昨日今日テレビに出たわけでもない。最初、僕たちは被害者の関係性は“事件の関係者” っつて推理してたけど、それはどうなの?」

僕その質問に答えたのは鳴上だった。

「久慈川りせと山野アナは繋がり自体ほとんどない。同じ番組に1、2度出たことがあるだけ」

「つまり、これで久慈川りせが狙われたら犯人の狙いがさらに絞り込めるという事だね」
 僕の言った事の意味が分かった二年組は頷いた。けど完二だけは分かっていなかったようだ。今度は丁寧に花村が説明する。

「もし、りせが狙われたら犯人のターゲットは完全に『テレビで報道された人間』だ。最初の事件の関係者って線はほぼなくなる」

「はー、あーなるほど」

「やっど……? 完二も分かった……かもしれない。たぶん。」

「よし、じゃあ早速りせの動向に注意だなー。うしっ……!!」

花村がやけにはしゃいでいた。里中の「テンション上がってんな……」という呟きに僕と鳴上はウンウンと頷くしか出来なかった。

◇◇◇

放課後。僕、鳴上、天城、里中——花村は遅れて合流——と一緒に帰ろうとすると、校門に一人の男子がいた。そいつは天城に話しかけた。

「雪子だよね。こ……これからどっか遊びに行かない?」

「え……だ……誰?」

知らないんだ。名前で読んでたから知ってるかと思っただけ。すると周りからヒソヒソ声か聞こえた。

「何アイツ。どこのガツコ？」

「よりによつて天城狙いかよ。……つてか普通はひとりンときに誘うだろ」

「張り倒されるにオレリボンシトロン一本な」

「賭けにならねつて。『天城越え』の難易度知らねえのか？」

『天城越え』……か。つて何だろ？

里中に小声で訊いてみると、天城は遊びに誘う男子をことごとく断っていることから名付けられたらしい。……本人はそんな自覚ないようだ。

「アレじゃね？ 唯一出来るとすれば今女子たちに大人気の今年来た転校生二人」

「あー、あるかも。オレ成功にリボンシトロン一本な」

おい何言つとるんだそのヒソヒソ会話男子二人。賭けるな、リボンシトロンを賞品にするな。……飲みたいなら奢つてあげるから。

てか人気だったの？ てつきり鳴上だけかと思つていたけど。まあ、正直余り興味ない。

「あ……あの。い……行くの？ 行かないの？ どっち？」

「い……行かない」

「……ならいい!!」

ちやんと答えたのに逆ギレとか意味不明。

「オラ寄り道なんぞしないでさっさと帰れ帰れ!」

……? コイツモロキン見た途端、とつても嫌な顔をして「モロキン……」って呟いた。モロキンの事を知っているのか?

結局あの男子はそれ以上なにも言わず去っていった。

「あの人……なんの用だったんだろ……」

「なんの用って……デートのお誘いでしょ。どう見たって」

「え、そうなの……?」

どうやら天城はよく分かっていたいなかったらしい。けど、あの男子の誘い方もどうかと思っけど。

「よう天城。また悩める男子フツたのか? まったく罪作りだな。俺も去年バツサリ斬られたもんなあ……」

花村も合流。

「え……別にそんなことしてないよ?」

「マジで? じゃあ今度一緒にどつか出かける!」

「それは……嫌だけど」

なるほど。こういうところか。

「しっつかしまあ怖いよな。『追っかけ』とかさ」



6月21日。火曜日。

放課後、学校の帰りに商店街に向かった。天城が言っていた「マル久豆腐店」。とりあえず外からでも一度見ておこうと思ったからだ。ちなみに花村はジュネスのバイト、鳴上は吹奏楽部の部活でいない。女子二人は僕より先に帰ったので誘おうにも誘えなかった。

僕は部活に行かないのかって？ 部活に行く日も一緒にした覚えはない。ってかそこまで一緒だったらある意味ヤバイ。

「はああ。……はいはい！ ほら止まらないで！ 動いて動いて！」

「あれ？ 足立さん」

店の前にいた足立さん。僕に気づくと急にこんな事言ってきた。

「僕の代わりに店前の交通整理やって！」

……頼まれたから受けたけど、その代わりに一応、あえて言っておく。

「警察の仕事だろそれ」

少々口が悪かったがそこはあれだ。サボり癖を治してほしい僕の愛のムチ的な事だ

と思ってもらいたい。

◇◇◇

「……何かすまんな」

「いえ、暇だったのです。後で足立さんにきつく言つてくださいね。何なら菜々子ちゃんに言つてもらいますか？ 菜々子ちゃんに言われたら流石に少しは治ると……いえ、別に何も。すみません」

怖いよ堂島さん。目付き怖すぎ。よく一緒に過ごせるよね、菜々子ちゃんと鳴上。それとも普段は優しいのかな？ 菜々子ちゃんを使うような事を言つたから目付きヤバくなつたのかな？

足立さんと交通整理を代わつて早二時間。野次馬を追つ払つたりしたり、久慈川りせのお祖母さんが「すまないねえ」とがんもくれたので食べたり。時間が経つのはとても早かった。

もしたら堂島さんが来たのでワケを説明。

「それにしても野次馬が多いな」

「人気アイドルらしいですからね。僕も花村……友人から聞いたけどファンが多いとか」

「お前は違うのか？ 高校生の野次馬が多いからな。お前らみたいな年代はみんなそう

なのかと」

「どいつもアイドルオタクみたいと言わないでくださいよ」

それに僕は二年間の出来事は知らないんだから。一気にワープしてきたみたいな感じだから。

「そいつは悪いな。……さてと、足立の居場所に心当たりあるか？」

「……すみません。ないですね」

ジュネスのことは黙っておく。後でたこ焼き奢ってもらおう約束していたから。

「つたく、ガキに押し付けて自分はサボりかよ。はあ……。悪い、もう少しやってくれないか。急いであの馬鹿連れて戻るから」

ふむ。前言撤回しよう。堂島さんはたまに怖いけど、とてもいい人。

半分冗談で「バイト代的な出ます？」と訊いたらまさかのOK。思わず即答で引き受けてしまった。

堂島さん。早めに足立さん連れ戻してくださいね。

◇◇◇

「バイト代出るから即答で引き受けて？ 先輩って金欠なの？」

「返す言葉もございません」

「そう言えば先輩名前は？」

「有里湊」

三十分後。今度はまさかの久慈川リせが来た。いや、家に帰ってきたと言った方が正しいのか。

野次馬が少なくなる時間——夜ごはんの時間だと思えばいい——を見計らって帰ってきたらしい。流石、人気アイドル。

堂島さんと同じようにワケを説明したらまさかの家に招かれてしまった。これには僕も驚きがヤバい。ちなみに、手続きした後、鳴上と会って少し話をしたとか。……ん？ 手続き？

「八高に通うの？」

「そう。一年生……だから貴方を先輩って読んだの」

「なるほど」

それにしてもここの豆腐凄く美味しい。豆腐料理だらけで最初はちよつとうんざり気味だったけど、食べているとそんなの気にしなくなってきた。

……そんな時にこういう話するのもアレなんだけど、今雨降っていてマヨナカテレビありそうなんだよね。だから、一応言っておく。ってかいっそ本人に見てもらおう？

「マヨナカテレビって知ってる？」

「マヨナカテレビ……」。雨の日の深夜12時にひとりで消えてるテレビを見ると映るっ

ていう」

「知っていたの？」

「噂……知り合いから聞いた事あった」

このマヨナカテレビの噂は殺人事件とセットで騒がれている。別に都会から帰ってきた人が知っていた……でもおかしくはない。まあマヨナカテレビの場合は証言がすでにあるので噂ではないとこの町の一部の人は思っているとか。

「今日……一雨来るかも。一応見てみる事をオススメしとく。映った人が失踪する事件があったから」

「分かった。今日はありがと、先輩」

食事を終え、お祖母さんに礼を言つて外に出る。りせが外まで見送りに来てくれた。花村が知ったら羨ましがらるだろうな。りせが言うには交通整理のお礼、らしいけど僕にとっては十分過ぎるくらいお礼されたな。

「ねえ、先輩」

りせが声をかけてきた。少し、真剣な表情。テレビで見る「りせちー」とは、かけ離れた……でも少しだけりせの「本当」が見れた気がした。

「……有里先輩も、私が「りせちー」だから優しくしてるんでしよう？」

僕は何て答えればいいのかわからなかった。そうじゃないと思つていても、心の奥底

ではきつとそう思っている自分がいるかもしれない。

だから、僕はこう答えた。

「半々なかな。生りせちー見たいが半分。もう半分は……りせちーじゃなくて「久慈川りせ」はどんな人なのかを見てみたいって思ったから」

「……!! 有里先輩って、変わってる」

「自覚はしてる。反省や後悔はしない」

「ふふっ。面白い、も追加ね」

さっきの暗い表情から一変して笑顔になった。やっぱり、暗いより明るい表情の方がホッとするよね。

「じゃ、またね先輩。「豆腐買いに来てくれたらサービスしてあげる!」

「やった。……じゃ、また」

◇◇◇

その日の夜。マヨナカテレビを見てみると、水着姿の女子が映っていた。髪型的にりせに似ているのだが、鮮明ではないのでよくわからない。鳴上に電話して明日集まって話そうということになった。

6月22日（水）

6月22日。水曜日。

放課後。僕ら——完二除く——は教室で昨日のマヨナカテレビについて話をしていた。

「どう見ても『りせ』だろ！ 『久慈川りせ』！」

「どうだろう……」

「鮮明じゃなかったからなあ」

まあ僕らとしては鮮明じゃない方がいいのだが。それにしても花村の熱量凄い。

「間違いねーって！ つーか髪型とかまんまポスターのじゃん！」

花村……久慈川りせのポスター貼ってるんだ。

「あ……でも喜んでる場合じゃないよな。失踪するかも知れない訳だし……」

と言いつつまだ花村は興奮気味の様子。あんなにりせ（仮）の水着姿を見たのが嬉しかったのか。

それにしても、教室がやけにザワザワしてる気がする。少し耳を澄ませてみよう。

「ね、聞いた？ 久慈川りせ、ホントに来てるらしいよ！」

「ほら豆腐屋の『マル久』ってあるじゃん？ あれ『久慈川』の『久』なんだって」
「マジで!? 俺家超近いんだけど!」

なるほど、りせ関連か。こりや今日も店の前に足立さんいるのかな。またサボってた
りして。

「マル久さんすごい人だからだって」

「ぼいね。けど昨日のマヨナカテレビ本当に彼女だった? ……なんか雰囲気違くな
かった?」

「間違いないえって! あの胸……あの腰つき……そしてあのムダのない脚線美!」

そして花村は里中を見る。どうやら色々と比べているらしい。里中も若干呆れ気味
に「……なんであたし見んのよ」と文句を言った。

「鳴上はどう思うよ?」

訊かれた鳴上は里中を見る。流石に鳴上に見られるのは恥ずかしさがあるのか少し
顔を赤らめていた。

「……いいんじゃないか」

お褒めの言葉に里中は少し嬉しそう。つてか今はマヨナカテレビのはなしを……。

「ええー? 俺はないと思うなあー」

そんな花村の発言にイラついたのか、

「ジライヤああっ!!」

「ぐほおっ!」

里中に腹を蹴られた花村。とても痛そうだが僕には何も出来ない。何故なら「これは自業自得じゃね?」と思ってるからだ。

「ぶっ! あはははっ! 千枝、ジライヤは花村くんのペルソナだよ、千枝はトモエ!」
「いや知ってるから……」

天城、どこが笑いどころだったのだろうか。僕にはわからん。……わからなくていいのかな?

◇◇◇

一年の教室で完二を拾い「丸久豆腐店」へと向かった。天城と里中は用事があるため男子のみ。

「あ、湊くん。いやあ昨日堂島さんにキツく怒られちゃってねえ。ゴメンね、昨日巻き込んで」

予想通り店の前に足立さんがいた。……やっぱり怒られたか。少しぎまあとか思っ
てしまう。サボりの罰がきたんだ。

「交通課じゃねえ私服のデカがなんで出張ってんだよ」

完二こわっ。足立さんがビビってんじゃん。睨まない睨まない。

「え……あ。いや、えつと……ほら。稲羽署小さいし人手足りなくてさ。それに一応見て来いって堂島さんが。……じゃ、まだ仕事あるしまたね」

「あ、逃げた」

足立さん、スタコラとどこかに行ってしまった。……また堂島さんに怒られるな。知らない。

「おまえ……高一で現職の刑事ビビらすとかねーだろ」

「別に思ったこと言っただけっスよ」

「完二は目が怖い」

「なっ!? それは治しようがねえよ!」

「まあまあ」

何か毎回僕と花村が完二をおちよくって怖い圧で完二がつっこむ。そして鳴上が落ち着かせる。そういう構図が出来てる気がする。

「にしてもただごとじゃねーなこれ。警察出てくるって……」

「りせが狙われるって踏んでんのかもね」

「はい失礼。ちよつと道空けて。……おーい足立!」

すると堂島さんが人混みの中から現れた。

「いませんよ。スタコラとどこかに行きました」

僕が急に話しかけたーしかも少し親しげにーので後ろの三人は驚いていた。

「有里か。……ったく、持ち場空けんなつつたる……」

鳴上たちを見つけた堂島さんは少し目付きが鋭くなった。これが刑事の目とか言うやつか。

黒沢さんもたまにこういう目をしていたなあ……。

◇◇◇

まだ黒沢さんが何故か毎週土曜日は機嫌がよく値下げしてくれるのを知らなかった頃。

「黒沢さん、値下げしてくださいよ。高すぎですよこれ」

「本来なら危険物所持でしょつびくところだぞ。やむを得ない事情影時問のことを考えての値

段だ」

「……ぼったくり」

「何か言ったか？」

「いえなにも」

……あの目は、怖かったなあ。

◇◇◇

「おまえたちこんなところで……。巽完二……おまえら仲いいのか？」

「るせえな。いいだろ……」

「……まあいい。それより何してるこんなところで」

「こんな普通の豆腐屋がアイドルの実家って聞いたら確かめたいじゃないスカ！ 俺その……ファンだし！」

「……」

花村キヨドリすぎ。堂島さん地味に疑っちゃってるよ。絶対そうだよ。保身のために、少し僕も言っておこう。

「昨日りせが次来たら豆腐サービスって言ってた」

「有里おまえりせちーに会ったのか!？」

花村今そこ食いつかない。とりあえず頷いた。そしたらさらにうるさくなったので腹に一発やつといた。「うおっ……!」と呻き声が聞こえたが気にしない。

「……はあ……まあいい。いくら芸能人だろうがここは自宅だ。迷惑にならないようにしろよ」

堂島さん、あまり納得してない感じがするけど……。一応乗り越えたことでいいのかな。

「ふう。……堂島さんって鳴上の叔父さんなんだよね。僕ら疑われてる?」

堂島さんの反応を見たら疑ってるってすぐにわかるんだけど、家での様子は鳴上にし

かわからない。一応訊いてみる。

「うーん。少し」

「何か話したりはしたんすか？」

今度は完二に訊く。鳴上は首を横に振って否定した。特に話したりはしてないそう
だ。

「話すつて訳にもいかないだろ。『あの世界』のこと言ったら信じないどころかますます疑われて動けなくなつちまう」

「そうだね。……？ 店前、何か騒がしくない？」

僕は店前の声に耳を傾けた。

「んだよ。婆さんだけで『りせちー』いねえじゃん」

「もうこの町来てるつて聞いたけどガセネタ踏まされたつてとこかな。ま、楽しかったけど」

「あ、有里。……昨日会つたんだよな？」

花村が「念のため」と僕に訊いてきた。鳴上をチラツと見る。僕が何が言いたいのかわかつたのかしつかりと頷いた。

「ー鳴上もりせと会つたよな。」

「ーああ。」

そんな感じの会話が本当に出来てたらしいなど思いつつ花村に目線を戻して頷く。

「昨日会ったし、この町には来てる」

「そ、そう？ よかった……じゃなくて！ 人、ハケたし確かめに行こうぜ！ もう俺がなんか自腹で買うから！」

「がんも、オススメ」

鳴上がそう言うのと花村は少し嬉しそうな表情をした。どうやら花村は豆腐が食べられないらしい。よく知ってたね、鳴上。

「すんませーんツ！」

「はいはい。お客さんかい？」

「どもツス。なんか大変すね」

「いえいえ。おおきに」

お祖母さんが僕に気づいた。ちゃんと覚えていてくれたようでとてもニコニコと僕に笑いかけてくれた。

「昨日ぶりだねえ」

「そうですね」

「りせに用かい？」

「はい。……今日はいますか？」

お祖母さんは頷くと裏に行つてりせを呼んでくれた。

「完二の時といい、りせの時といい。お前は何で先に会おうんだろうな」

「知らない。てかりせに關しての出会いの会いは鳴上の方が先だつて本人が言つてた」

完二は僕の方が先に話したりしたと思うけど、りせは鳴上の方が先に話したから別に偶然だと思ふ。

「お祖母ちゃん。なに？」

「ほら、昨日の子が来てるよ」

りせがお祖母さんの指差した方を見る。僕に気づいたようだ。隣に鳴上がいるから二度びつくり。

「本物のりせちーだあつ!!」

花村うるさい。

◇◇◇

花村がやつと静かになつたところで僕たちはがんも四つ頼んだ。

「がんもね……ちよつと待つてて」

「なんか……テレビで見んのと全つ然キャラ違うな……。たまたま疲れてんのかな……？」

昨日、僕が少しだけ感じた違和感と同じことを花村も言つた。僕は最近のドラマや雑

誌を見てりせを知った。だから何となくしかわからないんだけど、りせの雰囲気が違うって感じた。

「いやーでも本物の『りせちゃん』だよ……来てよかった……。本日のミッション達せ
……」

「おい」

鳴上がチョップしたお陰か花村は本来の目的を思い出したようだ。

「あのつ……！ さ、最近変なことなかった？」

「変なこと……？ ストーカーとかって話？ ……キミたち私のファンってこと？」

りせは僕を見て言った。何故僕を見る。アレか、「貴方も？」とか訊きたいのか。

「……とこの町ぶつそうだから調べてるんだ」

鳴上が言うとりせは「マヨナカテレビ？」と訊いてきた。

「有里先輩が見た方がいいって言うってたから見てみたけど……昨日映ってたの私じゃないから。あの髪型で水着撮ったことない。それに……胸あんなないし」

花村がりせの胸見て「あー言われてみれば……」とか言っただけに必死に謝っていた。
うわあ、花村サイテー。

でもそんな花村の態度が面白かったのかくすつとりせが笑った。……うん、かわいい。

「とにかく、アレに映った人……次に誘拐されるかもしれないんだ。やぶからぼうじや信じられねえだろうけど……嘘じゃねえ」

「だから知らせなきゃと思つて」

完二と鳴上がそう言うとりせは意外とすんなり信じてくれた。

ちなみに、お豆腐をおまけで貰つた。心配してくれた札らしい。がんも四つ800円は有言実行、花村が支払つた。

◇◇◇

その後、僕は豆腐を家の冷蔵庫にしまったあと再び外に出てジュネスへと向かつた。夜ごはんの買い物だ。流石に豆腐だけじゃ寂しいだろう。

ついでにもう一度りせの様子を見ようと丸久豆腐店に寄つた。さつと見てさつと帰るつもり……だつたのだが。

「脅かすつもりはー」

「誘拐されるかもー」

りせと堂島さんの声が聞こえた。こつそり中を見ると足立さんもいた。「豆腐おからドーナツ」が入つてる袋を持つた。……美味しそう。

「四人連れでー」

でも今出て来たら堂島さんに色々訊かれそうだ。けどおからドーナツは美味しそ

う。しかも特売品。

「有里先輩……知ってます？ その人いました」

「はあっ!? って痛っ」

急に僕の名前が出てきたから驚いて手を思いつきりぶつけてしまった。とにかく痛かったことだけ言っておく。

「有里……」

「やあ湊くんじゃない。どうしたの?」

足立さんはいつも通りのほほんとしてるけど堂島さんの目がとても怖い。虎だよ虎。

「えーっと、それ美味しそうだなーって……」

「豆腐おからドーナツ買うの?」

もうバれてしまったので一袋買うことにした。

「あ、じゃあこれで……」

「待て有里」

逃げれなかった。堂島さんの声がもう怖い。目を見れないよ。

「さつき、久慈川りせと何話した?」

おう。刑事の目だ。しかし、何とかして乗り越えないと。僕が変なこと言ったら居候の鳴上にも変に疑われちゃうし、家庭にまで持ち込んだら菜々子ちゃんかわいそう。僕

が何とかしないと。少しビビってるけどシャドウとの戦いに比べればどうてことない。「最近誘拐事件起きてるから気を付けてって言っただけですよ。それに花村……あのヘッドフォンの人です。ソイツがりせちーファンだから余計に心配しちゃって。……ね」

「先輩の言った通りです。とても心配してくれました」

僕の言いたいことの意味をすぐに理解したのかりせはすぐに同意してくれた。すぐに察するとは、アイドル恐るべしってやつ？

「……そうか。行くぞ足立」

やっぱり少し納得してない感じだったけど乗り越えた。堂島さんは足立さんを連れて去っていった。

さて、僕も帰るか。

「先輩」

「ん？」

りせに呼び止められた。何だろう？

「……ううん。何でもない。また、豆腐買いに来てね先輩っ！」

相変わらずの暗い顔だったけど一瞬だけ笑顔を見せてくれた。

「じゃ、またね」

ちなみに、夜ごはん食べた豆腐はとても美味しかった。豆腐おからドーナツも美味しい。また買いに行こうとも思った。

そしてマヨナカテレビ。鮮明度が上がっていた。前回は顔は見えず何となくだったが、今回は顔もうっすらと見えてきた。これで確定した。次に狙われるのは……。

「次は……久慈川りせだ」

6月23日（木）　　6月24日（金）

7月23日。木曜日。

「昨日のマヨナカテレビだけど久慈川りせに間違いないな」

「顔映ったしね」

「本物より迫力あった氣イするけど」

「花村、顔のびてるよ」

僕たちはいつも通りジュネスに集まっていた。議題はもちろん昨日のマヨナカテレビだ。

「これでまたひとつわかったね。犯人に狙われるのは……テレビで報道された人」

つまり、山野アナの事件関係者の線は消えることになる。

りせは朝にちらつと覗くとまだ誘拐されておらずちゃんと店にいてを確認している。と言うことは、マヨナカテレビが鮮明になりバラエティっぽくなるのは本人が入れられたあとになる。

「あれって入った被害者自身が生み出してるのかもって前言ってたよね。どういうことが最初はイメージつかなかったけど今はそうなのかもって思う。

映像に出てくるの“もうひとりの自分”なわけだし、入った人の本音が無意識に見えちゃうのかも」

里中の考えに同意出来る。けど、あのマヨナカテレビは本人が入る前はぼやけて見える。あれは誰になのか、何のために見せているのだろう？

花村に訊くと花村もわかんないらしく、「犯人に訊け」と返ってきた。冷たいな。

「……結果的に予告に見えてる。っていう可能性はない？」

天城がそう言った。

「どういふこと？」

「被害者の心の中が映るなら犯人も……って思っただけなんだけど。誰かを狙ってる心の内が見えちゃうのかなって」

なるほど。人をテレビに入れられるってことは犯人も“同じ力”を持つてるわけだ
と思うから。……じゃあアマヨナカテレビレは犯人の“これから襲うぞ”っていう妄想？

「被害者とか犯人とかとにかく人の頭ん中が入り混じってできてるモン……ってか？」

花村がそう言いながら目線がどんだん完二に向いていた。……？ ああ。そういうことか。

「てゆーか完二くん。ついてきてる？ さつきからひとつ言もしやべってないけど」

「はえ……？」

「……寝てたんじゃないだろーな」

「そ……そんなことねえっスよ！ すっごい推理中!!」

「完二、ヨダレ」

僕がそう指摘すると完二はとても焦って口を拭きだす。完二が推理？ 嘘だね。

「ハア……あの世界つてき。ホントになんなんだろ。クマくんの説明も“たぶん”が多くて正直よくわかんないし。そもそも犯人はなんで人をテレビに入れるのかな？」

「入れたらシヤドウに襲われて死ぬ。殺す気でやってるのは間違いないとは思うけど」
「手口がテレビなのは警察が絶対に“証明できない”からつてことか？」

鳴上の言う通りなら恨みがあつたつてことかな？

「オレを恨んでるヤツなら掃いて捨てるほどいんな」

完二。どや顔するんじゃない。

「けど天城先輩とかあるんすか？ 人に恨まれる覚えとか」

「ないよ」

……天城さん。キツパリ即答で言ったな。

「や、雪子……誰でも知らないうちにつてこと少しはあんじやないかな……はは」
「ないよ」

だからキツパリ即答で言わなくても。

うーん、今まで被害にあった全員に共通する恨みってなるとな……全然検討つかない。

「ま、幸いまだ先回りできるチャンスだし。この際動機は後回しだ。捕まえてからしゃべらせればいい。とりあえず今ハッキリしてんのはりせが危ないってことだ」

「……つてことはまた張り込み!?!」

「おーよ! 今度こそ犯人に先回りしようぜ!」

花村、気合い入ってんなあ。

◇◇◇

「また来てねえ」

四六商店にて僕たちは張り込みの準備をしていた。

「やっぱアンパンと牛乳だよね」

「張り込みつつたらそれしかないだろ」

「定番だよね」

あれ? 自動販売機の前に足立さんがいる。

「足立さん、サボリ?」

「え、いやあ違う違う。まー……聞き込みの最中。つーかなんでこんな子どもも見張るハメに……。あ、いやいやなんでもない。堂島さんの指示とか関係ないし。それより君

「そこそ何してんの？ 買い食い？」

足立さんってホント口軽いよね。

「今から豆腐屋にりせちゃんの様子見に行くんすよ」

「あ……そうなんだ。ボ、ボクもちょうど行くところだったんだよ」

「じゃあ一緒に行きます？」

そう訊くと足立さんは頷いた。

「現職のデカだもんね。ちよつとは心強いかも？」

「うーん。どうだろう？」

里中と花村の会話が聞こえた。足立さんは弱そうだから。ちよつと不安なのも無理ないかな？

◇◇◇

足立さんが店内のりせと、天城と里中は店前を、男四人は少し離れた所を警戒していた。

「立ち止まんなよ！ 怪しまれんだろ！」

「や、もう何往復もしてっから……」

「疲れた。無理」

日が傾いて暗くなりかけた時、事件が起きた。

「あつ……あれ！」

店近くの電柱にしがみついている男がいた。その男は見つかったことに驚きすべるように落ちた。そして逃げた。

「く、くるな！」と、飛び込むぞ！ 僕が車にひかれてもいーのか!？」

男は今にも車道に飛び込む勢いだ。つてかひかれないならどーぞつて感じるの僕だけかな？

もしかして、「死」を間近で感じてない。とつてもある意味お幸せな人生なのに命を粗末に扱う所にムカついたのかな？

「お……おい。どーする?」

花村が訊いてくる。「正面から行く」と鳴上はすぐにそう言った。ま、それが一番手っ取り早いか。

「僕が気をそらすから、上手くやって」

「珍しいな、有里が立候補するなんて」

「頼むっス」

「任せた」

僕が頷き一歩前が出る。

「マジで飛び込んでじゃうぞ！」

「どーぞ」

僕は即答した。みんな驚いてる。もちろん、目の前の男もだ。

「死ぬんでしよう？ どーぞ。人生悔いがないってことですよね？ まあ飛び込んで助かる確率はありますけど……。どちらにしろ大事な人を悲しませるってことですよ？

貴方にはいますよね？ 両親とか、大事な人が。その人たちを泣かせるんです。

僕にはいません。両親いないし、大事な人もいない。だから、今日一日を大切に、友達を大事に。そう生きてきてる。なのに捕まりそうだから「飛び込むぞ」？ 僕にとつて「ハンパな覚悟での死」は戦って死んだ人への侮辱だ。腹が立つ」

ふう。スッキリした。一応敬語は使ったよ。

……アレ？ 何でみんな動かないの？ だったら……。

「はい。捕まえた」

「えっ……あっ!？」

「そいつー!」

「ぶぎゃっー!」

痛い。僕、殴りキャラじゃないんだけどなあ。剣でばっさばっさと斬るキャラなんだ。殴るのは完二とか真田先輩の役目だと思う。

僕が殴ったことで何故か固まってたみんなも動きだし、男を取り囲んだ。

「きつ君らね。善良な一市民にこんな乱暴なマネして……」

「るせえ！ 人様ぶつ殺しといてテメエはそれか!? ああ!？」

「ひよー！ タ、タンマ！ ぶつ殺してなんのこと!？」

男は「りせちーの部屋を見たかっただけ」と言っているがとりあえず足立さんに連れていつてもらった。

◇◇◇

「なあ有里」

「ん？ 何?」

足立さんが男を連れてったあと、花村が僕を呼んだ。

「さつきあの男に言ったのは……」

「全て事実。両親は事故に巻き込まれて死んだ。鳴上と花村には一人暮らしだって言っ
たと思う」

「そういう理由だったのか……」

「鳴上と同じ理由なのかと」

そうだったらよかったね。

このまま帰らせてくれなさそうだったので大まかに過去を話した。もちろん色々誤
魔化したり省いたりしたけど。

あの男に話してる僕はとても怖かったらしい。だからみんな動けなかったのか。その後、念のためマヨナカテレビを見ておくことで話がまとまり解散した。

◇◇◇

夜、マヨナカテレビの前に最後ちらつと確認しようと店に行った。

「えっ、いない!？」

「たまにあるけど少し心配でねえ」

お祖母さんに訪ねたら「いない」と言われて僕は驚いた。もしかして僕たちが男を追いかけてる間に落とされたのか？ マヨナカテレビの時間が迫っていたので教えてくれたお祖母さんにお礼を言っって店を出た。

けど、僕はすぐに足を止めた。お祖母さんは部屋へと戻り、今日は夜から雨が降っていて周りは誰もいない。僕は地面にある物が落ちてているのを見つけた。

それは、「久慈川りせ」の携帯電話。鳴上からりせの携帯のストラップががんもだつて聞いていたからすぐにわかった。クマがりせの場所を特定する手がかりになればいいと僕はお祖母さんに渡さず持って帰ることにした。本人に返せば問題ナシ。

「嫌な予感が外れればいいけど……」

◇◇◇

『りせチーズ！ こんにちはは久慈川りせです！ マールキュン！ この春からね、私進

級していいよ花の「女子高生アイドル」にレベルアップ! やたー!

今回はですね、それを記念してもうスゴい企画に挑戦しちゃいます! えっとね、この言葉聞いたことあるかなあ?

スウ トオ リツプウー

んもうほんとにいい? きゃあ恥ずかしー! ていうか女子高生が脱いじやうつて世の中の的にアリ!? でもね、やるからにはどーんと体当たりでまるつと脱いじやおつかなつて思いますつ!

きゃはっ、おつたのしみにー!』

◇◇◇

6月24日。金曜日。

放課後、僕ははジュネスに向かっていた。

「にしてもあの刑事さん^{足立}全然ダメだな。やつぱ俺らががんばらねえと……。し……。しかし……。す……。す……。すとりつぷとかつてマジか!? なんか回を重ねるたんびに企画どんどんスゴくなつてね!」

「落ち着け」

◇◇◇

「……。クマ、泣いてないよ」

テレビの中に入るとクマがポツンと座っていた。背中ごしだけど「悲しいんだな」とすぐにわかった。

「みんなクマのこと忘れて楽しそうに……クマ見捨てられた……。タイクツでヒクツしてたクマ。ドーセクマは自分がなんなのかも知らんダメな子クマ」

そうとう寂しかったようだ。そしてちやつかり里中と天城に甘えてる。

「いつか逆ナンしてもよい？」

「おー、いいぞおー！」

「……逆ナンのネタはもう封印しない？」

「それよか確かめてーことあるんだよ！ 今、こつちどーなってる？ 久慈川りせって

女の子来てないか？ なんかわかんない？」

「クジカワリセ……？ んむ……？」

花村に訊かれて鼻をヒクヒクさせながらウロチョロするクマ。クマの様子を見るにわからなかつたんだな。

「わかんないのか……？ なんかおまえの鼻、段々鈍ってきてない？」

「クマは何やつてもダメなクマちゃんね……」

あー、さらに落ち込んだ。

「オラ泣くなよ。お……俺の胸に来てもいいんだぜ？」

「オトコくさいのはお断りクマ!!」

そんなこと言う元気はあるようだ。

「……焦ることはない。自分のこともできることも、ゆつくり探せばいいさ」

「そうだね。役に立たなくなつたから捨てるとかありえない。クマは役に立つてる。安心して」

「……ありがとうクマ。センセイとハンチョーは優しいクマね……。いろんなことわからんけど、クマもつとがんばるクマよ」

「ー新たなコミュニティ。『星；クマコミュニー』」

「と言うわけでモフモフしていい?」

「どういうわけでそうなんだよ」

「ハンチョーならいいクマよ」

「なっ!? 俺はダメで先輩はいいってどういうことだよゴラア! ちつとモフモフしてるからつてチョーシ乗んじやねーぞ!!」

しばらくクマのモフモフ体を触らせてもらった。これは……コロマルに負けないモフモフだな。

「センセイ、ハンチョー。ハッキリとわかんないけど誰か入ってるよーな気は微妙にするクマ。そのコを感じれるような何かヒントがあればきつと前みたいになるクマ」

ヒント……か。

「それって完二の時間が『ハンカチ』と『コンプレックス』みたいなもの？」

「そうクマ。どちらかにする場合はエピソード的なのがいいクマね。最近クマの鼻が悪くなつて物だと大まかにしかわからなくて危険クマ……」

一応クマに『久慈川りせの携帯電話』を渡した。クマが鼻をヒクヒクさせている。

「んー、やっぱダメクマ。これだけだと方角しかわからんクマね。やっぱクマは役立たずなクマちゃんね……」

また落ち込んでしまったので慰めてから僕たちは情報収集のため解散することになった。

6月25日(土) シャドウリセ戦

6月25日。土曜日。

「悩んでるらしい。アイドルと、ホントの自分」に思うことがあったのかも」

情報収集の翌日。再びテレビの中にてクマに手に入れた情報を話した。

「……ホントの自分……。なるほど……。クマと同じ……。繊細でセンチメンタルなタイプね！ ……おっ!? なんかいいたクマ！ 見つけた？ クマ見つけちゃった!」

「ついて来るクマー！」と張り切るクマ。見つけたらしいので僕たちはさっそくクマについて行った。

◇◇◇

「何(こ)こ……真っ暗じゃん」

「ほんとに(こ)こで合ってる?」

「暗っ」

周りをキョロキョロと見渡す。とつても真っ暗で唯一足元がボヤけて見えるくらいだ。非常に危ない。

「クマの鼻センサーナメたらあかんぜよ！ ……と言いたいとこクマけどちよつと自信

ないクマ……」

すると一齐にライトがついた。辺り一面ピンクで何か目がチカチカしてる。

「うお……これはテレビに映ってた温泉街につきものの……」

「ストリップ……てやつスね」

「ストリップ!? はっはーん! 読めたクマよ……シマシマのやつクマね? ストリッ

プって……シマシマのやつクマね!」

「温泉街につきもの……ウチにはないからねっ」

「眩しい……」

「メガネしてても目が痛くなりそうだな……」

クマのボケを全員がスルーした。「偶然ではない、必然だ」とか厨二病チックな人ならば言ってしまうような光景だった。いつもなら器が果てしなく広い鳴上も流石にこれに触れるべきではないと思っただらしい。

「ねーボケだらツツコミなさいよ! もつかいクマ……。ストリップって……シマシマのやつ……」

「うっさいなこいつ……」

里中が眩く。今回は僕も同意だ。もう少し静かにしてもらいたい。

「……え、シマシマって? ごめんなんの話?」

目を細めていた天城が急にこつち向いた。睨みつけてる感じで怖かった。クマも怖かったのか「も、もう言わないクマ……」と言つて黙つた。

『フアンのみんなー！ 来てくれてありがとうとお！ 今日はりせのすべてを見せちゃうよ〜！』

……ええ？ どうせウソだろつて？ アハハ、おーけーおーけー！』

急に声が響いたと思つたらライトがひとつに集中した。現れたのは水着姿の久慈川りせ。つまりシャドウの方だ。

シャドウりせの頭上にはいつも通りタイトル名つぽいのがあつた。

『マルキュン真夏の夢特番！ 丸ごと一本、りせちー特出しSP！』

『ならここ……あ、でもここじゃスモーク焚きすぎで見えないカナ？ じゃあもう少し奥でウソじゃないってちゃんんと証明したげるネ!!』

「オ……オレもあんな風だったんか……？ うお……こらキツイぜ……」

「……完二」

「なんスか有里先輩？」

「正直完二と比べるとりせの方がまだマシだ」

完二がキョロキョロと他のメンバーを見る。みんな頷いた。女子は「ヤケクソ」、男子は「毒」——それとある意味精神攻撃——のバットステータスという嫌な出来事が中々

忘れられないのだろう。あ、クマは受けてないのか。

みんなからの領きに完二はがっくりと肩をおとした。

『じゃあフアンみんな、また奥でネ！ ホントの私……よく見て、マルキュン!!』

消えたシャドウリセの代わりに現れたのはたくさんのシャドウ。僕たちは倒しながら先に進む。

『そうだなあ……』

「!!」

天城救出の際の城で天城の声が聞こえてきた時と同じ、今回はりせの声が聞こえた。

『今の仕事は……ウン。とつても充実してるかな。小さな頃からずっと憧れてたから。今は毎日がとてと楽しいよ!』

理想の男性は……うーん……やさしくて清潔感ある人かな? あ、顔とか別に興味な

いかも。私逆にかっこいい人とかって苦手なんですよね。やっぱり人は“中身”が大切じゃないですか?』

◇◇◇

『キャーハハハハ!! 見られてるう! 見られてるのね、今アタシイイ!』

一番奥。ステージがあつてポールによっかかるとしてシャドウリセがいた。

『ウフフフ……。キャハハハ!! ほら見なさい、もつと見なさいよ! これがあたし

「！これがホントのあたしなのよおお!!」

「や……やめて!」

後ろを向くと本物のリセがいた。割烹着つてことはやっぱ盗撮未遂の男を追いかけた時に落とされたのか。

「もう……やめてえ……」

『ふふおつかしー やめてだって。んつもー! ホントは見てほしくせにぶんぶん! ざあつけんじやないわよ!! アンタはあたし! あたしはアンタでしょうが!!』

「違う……違うってば……」

リセは必死に否定している。でも、そんなのはシャドウには効かない。

『ゲーノージンのリセなんかじゃない! ここにいるこのあたしを見るのよ!! ベッタベタなキャラ作りしてヘド飲み込んで作り笑顔なんてまっぴら!』

「リセちー? 誰それ!? そんなヤツこの世にいない!! あたしはあたしよおお! ほらああたしを見なさいよおお!!」

「わ……たし……そんなこと……。違うのあれば、もう……やめてえ……。やめて……見ないで! あれは本当の私なんかじゃ……」

「ダメだ!」

『さーてお待ちかね。今から脱ぐわよおお! 丸裸のあたしを焼きつけない!!』

「私なんかじゃない!!」

りせがそう言った瞬間、シヤドウリせが笑った。

『そうよ、あたしはアンタじゃない。あたしは……あたしい!!』

◇◇◇

変化したシヤドウリせ。姿は大きな人型で……。

「あの頭のアンテナ? で突かれたら痛そう」

「そこ!? 今そこにすんのか!?!」

「気にする」

「わかるよ有里くん! 気にするよねっ!」

「天城……!! わかってくれる人がいて嬉しいよ」

「ダメだこいつら」

ツツコミを諦めた花村。諦めたらそこで試合終了ですぜ。

『我は影……真なる我』

「ペルソナッ!」

僕はオルフェウスを召喚して突撃させる。まずは様子見だ。相手がどんな能力なのか見極めないと。……けど、すんなりとはいかなかった。

『お客様〜 お触りは禁止です〜』

銃を持っている太ったーお腹に穴開いてるーシャドウが何体も現れて道を塞いだ。

「……………みんな隠れろっ」

鳴上が気がついて指示を出すのと同時にシャドウが撃ってきた。とても激しい攻撃だ。隠れるので精一杯だ。

「メガネ……………メガネ」

完二がメガネーと言うかサングラスーを落としたのか必死に探していた。

「イザナギー」

鳴上がシャドウの攻撃の隙をついてイザナギのスキル「ジオ」を使う。他のみんなも「ガル」や「アギ」、「ブフ」を使った。だけどシャドウには全部効かなかった。てか逆に反射してくる。つまり魔法反射、全属性だ。手強いな。

「だったらこうだっ！」

花村の声と共にジライヤが物理攻撃で倒していく。なるほど、魔法がダメなら物理でか。こういう時の花村の適応能力は素早いんだから。

「だけど数多すぎ……………」

里中が呟く。彼女の言うとおりに倒せるけど数が凄い。とにかく沢山いる。

「先輩！ 待たせたな！」

どや顔の完二。クマが見つ付けてくれたらしくきつちりメガネを着けている。

「こいつ！　タケミカツチ！！」

大きな完二のペルソナ、タケミカツチがどんどん敵を倒していく。

『あーあ、みんなやられちゃった。仕方ないな　特等席のお客さんには……メチャキツツイのを特別サービスよっ！』

「よしっ、あとはアイツだけだ！」

ジライヤが突っ込む。

『そ〜れっ！』

軽い身のこなしでジライヤの攻撃を避ける。するとシャドウリセの掛け声と同時に僕たちの体を緑の四角い円が通った。まるで「解析」してるみたいに。

「まさか……！　オルフェウス！」

嫌な予感した。もしも風花と同じ情報解析タイプなら一気に叩けば問題ない。けど……シャドウがそうだと気づくのに僕は遅かった。

『残念。あともうちよつと早く気づけたら当たったのにねっ』

とても陽気な声で僕に言った。

「花村に完二くん!?!」

里中が若干慌てたような声を出した。後ろを振り向くと二人は鼻血を出して倒れて

いた。

「ふたりの弱いところ分析されて精神にシヨックを与えられたクマ!!」

……大体想像はつく。

『アンタたちのことはすべてお見通し……キヤハハハッ!』

シャドウリセはボールを持ち上げる。何かの発射台みたいだ。

『じゃあ次はこちらから、いきまーすっ』

発射された弾はすごい勢いで僕らにダメージを与えた。ダメージだけでも凄いのに弱点属性を付与されているのでさらにやっかい。

『そして忘れた頃にやってくる精神攻撃、いっくよー』

もう一度緑の円がシャドウリセの周りから僕ら……いや。

「ハンチョー!」

「逃げろ!」

「僕」だけに小さな円が向かってきた。クマと鳴上が気づきとつきに叫ぶ。

『キヤハハハ!! 逃げられないよーだっ』

「有里……先輩!」

薄れていく意識の中りせの声が聞こえた。



周りをはがれき、そして炎。僕の両親の「死体」。僕が昔よく思い出す光景だった。そしてこれが、僕の運命へのスタートだった。あれ？ 何で悲しいんだろう。もうこんな悲しみ乗り越えたつもりだったのに。

ー足が動かなくなるのを感じた。

◇◇◇

次に浮かんできたのは荒垣先輩が……死んだ時だった。

『アキ………いつを……ま………』

料理が上手で、僕に嫌々ながらも丁寧に教えてくれた。料理が出来るようになったのは全部先輩のお陰なんだ。……何でこんなに戦う意思が失われるんだろう。真田先輩が前を向いて歩きだしたのに、僕は意外と根にもっていたのかな。

ー下半身が動かなくなるのを感じた。

◇◇◇

次はS・E・E・Sのみんななどの記憶。楽しかったり、悲しかったり。とにかく皆さんの記憶だ。屋久島、楽しかったな。綾時に真実を聞いた時、辛かったな。あれ、何でこんなこと考えるんだろう。

今はシャドウリセと戦う時だ。早く戻って戦わないとかなり手強いから足手まといになってしまう。それは嫌だ。

◇◇◇

「……帰りたい」

気がつくとは僕はそう呟いていた。そんなことを呟いた僕自身に驚いていた。鳴上たち特別捜査隊のみんななどいて楽しく、この世界の活動部のみんなと会えたし——まだ会えてない人もいるけど——結構この世界での生活を満足してる。

今の呟きは、僕が初めて「帰りたい意思」を示した時だった。そして何故だろう。ここにいとさらにその意思が強くなっていく。精神攻撃だから異世界に飛ばされるとかじゃないはず。

「帰りたい……帰りたい。……僕は何でここにいるんだっけ。何で戦っているんだっけ。……僕には関係ない話なのに。もう戦うのは疲れた。僕はたくさん戦ったんだ。

もういいよ。この世界の問題は……鳴上たちが解決するべきなんだ。そもそも僕は、この世界の人間じゃないっ」

——全身動かなくなったので僕は目をつぶった。考えるのが、疲れた。

僕の目に、光が映ることはなかった。真っ暗なのに、ひとつの影を感じた。

「……タナトス」

◇◇◇

〈side 鳴上〉

有里がシャドウリセの精神攻撃で全身氷漬けになってすぐ、有里のペルソナだろうか、何かが出てきてシャドウリセを攻撃している。

「何だコイツ？ 有里のか？」

「でも有里くんは氷の中だよ」

「うう……この氷硬すぎだよ……きつつー」

「つかアレはホントに有里先輩のつすかね？ 狂暴過ぎだぜ」

完二の言うとおりで俺も思う。アレは攻撃していると言うよりかは暴れているって感じがする。

『何なのよコイツ！ よけるので精一杯！』

流星にシャドウリセも想定外だったのか必死に避けている。それでもアレの攻撃はやまない。

「みんな、今の内に有里を助けよう」

俺がそう言うともみんな頷いて有里の周りに集まった。ペルソナで砕こうとしたり、「アギ」を使ってそうとしているが全然びくともしない。

「クマきち、何か方法ないかな？」

里中がクマに訊くがクマの方もわからないらしく、必死に考えていた。

「精神攻撃で生まれたのなら……もしかしたら『内側』からじゃないと砕けないかもし

れないクマね」

「内側……有里くんのこと、私たちって知ってるようで知らないってことなのかな」

天城が若干落ち込み気味に言った。余り悠長に考える暇はない。アレがいつまでシャドウリセを抑えていられるかわからないからだ。

「……何で僕は戦っているんだっけ」

「……っ!!」

「センセイ、どうしたクマ?」

「いいいや。……何でもない」

みんなには聞こえてない? 俺、だけか?

「……」 「この世界」の問題は鳴上たちが解決するべきなんだ」

また聞こえた。幻聴つてわけではないようだ。有里の声、俺にしか聞こえない。……ワイルド同士だから? だとしたら……俺の声も届けられるのでないか?」

「この世界」という気になるワードについても訊きたいことだし、試す価値はあると思う。

「有里!」

俺は大きな声で呼び掛ける。みんな驚いた顔で見えていたが気にせずに呼び続ける。

「有里! ……俺にはお前の声が聞こえた。だったら、俺の声も聞こえてるんじゃない

のか？ 俺とお前は、同じ「ワイルド」を持つ者同士繋がってる。そう思うんだ。……
それに、俺とお前は親友だっ」

「……」

「……!!」

有里の手が少しだけ動くのが見えた。よかった。俺の読み通りに聞こえてたんだな。気がつくとも他のみんなの表情はさっきの驚きではなく、見守るような……「頑張れ」と言ってくれているかのようだった。その「みんな」の中には、久慈川りせもいた。

◇◇◇

〈side 有里〉

「……有里！」

誰の声だっけ。タナトスの影らしきを見て以降真っ暗で何も見えない。

「……有里！」

また聞こえた。この声……。あともう少しで思い出せるのに。

「……俺とお前は、同じワイルドを持つ者同士繋がってる。そう思うんだ。……それに、俺とお前は親友だっ」

「鳴、上……」

そうだ。特別捜査隊のリーダー、鳴上悠だ。シャドウ陽介戦後あの時「親友だ」とか言われて握手し

「たんだ。大切な仲間で……親友。」

「もちろん、花村も里中も天城も……完二もクマもりせも。何だったら直斗だって。」

「くっ……」

出ようとしても体が動かない。それに何故かタナトスがそこにいる気配がする。僕が召喚したわけじゃないのに。でも、だったら使うべきだ。

「僕を……から出せタナトス！」

叫んだ瞬間、急に体が動くようになり、さらに光が一気に目に映った。一瞬意識を失ったりして倒れかけた。横を見たら鳴上が支えてくれていた。

「有里……！ よかった！」

「無事に……戻ってこれたんだな。」

「ん？ アイツ、いつの間に消えてる」

「アイツ……タナトスのこと？」

「やっぱお前のペルソナだったか」

鳴上のペルソナで体力を回復した僕はすぐにオルフェウスを召喚した。まだ少し疲れているけど何とか大丈夫。

『さっきのは何なのよお……。まあ……。いいわ。大きいのイクわよお!!』

……！ これはかなりピンチだ。避けられないうえに弱点属性だ。

「くっそ！　こんなことで」

「わ……私たちこれで終わっちゃうの？」

「ヤ……ヤバイまたくるぞ！」

「ダメクマ！　し、死ぬとか絶対ダメクマよ!!　クマはどうすればいいクマ……」

「クマ……逃げるんだ！」

「俺たちのことは構うなっ」

「センセイ……ハンチョー。そんなのダメクマよおお……」

僕らを守ろうとしてくれるのは嬉しいけど……この強い攻撃をクマ一人が防げるとは思えない。

「みんな……センセイ……ハンチョー……。クマにできること……何か……何かあるはずクマ……クマはまたひとりぼっちになるの……？」

いや……いやクマよ……ひとりぼっちはいやクマよ!!」

『さよなら……これで！　あたしわああたしイイツ!!』

「くっ……!!」

思わず目をつぶる。激しい音はしたけど痛みはこない。ってことは攻撃は当たってないのかな？

「ク、クマ！」

花村が叫ぶ声が聞こえた。恐る恐る目を開ける。クマが体を張って防いでいた。

「か……考えるより先にか……体が……どうなってるんじやわしやあ!?! ぬ……ぬおう」

す、凄い。完全に防いでいる。クマは少しづつ歩きだす。

「ト……トンデモないことをしてかしそうでクマってしまっている自分っ!!」

「クマ! テメ何する気だオイ!」

「クマの生き様……じっくり見とクマーッ!! ぬおおおおお!!」

「クマーッ!!」

クマが突撃していく。大きな音と煙のせいで無事なのかわからない。僕たちは固唾を飲んで様子を伺う。

「あんバカが……無茶しやがって……」

煙が晴れた。シャドウリセはクマの一撃に耐えきれず元の姿で倒れていた。

「センセイ……ハンチョー……クマ……」

「クマ!」

「い、生きてた……」

「みんなの役にたてたクマか……?」

「クマくんッ!!」

クマが生きていた。ただ……先程の一撃のせいなのか結構ペラペラになってしまっているが。

「たつたところじゃねーよ……命の恩人だ」

「ああ……オトコだけおまえはよ……」

クマはホツとしたようで、今の自分の状況に今気づいたようだ。とりあえず、死にはしないことがわかった。

「……起きて。ごめん……今までツラかったね」

りせはシャドウリせに手を差しのべていた。どうやら、もう大丈夫のようだ。

「私の一部なのにずつと私に否定されて……私……どの顔が『本当の自分』か考えてた……。けど、それは違うね。そんなふうに探してちゃ……『本当の自分』なんてどこにもない。

あなたも……私も……テレビの中の『りせちー』だって……全部……私から生まれた『私』」

6月25日(土) シャドウクマ戦

「りせ」

「あ、有里先輩。それにお店に来てくれた人たち……」

「あとで全部ゆつくり説明するから今は……」

「……? どうしたの千枝?」

里中の言葉が止まった。里中は僕たちの後ろを見ている。

「……クマ」

声をかけてみるが反応がない。

「本当の自分なんて……いない?」

クマの後ろに黒いモヤモヤが集まりだす。

『〃本当〃? 〃自分〃? ククク……実に愚かだ……』

モヤモヤが集まり形となって生まれのは……クマの〃シャドウ〃だった。

「クマのシャドウ……内面ってことだよね……」

「たぶんそう……。でも何かの……強い干渉を……」

『真実を得ることは不可能だ……真実は常に霧に隠されている。手を伸ばし何かを掴ん

でもそれが真実だと確かめる術は決していない……。

なら……真実を求めることになんの意味がある？ 目を閉じ、己を騙し、楽に生きてゆく……そのほうがずっと賢いじゃないか』

「な……何言ってるクマか！ おまえの言うことぜーんぜんわからんクマ！ クマがあんまり賢くないからってわざと難しいこと言ってるクマね！」

失礼しちゃうクマ！ クマはこれでも一生懸命考えてるの！」

『それが無駄だと言ってるのさ……おまえは「初めから」カラツポなんだからね』

シャドウクマの言葉はクマの思いや行動全てを「否定」することになる。

『失われた記憶などおまえには初めからない。何かを忘れているとすればそれは……』
そのこと〃 自体にすぎない』

〃そのこと〃 自体……つまり、「失われた記憶なんてない」ということを忘れていた、ということだろうか。

「ややこしいね。完二わかった？」

「全然っス！」

「だよね」

「わかってるなら何で完二に訊いたんだよっ」

「一番わかってなさそう」

「おいつ! ……でも、これだけはわかったぜ。クマの奴……すつげえ辛そうだ」
「うん、僕もそう思う」

僕は目線をクマの方に戻す。

『なら言つてやろうか。おまえの正体はどうせただの……』

「やめろつて言つてるクマー!! ヌオワ!!」

「クマさん!!」

クマがシャドウクマに殴りかかろうとしたら衝撃波みたいなのに弾かれた。

『おまえたちも同じだ……』

シャドウクマは今度は僕たちに向かって話しかけた。

『真実を探すから辛い目に遭う……。そもそもこれだけの深い霧に包まれた世界……。正体すらわからないものをこの中からどうやって見つけるつもりだ?』

「どういう意味だゴラァ!」

完二がイラついて怒鳴るがシャドウクマは至つて冷静だ。

『ククク……愚か者は見えていて飽きないな……。特に、関係ないはずなのにわざわざ付き合っている愚か者』はな……』

「……え」

別世界から来たのを知っているのはベルベットルームの人たちと何故か知ってるガ

ソスタの店員。どうしてシャドウクマが知っている……？ いや、別世界から来たことを知っている訳ではないのかもしれない。関わろうとしなければ、ということかもしれない。

『真実が欲しいなら簡単なことだ。おまえたちが「真実」と思えばいいだけさ……。ではひとつ、真実を教えてやろう……』

おまえたちは、ここで死ぬ』

地響きが鳴る。立ってはいれるけど揺れは結構スゴい。

『知ろうとしたが故に、何も知り得ぬままな……』

「みんなっ！ 跳んで!!」

りせの指示で一斉に跳んだ。地面を壊し現れたのは大きくなったシャドウクマ。所々空洞があり、目が怖い。

「……わっ！ 吸い込んでくるっ！」

里中が叫ぶ。吸い込みの力が強くなり僕たちはどこかに掴まる。

「ギヤーツス！ クマー!!」

クマだけはペラペラ状態だから掴むことが出来ない。体を巻き付けるようにして掴まっているけどいつまでもつかわからない。

「クマー」

「ク、クマくんっ!」

「クマきちー!」

やっぱあのペラペラじゃいつか吸い込まれるとは思ってた!

クマとか瓦礫とか吸い込んでるのに全然力が弱まらない。

「鳴上先輩。私と……」
「ヒミコ」を支えてて」

りせのペルソナ、ヒミコ。頭にアンテナがあり敵の情報を得る。支援タイプのペルソナ。

鳴上はりせを、イザナギがヒミコを支える。シャドウクマの「中」を探っているらしい。

「今度は……私が助ける番」

◇◇◇

りせがアナライズ始めて一、二分経った頃。集中していて動かなかつたりせがピクリと動いた。何か掴んだのだろうか?

「鳴上先輩……有里先輩も! 胸の辺り!」

「わかった! イザナギ!」

「僕も? はいはい……オルフェウス!」

イザナギの刃とオルフェウスの琴での物理攻撃がシャドウクマの胸にヒットした。

『グ、グオオオオ!!』

うめき声をあげ元の姿に戻っていくシャドウクマ。吸い込まれたクマも無事に戻ってきた。中で何か話したのだろうかクマの顔は少しだけ悩みが解決したような表情だった。

「クマ……クマは……自分が何者かわからないクマ……。ひよつとしたら答えはないのかも……なんてたしかにときどきそんな気もしたクマ……」。

「……」
「だけど……だけどクマは今、ここにいるクマよ……クマはここで生きてるクマよ……」

いつも元気のいいクマも、ちゃんと考えてる。みんながみんな、能天気ってわけじゃない。誰しも考えて、悩んで、苦しんでるんだ。

「……関係ないからって助けを求めている人を助けないわけにはいかないよ」

気がつくと僕はそうシャドウクマに言っていた。みんなの目線が僕に向いていてスゴい恥ずかしいけど、言わないといけない気がした。

「僕はもう……仲間を……親友を……死なせたくないだけだよ」

そう言えば最近「どうでもいい」って言った回数がかなり減っていた。確かに、たまにだけ本当に「どうでもいい」って思うことはある。

けど、シャドウ関連で人が死ぬのは嫌なんだ。

「クマはひとりじゃない」

横を向くと鳴上が僕の肩に手を置いていた。

「センセイ……ハンチョー。ホントに答え……見つかるクマ？ クマはもう……ひとり

で悩まなくてもいいクマか……？」

「なーにまさら言ってるんだよ！」

「そうだぜ！ 水臭えじゃねえか!!」

「この世界のこと探っていくうちにクマさんのこともきつと何かわかると思う」

「うんうん！ あたし達がいるんだから、安心しなよクマくん！」

「よ……よよよースケ……み……みんな！ クマは……クマは……クマは果報者クマ

！ およよよ……」

『……フ。自ら辛い道を往くか……それもまた……』

そう言い残し消えたシャドウクマ。そして現れたのはペルソナだった。

ペルソナー「キントキドウジ」。クマも……これで「ペルソナ使い」になったん

だ。

「それ……すごい力感じるよ……よかったねクマ……」

「りせちゃん！」

どうやらかなり体力を消耗したらしい。無理もないだろう。ペルソナを得て、回復す

るまもなくもう一戦したのだから。

「しばらくひとりにしてほしいクマ」

「お、おい……」

クマが珍しく何やら真剣モードだ。

「自慢の毛並みもカサカサだし、鼻も利かんで迷惑をお掛けしてるし……毛が生え変わるまでトレーニングにハゲしく励むクマ！ 誰もオラを止めることはできね！ あソーレ！」

クマが急に腹筋を始めた。花村が戸惑いつつ「きゅ……急にどしたんだよ……」と声をかける。

「話しかけないでほしいクマ！ あソーレ！ ふんっ！ ふんっ！」

「そつとしといてやろうぜ……男にはひとりで越えなきゃなんねえときがあるもんなんだよ……」

「そんなハイブローな話……？」

ともかく一件落着。僕たちは順番に現実世界に戻っていく。

「センセイ、ハンチョー」

クマに呼ばれた僕と鳴上はクマに近づく。クマは腹筋しつつ言った。

「センセイとハンチョーの力には……どこか特別なものを感じるクマよ。きっとクマに

もクマだけの役目がある……。

センセイとハンチョーといるとそんな気がするクマ。だから、それを探すために強くなるクマ！」

そして「クマーッ！」と大声をあげ腹筋のスピードを上げた。僕たちも元の世界に戻った。

◇◇◇

そして夜。恒例のファルロスと話そうのコーナー……。

眠いんだけど。このコーナーこそどうでもいいと思う。まあ、彼は楽しそうだからいいんだけど(死神コミユ6)

日常回3

6月26日(日) ～ 7月9日(土)

6月26日。日曜日。

やってきた毎週恒例「時価ネットたなか」

〔伝説風ソード、野草サブリ×2 9800円〕

〔お清めの塩×2、せがき米×2 3980円〕

どちらも欲しいとは思わないけどシール貯めたいし……。迷うなあ。

「今週は適当に安さでお清めの塩セットでいいや」



日曜日ってコミュの人いないから暇なんだよね。

「あ、有里先輩じゃないっすか」

「完二。何してんの？」

「いや暇だからこう……。ブラブラっと」

ありがとう完二。……と言うわけで今日は完二と過ごした。変な意味じゃないからね？ ただ釣りしたただけだから。(皇帝コミユ3)



6月27日。月曜日。

今日は花村とジュネスのフードコートに来た。思ったこと……バイトスタッフであり高校の女子上級生二人さ、悪女感強くない？

「あんな悪女感強い先輩、前いた高校にはい^{月光船}なかったとおも……うん、思うよ？」

「今の一瞬の間は何だよ」

「気のせい気のせい。あ、焼きそば食べたい」

「へいへい。まいどー」

何やかんやあったけど楽しかったからいつか。(魔術師コミユ3)



6月28日。火曜日。

今日は放課後に高台へと向かった。アイギスと話すため。事件について話す約束してしまった以上話さないと。ついでにと「なるほどなー」と言ってお願ひしたら言ってくれた。久しぶりに聞くと可愛いって思ったのは内緒で。(塔コミュ2)



6月29日。水曜日。

今日は荒垣先輩とジュネスでぼったり出くわした。

「先輩……買い物姿似合ってますね」

「主夫だ主夫」って小声で言ったら聞こえたらしく「あ？」と睨まれた。何でもないですよ、ホント。

買い物後ビフテキ串を食べつつ話をした。(月コミュ3)



6月30日。木曜日。

「最近来てくれなくてちよっぴり寂しかった」

「……ごめん。マジごめん」

これは本気で申し訳ないと思った。ちなみに、鳴上はちよくちよく来るらしい。(剛毅コミユ3)



7月1日。金曜日。

ゆかりからメールで「八十稲羽に鍛冶屋ある？」と訊かれたので商店街で合流。たいだらに向かった。何でも弓の調子が悪いから見てもらいたいとのこと。一応一般人(仮)の僕にそんな事言っているのか。(悪魔コミユ3)



7月2日。土曜日。

ジュネスに足立さんがいた。

「また買い弁?」

「世の中便利だよねえ」

「これどうぞ」

「野菜炒め？」

「……のキャベツ大盛りバージョン」

「ホント鳴上君といい君といい最近の高校生よくわかんないなあ」

さらに色々な話をした。足立さんってマジック出来るということを初めて知った。凄かった。ちよつとやってみたくなった。(道化師コミユ3)



7月3日。日曜日。

時価ネットたなか。今回は、

〔アルマダビスチエ、メガアミノドロップ×2 20800円〕

〔白桃の実×30、ソウルドロップ×10 2980円〕

結論は「今回は買わない」にした。



7月4日。月曜日。

今日は順平とキャッチボールをした。……ハズなのに何で今チビツ子達とドッチボールをしているんだろう。(正義コミユ3)



7月5日。火曜日。

今日は里中と特訓した。何故そんなこと思い付いたのかわからないけど急に「シャドウ倒した数競わない?」と言ってきた。競いたくない、めんどくさい。

通りかかった花村が審判をすることに。哀れだ。(戦車コミユ3)

「通りかかっただけでこんな目に合うなんて酷すぎないか?」

「知らんビジネス」

「それやめい」



7月6日。水曜日。

「鳴上君に味見してもらってさらに改良したからきつと大丈夫！」

「どこにそんな自信が潜んでいるんだろう……」

自信満々に言ったがムドオンがムドになっただけだった。まあ一歩前進？（女教皇コミュ3）



7月7日。木曜日。

「この八十稲羽には『ジュネス』となる所があると聞きました。ある時は人々の憩いの場。ある時は主婦の方々が戦争を行う場である、と」

「……誰から？」

「もちろん。マーガレット姉様です」

エリザベスとジュネスにいた。キョロキョロするから周りの人がこちらを見ていた。
（女帝コミュ3）



夜。今日は七夕だからジュネスで「七夕セット」が売られていたから買ってきた。かなりお買い得だった。

……何を願おうか。

「……あつた。僕の、願い」

紙に書いて笹に飾る。明日には片付けてしまうが今日の数時間位は本気で願ってもいいと思う。

——「無事に事件が解決しますように」



7月8日。金曜日。

7月突入したからなのかかなり暑くなってきた。

「暑い」

そう眩いたら偶然にも荒垣先輩が通りかかった。

「先輩ナイスタイミング」

「お前食べたいだけだろ」

「ほんなことない(そんなことない)」

あつさり料理のレシピを教えてもらい、さらに先輩の手料理を食べれて一石二鳥だった。(月コミユ4)



7月9日。土曜日。

昨日と今日で連続の雨。つまり久しぶりのマヨナカテレビの日。今日はどこも寄り道はしないでまっすぐ帰ることにした。



結論から先に言うとな誰も映らなかった。そのはずだ。ちゃんとりせは助けたしこれで死人が出てしまったらどうしようもない。

花村から電話がきて明日は日曜日だからジュネスに集まることになった。

7月10日(日) ～ 7月11日(月)

7月10日。日曜日。

ジュネスに行くともみんながもう集まっていた。

「有里……」

花村が手招きする。何やらとても焦って……あ。

◇◇◇

少し遡って朝早くアイギスから電話がきた。

『湊さん、朝早くすみません。ですが早く伝えなくてはいけないと思いましたので……』

「……? 昨日のマヨナカテレビには誰も映らなかつたから死人はいないはずだけど」

『それは私も確認しました。ですが……』

その後のアイギスの言葉は一瞬自分の耳を疑った。それくらい衝撃的だったから。

『死亡した方は……貴方の担任の、諸岡金四郎さんです』

「……」

「諸岡金四郎」——僕に鳴上、花村、里中、天城の担任。つまり……モロキンだ。
モロキンが……死んだのだ。



「モロキンが死んだんだね……」

「有里知ってたのか？」

「今朝聞いた」

みんなとても混乱していた。鳴上と完二はまだマシだったけど他の三人は弱気になつていた。

「やつぱり……警察も捕らえない犯人を俺らでなんて……無理だったのか？」

「諦めるな！」

「ああ……そのとおりだぜ。そもそも警察にや無理だろうってはじめたんじゃねえスか。オレらが腰砕けんかったら犯人は野放しになっちゃう！泣きゴト言ってる場合じゃねえ……オレらなりのやり方で前に進むしかねえんだ」

完二……カッコいいけど生意気ー。でも、お陰で士気が戻ってきたと思う。

「クマなら何か知ってるかもね。行ってみる？」

僕の提案にみんな意義無し。大型テレビへと向かった。



「あれ。店員さんがいる。珍しいな……急いでいるのに！」

花村が二人の店員の元へと話を聞きに行く。『熊田さん』という妙なのがいるらしい。

「う……うわっ。居る！」

里中の指差す方をみんな見る。

「ク、クマ!？」

マツサージチェアに座り気持ちよそそそうにしているクマがいた。

「クマ出れたんだね」

「ハンチョー。そりゃ出口あるから出られるクマよ。今までは出るって発送がなかっただけクマ」

僕たちと接しこつち側に興味が出て考えるより先に動いてしまった……と。

「あ、さつきお名前訊かれたから『クマだ』って言っただけクマよ」

なるほど。だから『熊田』……ね。

ーランクアップ。「愚者：自称特別捜査隊コミユ5」



場所をフードコートに戻して本題に入る。……つてか暑い。

「あつちの世界の霧が晴れたときまで中にはおまえだけだったんだな？」

「そうクマ」

マヨナカテレビにも映っていないかった。……とするとモロキンは“こつち”で殺された。

「ひよつとして……もう、テレビに入れても殺せないって思ったとか」

……何か違う気がする。そんな単純だったら、こんな事件すぐに終わると思う。

何か……何か引つ掛かるんだよな。

「手がかりほしいな。そろそろりせに話訊けるかも」

「ならならー、これをりせチャンに渡すクマよ。クマからのフォーユーって」

クマからメガネを受けとる。りせ用のメガネだ。

「ハア〜それにしても暑つくマー」

「おまえも飲むか？　と言ってもカラッポじゃ意味ねーか」

もしもそのまま飲んだらどうなるんだろう？ カラツポのキグルミに溜まるとか？

「……取る」

「カラツポじゃないの？」

「ハンチョー。クマをいつまでも「カラツポのクマ」だと思つてちやダメクマ。チエチャンと雪チャンを逆ナンするため！ クマは「中身のあるクマ」になったクマ！」

花村が必死に押さえるが「もう限界クマー!!」とクマが力づくで頭を取った。

「つフウー。いい……風！」

「「「「エエー!?!」」」」

「ホントだ。中身あるね」

ジュースもしつかりと飲んでいるしこれはもうカラツポとは言えないね。ガツツリ中身あるね。

「ところでチエチャン、雪チャン。着るものとかないかな？ ボク生まれたままの姿だから……」



クマの服に関しては女子二人に任せ男子達は四六商店でホームランバーを食べてい

た。

「ごめん、遅くなった……」

「イツエース、ザッツライト。イカガデスカ？」

おおー。大人しければ見た目はカワイイ好青年って感じた。

「ブリリアント！ だね」

「ハンチョーありがとー！ 言ってる意味よくわからんけど」

「ったく。完二、これで好きだけアイス買ってクマと分ける。俺たちちよつと豆腐屋行ってくるからここで大人しくしてろよ」

二千円渡す花村。ちなみにクマの服のお金は花村のツケらしい。よく店員売ったなそれで。



先に行った鳴上と天城を追いかけ豆腐屋に行くと見知った顔がいた。

「あ、直斗」

「あの時以来ですね。……そう言えば他の皆さんには名乗ってませんでしたね。僕は白鐘直斗。例の連続殺人事件について調べています。ひとつ……意見を聞かせてください」

い。被害者の諸岡金四郎さん……皆さんの通う学校の先生ですよね」

「……知るかよそんなこと」

「……まあいいです。とにかく……僕は事件を一刻も早く解決したい。皆さんのこと注目していますよ。それじゃいずれまた」

納得したのか、もしくははますます僕たちが事件に関わっていると思っっているのか……。いや、まずはりせから話訊くことが先決かな。



りせと合流して神社に向かう。

「家にいたことは覚えてるんだけど……気がついたらもう『向こうの世界』だった」
手がかりなし、か……。

「直斗に何か訊かれた？」

「事件のこと……でも『向こうの世界』のことは話してないよ。無駄だと思ったし」
ジュネスの屋上で気を失ったところを助けてもらった『ってね」

「まあそれが妥当だろうね」

「あの……その……」

……？ りせが何か言いたそうだ。

「あの……助けてもらっちゃってありがとね！ うれしかった！」

「おおー。流石アイドル。ゆかりもあんなこう、〃キャピキャピ〃って感を出せるのだからか。」

「その……最近の私疲れて少し暗かったから嫌かなと思つて……しゃべり方、へん？」

「あ、でも世間的には今の感じの方が私の〃普通〃なのかな……？」

「いやカワイイよ」

「うん。カワイイと思う」

「私……どの辺が〃地〃だか自分でもよくわかんなくなつて……」

「無理に決めなくても誰だつて色んな顔があると思う」

天城が言うと言説力あるな……。



「りせ。これ一応仲間の証つていうか……」

「そつか……先輩たち向こうでかけてたよね。メガネ……ありがと先輩。これで仲間だよね！」

支援ペルソナ「ヒミコ」を宿す久慈川りせが仲間になった。

ーランクアップ。「愚者：自称特別捜査隊コミュ6」

「うーっす」

あ、完二帰ってきた。ホームランバーをクマ5本、完二6本食べたらしい。腹大丈夫？
そしてクマは花村が連れて帰った。



「お待ちしておりました」

夜。眠るとベルベットルームにいた。ここに来るのは最初の「あの日」以来だ。

「『謎』の解決に徐々に近づいておられますかな……？」

「さあ……？」 『選択』をするのは鳴上だからね。僕はただのサポートだよ」

「そう言う割にはかなり親身になっているようですが……？」

「……」

「失礼。さて……道のりもやがて佳境に……しかしそれゆえに予想だにせぬことがいくつも待ち構えておりましたよ。面白くなつてまいりますな……フフ。では再びお目にかかります時まで、ごきげんよう……」



7月11日。月曜日。

そう言えば担任ってどうなるんだろう？ モロキンの代わりに誰かが担当するってことだよな。

「知っているとと思うけど諸岡先生が亡くなられたので……今日からあなたたちのお相手をする事になったあゝ」

柏木典子でえす」

気のせい……いや、屋久島で見かけた気がするぞ……！

「はてしなくうぜえ……」

「モロキンから柏木って……どんな濃い味のコンボだよ……」

周りから聞こえる声。うん、その通りだと思う。モロキンだけでも疲れるのに柏木先生……はあ。

柏木先生によると来週の定期試験もちゃんとあるらしい。さ、花村と里中を鍛えないと。



放課後。ジュネス、フードコート。

「あー来週もう期末かあ……。『赤』久々にくるなコレ……」

「また勉強会する?」

「有里センサー頼むー」

「あはは」

りせが笑った。僕と里中そんな面白い話してたっけ?

「りせちゃんー」

「ふふ。違うのごめんなさい。私……新しい学校でもどうせ当分は友達上手く出来ないって思ってたから……」

きっかけが事件じゃなければもつといい出会いだと思っただけ。

「事件の話だけどモロキンの件……どう思う? 夜中の番組には全然映ったりはしなかった」

鳴上が訊ねる。クマによると鼻が利かなくなつたが「いる」か「いない」か位は間違えないらしい。犯人の動機が一切わからない。お手上げ侍……かな。

「俺……白状するときは……。正直心のどこかでモロキンの奴が犯人かもって……思っ

たことあんだ。ウチから2人目って言うけど実際はもつとだろ？ それにあいつ“死んで当然”とか何度も言ってたことあつたしな……。

けど疑って悪かったなって……。ムカつく奴だったけどこんな死に方ありえないだろ……。モロキンだけじゃねえ……。かわいそうっつーか……。なんっつーか……。とにかく犯人許せねえよ……！」

花村……。うん、そうだね。どんな理由があろうとも、犯人は許せない。

—— “そう言う割にはかなり親身になっているようですが……？”

……僕は、ただ「明日」が見たいだけ。

「……直斗」

「どうも」

直斗が来て色々話していた。要するに犯人が見つかった。何で知っているのかは直斗が県警本部の要請で来ている。“特別捜査協力員の探偵”だから。犯人は“高校生の少年”で逮捕は時間の問題だということ。

直斗が探偵……。だから色々聞き込みしてたりしていたのか。

「みなさんの“遊び”も間もなく終わりになるかもしれない……。それだけは伝えておいたほうがいいと思つたので」

……は？ 遊び……。僕らがやっていることが“遊び”……？

「……事件が解決しますように」

「……っ!!」

「おい有里!」

……あ。

気がつくとは僕は直斗の胸ぐらを掴んでいた。でも、言わないと気が済まなかった。

「『遊び』なんかじゃない。僕には直斗の方が遊びだと思えるね。探偵だから何だ。直斗は謎を解くだけ。最後はどうせ人任せだ。僕たちの何がわかる? 謎を解き終わった直斗に皆何を感じると思う? 僕にとっては……『どうでもいい』」

手を離す。冷静になって思うと直斗つて女子で……女子の胸ぐらを掴んでしまったんだよね僕。根にもたないといいいけど。

そうだ。もう一個言わないと。

「親友の大事な人だつて殺されてる。それにね、約束してるから」

「ハンチョー……」

クマが目をうるうるときさせていた。まったく、こういう時はカワイイんだから。

「遊び……か。探偵は元々逮捕には関わりません。そういう点では『人任せ』は合ってると思います。それに事件に対して特別な感情もありません。」

ただ……必要な時にしか興味をもたれず、『どうでもいい』と思われるというのは

……確かに寂しいことですね。もう慣れましたけど……」
や、やっぱり言い過ぎた……。

「謎の多い事件でしたね。意外とあつけない幕切れでしたね……。じゃ、もう行きます」
そう言うのと直斗は去っていった。



「有里……」

「花村。どうしたの？」

「サンキューな。怒ってくれて。お前が言わなかったら俺がアイツの胸ぐら掴んでた」
「ハンチョー！ クマ感動したクマよー！ クマね、一生ハンチョーについていくつもりです！」

花村が多分一番犯人のこと憎んでるって言っても過言ではないもんね。確かに「遊び」って言われて怒らないわけないか。

そしてクマ。感動するのはありがとうだけど一生は……その、ちょっと遠慮します。
「それにしても有里君が怒るところ見るのはレアだよね」

「うんうん！ あーでもりせちゃんのお店見張ってた時何か覗こうとした男捕まえる時

も怒ってたよね」

天城と里中まで……ちよつと恥ずかしいからそろそろ止めてほしい。

「有里先輩カッコよかったっス！」

「うんうん！ カッコよかったよ先輩！」

完二とりせまで……。鳴上、お前まで言わないよな……？

「……」

「……鳴上？」

「え、どうした？」

「いや……大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ」

……少し、心配。僕は多分さっきの鳴上の表情や言動に、“心当たり”がある……と
思う。



夜。昨日すっかり忘れていた時価ネットたなか。

〔祝福の手、メガアミノドロップ×2 39800円〕

〔ミドルグロウ、業火の勾玉×2
24800円〕
……高いな。買わなくていい。